来る世界（とこ）間違え・・・いやそうでも・・・いややっぱ間違えだわ！

元・配達人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
来る世界間違え・・・いやそうでも・・・いややっぱ間違えだわ！

【Ｎコード】
Ｎ９９５９Ｋ

【作者名】
元・配達人

【あらすじ】
なんやかんやでＴｏ　ＬＯＶＥる世界で楽しく暮らしていた主人公の鬼島　政成、しかしララの発明により世界を渡ることにその世界はｆａｔｅの世界・・・はたしてどうなる？

この話しは

ブッ壊れ

オリ主無双

ハーレム？

キャラ崩壊

とかの危険な要素が満載です、ちなみに書いてる人のもう一つの話【来る世界(とこ)間違えてね？】主人公が主人公です、コチラの方はかなり更新が不定期になると思われますだいたい週一か週二くらい？

完全にやっちゃった！みたいな感じにもなります！そうとう注意しておすすみ下さい

それが無理という方は戻るをした方がよろしいかと思います。

プロローグみたいな雰囲気！（前書き）

前書き

少し短めです！というかやっちゃったよ・・・絶対ぐだぐだになるのが目に見えてるのに・・・

それでもできれば優しい目で見てやって下さい。

ホントすんませんでしたぁ！

あっ石は石は～～～～

プロローグみたいな雰囲気！

どうも鬼島　政成です！

えぇ俺は只今、なんかよくわからん空間におります！

ええそうですね！ララの発明の暴走です！まあ慣れたもんだけどね！

しっかし

「暗いな、おい？照明サボッてんのか？」

真っ暗なんでごぜえますよ？もうね？暗い！ああ太陽が恋しい

『タッタタタ！』

おっ？照明さんか？

「あのスンマセン！えと今日、担当の人が休みでして！」

ああ照明さん休みなんだ？

「えっ何？風邪かなんか？暖かくしないから～クーラーつけて寝たらダメだってアレほど言ったのに！」

「ええ私も口をすっぱくして言ってたんですけど・・・・っとそうじゃありませんでした！えとアナタ、復讐者（アヴェンジャー）に決まりましたから！」

えっ？何が？つうか何が？

「悪い意味がまったくわかんねえでごぜえますが？」

出来ればちゃんと教えて欲しいぞ照明さん代理よ？

「えっと・・・すいません！私も急にそう伝えてきてくれって言われたものですから・・・えと・・・確か・・・英霊のクラスだとか・・・詳しくはコレを、コレを持てば詳しい内容が頭に入ってきますので、それでは私はまだ仕事がありますので、すいません」

『タッタタタ・・・』

あれま！忙しいやつだねえ？つうか照明さんじゃなくて雑誌かなんかの担当だったんか？しかし英霊ね？俺バリバリ生きてんだけど？つうか英霊ってどっかで・・・

まっいいや、コレを持てばいいっつてたな？どれ

おっ！すげえ！成る程なぁ

「コーヒーを入れたらさらにコクがでるんだな・・・いや流石のマサさんも・・・・・・ってコレ、アレじゃね？美味しいカレーの作り方じゃね？」

その辺りのことがわかっても改善されんのは食卓の事情だぞ？いや助かるけど、ジジイ越えの為には必要だけど！

しっかし・・・復讐者（アヴェンジャー）英霊・・・クラス・・・うむ・・・どっかで・・・どっかで・・・あっ！

「ｆａｔｅだっけか？つうことは・・・聖杯戦争？ふむ・・・どうしよ？コレくらいしかわかんねえんですけど？」

いやぁなんか生前（生き返る前的な意味で）にゲーム雑誌かなんかでチラっと見た程度からなあ？誰が主人公かすらもわからんぞ？

いや待て！必ずしも巻き込まれると決まったわけではない！

いくら俺がバグキャラの生き返り野郎だと言ったって、そうそうわけのわからんことに巻き込まれるわけが・・・

「アレ？なんか言っちゃイカンことを言った気がする！」

そう具体的には、「押すな絶対に押すなよ！」みたいな？

『パカッ』

「穴・・・ね？・・・やっぱし・・・」

・

・

・

・

凜視点

「ンッンッン・・・ふうぅ・・・時間は・・・そろそろね」

飲み物を飲みつつチラッと時計を確認する、私の名前は遠坂　凜、魔術師だ、私が時間を気にするのは理由がある

聖杯戦争・・・七体の英霊（サーヴァント）を召喚し七人の魔術師（マスター）がそれぞれ一体

づつ使役して、全ての望みを叶えるとされる聖杯を手に入れる為の戦い・・・

いえサーヴァント同士の戦いはもはや人知を越えた戦い、故に聖杯『戦争』なのだ

私はそのサーヴァントの中でも最高とされるセイバー召喚する為に自分の魔力が一番高まる時間を選び、召喚の儀式を執り行おうとしている、触媒だって完璧！

私は最高の魔術師だという自負がある！最高の魔術師には最高のサーヴァントよね？

『パンパン』

「よし！」

顔を二度程叩いて気合いを入れ、召喚の儀に挑む！

『カチカチカチ・・・ボーンボーンボーン』

「時間ね・・・」

私の聖杯戦争の始まりを告げる、時計の音！失敗は許されない

「・・・告げる・・・告げる・・・」

来いセイバー！来い！

「告げる・・・告げる！」

『カッ！』

手応えあり！ってアレ？

「なんで？いない？」

目を開いたそこにはセイバーは疎か、どのサーヴァントの姿すらなかった

「失敗？いやそんなはずは・・・確かに手応えは・・・」

『ズドォォン！』

ッ！！今のは！

「居間のほうね！召喚位置がズレたの？」

とにかく行ってみなければ！

『ガチャ！』

私が急いで確認に向かった先には

「うい！あっコレ飲んでんぞ？はぁ美味い！流石だぜい！」

私が飲んでいた飲み物、ミ〇ミ〇を幸せそうに飲むガクラン姿の男がいた・・・・

・・・

マサ視点

いや落ちた先にミ〇ミ〇があったのは幸いでござった！心の平穏が保たれる！

まさにミ〇ミ〇さまさまだね！っとおよ？誰か来たな？ってやばくね？俺、不法侵入じゃね？通報されんじゃね？

でもなわざとじゃないからなぁ？きっと話せばわかってくれるさ！なにせミ〇ミ〇を飲んでたくらいだから！

ミ〇ミ〇好きに悪いやつはいねえのだ！

『ガチャ！』

おっ！きましたな！女の子？まっいいやではまずは

「うい！あっコレ飲んでんぞ？はぁ美味い！流石だぜい！」

ミ〇ミ〇飲んでることは言っとかねばな！

「アンタ誰よ・・・いやまさか・・・サーヴァント？」

サーヴァントとな？えとなんだっけサーヴァントって・・・あっ！アレじゃん！ｆａｔｅじゃん！つうこたやっぱどんぴしゃで巻き込まれたっつうことか？

まっいいさね？

「ちょっと早く答えなさい！」

おっと脳内コチャコチャしとったら何やら女の子ご立腹でござる！

「多分な？いや俺もな、なんかよくわからんうちに『アナタ復讐者（アヴェンジャー）ですから』っつわれてさ？

つうかそんなんいわれてもな？アレだぞ？俺、ジジイにケンカで勝ちたいくらいだぞ？そんなんで復讐者（アヴェンジャー）ってどうよ？」

軽すぎじゃね？つうか軽すぎじゃね？いやジジイにぁ勝ちたいけどさ？

「いきなり愚痴！ってアヴェンジャーってイレギュラー？ああもうセイバーが来るはずだったのに！なんでこんな変な奴が私のサーヴァントなのよ！あ～私の聖杯戦争が！」

そんなん言われても困るがな！つうかツッコんだり怒ったり落ちこんだり忙しいやっちゃなぁ

ん？そういやコイツも雑誌かなんかの表紙に載ってたな？つうこたぁメインキャラ？

まっいいや、それよか気になるポイントがある

「あっ！俺ん名前は鬼島　政成な？マサって呼んでやってくれや？一々『ウ』に濁点つけんのタルイだろ？つうか俺もよくわかってねんだし、後、ユーの名前は」

一々、アヴェンジャーなんて呼ばれたくねえでごぜえますからな！

「あっさり真名教える普通！いや私マスターだけど！あぁ名前は遠坂凛ね！ってそうじゃない普通は召喚されたら情報が入ってくるんじゃないの！」

ほうほう凛な？つうか完全にツッコミみたいだな！よしよし！あっそれと凛さんや？残念ながら俺の場合は

「いやコッチに来る直前に入ってきた情報、美味しいカレーの作り方だったぞ？

なんか担当代理が間違えたやつ渡したっぽい、どうする作る？カレー？」

美味いの作るよ？じっくり煮込むぞ？

「ハァァァ！！何よそれぇぇ！最悪よ！最悪だわ！なんでこんなのが私のサーヴァントォォォ！」

ひどくね？その言い草はひどいと思うぞ？つうか俺だってよくわかんねえんですよ？

っとそだ凛先生に聞いてみよう！

「凛先～生！質問！」

「ハァ～何よ？」

「サーヴァントとか聖杯戦争とかってんことを教えて下され！このままでは俺、ただのカレーを上手に作る奴だぞ？」

まあ他にも色々と作れるけどね！

「ハァ・・・そうね・・・わかったわ・・・えっとまずはサーヴァントね？サーヴァントっていうのはカクカクシカジカ」

ほうほう！成る程！ん？いや違うから！別に上手く説明できないからごまかしたわけじゃないから信じれ！

っとそうじゃなくて

「俺ばりばり生きてんですけど？完全に生身なんですけど？」

確かに一回死んでるけどもね！つか英雄とか言われるような奴でもねえですけど？

「はい！生きてるって！どういうことよ！」

ふむ！ならばここにいたる経緯おば

「カクカクシカジカってわけだ！」

「ハァ！ってことは何？第二魔法！！何よそれ・・・遠坂家の悲願を・・・」

おやまあ？なんかぷるぷるしてんな？つうか第二魔法ってなんぞ？異世界に行くことか？

ふむ・・・よし！

「ちなみに二回目！しかも俺一回死んでるぞ？生き返ったのだ！」

追い撃ちをかけてみた！なんか面白そうだし？

「何よそれぇぇ！無茶苦茶だわァァァ！」

おお絶叫してまんな？面白いぞ凜！

「まあまあ落ち着けって？飲む？」

「ハァハァハァ・・・アンタのせいでしょ！でも飲むわよ！ンッンッン！」

うむ！確かに俺のせいかもしれんな？まっミ〇ミ〇飲んで落ち着きなされ、まあ

「飲みかけだけどねぇ？」

「ブフーーーッ！！」

わあ綺麗！虹ですね！ココにも虹使いが！けど

「凜？女の子がはしたないぞ？」

「アンタのせいでしょォォォ！！」

凜の絶叫が響き渡った！うむうむ！すっごくイイ感じ！

・・・・

でその後になんとか落ち着きを取り戻した凜に

「聖杯戦争っていうのはカクカクシカジカよ・・・」

と説明を受けました！いや物騒な話しだねえ？まっジジイよりはマシだけどな！しかし俺としては

「戦争なんてもんは受験戦争だけで充分だよな？やだやだイヤな世の中ですな！」

まあ受験戦争もイヤだけどね！

「知るか！」

怒られた！全くミ○ミ○飲んでるわりには短気ですなぁ、でもいいツッコミ使いでもあるし！

「その調子で励め！頑張れば最高のツッコミ師になれるぞ！」

数々のツッコミ使いを見てきた俺が言うのだ間違いない！

「誰がツッコミ師よ！私は魔術師よォォォ！」

うむ！流石なり！っとそださっきサーヴァントの説明の時に言ってたことの確認をせねば

「質問～！俺って魔力だっけ？って凜から流れてんの？そんな気配さらっさら無いぞ？」

そうなんですよね？特に体に違和感とか感じねえんですよ、やっ

ぱ俺が生身だからか？

「えっ？あっそういえば・・・私の魔力、召喚の時に使った以外では減ってないわ・・・けど令呪はちゃんとあるし」

あっやっぱし？まっ細かいことはいいか？ただの確認だしな！よしコレからは

「エコロジーサーヴァント！マサと名乗ろう！時代はエコだ！」

エコカーとかめっさ出てるしな！

「魔力の代わりに私の精神力がガリガリ削られてるわよ・・・」

そこは気合いで乗り切れ！そのうち慣れる！

「あっ！そういえばマサ？アンタって生身だって言ってたわよね？強いの？」

ほう！戦力の確認ですか？つうか全然期待してねえですね、その目は！マサさんをナメるなよ！

「グーで地球を割ることが出来ます！」

「あっそ・・・あっ私疲れたから寝るわね？片付けしといて・・・ふぁ～」

おう！信じてねえでやんの！証明したろか！いややめとこ・・・いくらなんでもホントに割ったらシャレにならんし

まっとりあえずは

「片付けしますか？」

荒れた部屋の後始末をせねばな！なんやかんやで俺のせいでもあるし・・・

プロローグみたいな雰囲気！（後書き）

後書き

はいプロローグでした！【来る世界(とこ)間違えてね？】の番外とは若干違う流れになったり同じだったりすると思います

しかし大丈夫か？最初からエライことになってますが？

ですがコチラも頑張っていきたいなぁと思いますのでお暇なれば見てやって下さい。

第一話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

ええ！注意です！コチラの方の話は書いてる人のもう一つの話の【来る世界(とこ)間違えてね？】を見ていないとわからないネタとかが出てきたりします

それでもいいよ！というお優しい方は心を強くもちつつどうぞ！

第一話みたいな雰囲気！

凜視点

「んっん～～～～」

朝だ・・・部屋の中に日の光りがうっすらと入ってくる

今日もいい天気になりそう・・・・・・・・私の心以外は・・・

昨日、私はサーヴァントを召喚した、セイバーを召喚しようと事前に準備などもした

きっとセイバーが来ると思っていた

けど来たサーヴァントは・・・アヴェンジャーだった真名は鬼島政成、見た目は目つきの悪い高校生、服装もガクランだったし

まっまあ正直、似合ってはいたんだけど・・・

って違うわよ！

なんかマサを召喚してから調子が狂うわね？

でそのマサ、ああマサって呼ぶのは向こうがそう呼んでくれと言ったからだ

っと話しが逸れたわね、マサは何と言うか・・・一言で言ってしまえは、変な奴、更に言うなら規格外といった感じ

何せ生きて生身として召喚されたのだ、マサが言うには、なんかいきなり「アヴェンジャーだから！」とか言われたらしい

しかもその話しを聞く限り第ニ魔法を経験しているみたい、しかも二度も！更に一度目の時は死からの生き返り・・・

「なんて無茶苦茶・・・」

思わず頭を抱える、無茶苦茶にも程があるわよ・・・

もしかしたら夢？ああきっと夢なんだろうな、聖杯戦争にむけてナーバスになってたし

そうよ夢よ！きっとまだ召喚前の朝よ！あんな無茶苦茶で変なのが私のサーヴァントのわけがないわ！

よし！セイバーの召喚に向けて気合い入れないと

『パンパン！』

顔を二度程叩いて気合いを入れて居間へと向かうことにした

『ガチャ！』

うん！ほらねやっぱり夢！昨日の夢で見たみたいに荒れてないし

ああ・・・よかっ・・・

「おは！勝手に朝メシ作ってんぞ？ってどした？ガックリうなだれ

てからに？つうか顔洗ってきなされ？女の子でしょ！」

ああ・・・夢じゃ・・・なかった・・・

・

・

・

・

マサ視点

よし！中々のデキ！

ん？何をしているかとな？朝メシ作りですよい！

カレー？いんえ普通によくある朝メシです！カレー以外もちゃんと作れるのだ！

詳しくは・・・いややめとこ・・・なんかメタ過ぎるし・・・

ちなみにキチンと後始末はしときましたぞ！俺の後始末スキルをナメるなよ！学校は疎か街の破壊と再生を担当してたんだぞ！

おもに破壊はジジイが再生は全部俺だけどね！

ちなみにコレ結構いってるような気がするけどやっぱしメタだから詳しくは言いません！

『ガチャ！』

おっと凜さんが起きたようですな！

「おは！勝手に朝メシ作ってんぞ？ってどした？ガックリうなだれてからに？つうか顔洗ってきなされ？女の子でしょ！」

全く女の子ならそこんとこは気をつけなさい！

つうか何故にそこまでガックリなってんだ？

「はは・・・顔洗ってくるわ・・・大丈夫・・・そうよ・・・まだ頭が寝ぼけているのね・・・顔を洗ってくれば・・・」

なんか怖いぞ凜！こう負のオーラがコレでもかってほど出とる！

アレかな？やっぱ勝手にミ〇ミ〇飲んだのマズかったかな？

でも朝ミ〇ミ〇しないと調子がさ！それにまだミ〇ミ〇有ったし！

まっ後で買い足しときますか！確認したら財布持っとったしな！

ちなみに諭吉２０人程ね！前の世界で色々しながら稼いだのだ！

と脳内コチャコチャしてたら

『ガチャ』

「ふぅ～すっきりしたわ！けど・・・ハァ～やっぱり夢じゃなかったわね・・・」

おいコラ！

「人の顔を見て溜息つくのはやめれ！慣れてるとはいえ悲しいもん

は悲しいんだぞ！」

まっ多少だけどね？

「慣れてるっていう所からしてマサらしいわよ」

それゃどうも！っと

「凜、朝メシでけたぞ～」

朝メシ完成です！よくある日本の朝メシです！

「カレーじゃないわよね？」

「食いたいなら作るけど？」

「いらないわよ！」

とこんなやり取りがありつつも朝メシです！

「うむ！中々のでき！」

「むっムカつく程に美味しいわ・・・」

なんでムカついてんですか？そんなに俺が美味いメシを作るんが気にいらんのかい！

まっいいさね！よくはないけど！

「凜！ほれ生活費！っとコレってこっちでも使えるか？」

諭吉１０人程渡します！ついでに確認！
「ええ問題ないわ！フフ・・・フフ・・・
まっ最初はなんでアンタみたいなやつとか思ったけど、仕方ないわね！頑張りましょうマサ！」

おい凜さん・・・なんつうか・・・こう・・・資金渡した途端に・・・

「あからさまに態度が変わった凜にマサさんは驚きを隠せませんぞ！」

「なっ！違うわよ！私はただ前向きに考えようとしただけよ！ホントよ！別にお金が手に入ってラッキーとか思ってないから！」

嘘つけ！目がバタフライだぞ？更に本音がゴロッと出とるぞ？

まっいいけどね

「そういや凜って学生か？見たとこ俺と同い年に見えっけど」

話題転換！俺だって空気の一つや二つ読めるのだ！

「えっ！あっ私？私は学生よ穂群原学園って所に通ってるわ、学年は２年、マサは？ガクランからして学生みたいだけど？」

多少焦った感じだけんども転換は成功のようですな！にしても凜は２年か

「んじゃ多分タメじゃん？俺も２年だし！」

危うく進級しそこねる所でしたけどね！最後の追い込みは自分としてもよくやったようんうん！

「何を感慨深げに頷いてるのよ？」

「なぁに勝利の余韻を噛み締めていただけでございますよ！」

フッ・・・

「ああつまりは進級しそこなう所だったと？でギリギリで進級できたってとこかしら？」

「バレた！」

なんて勘の鋭いやつだ！もしやエスパー？

「魔術師よ！ていうかマサ見てたら普通の人でもわかるわよそれくらい」

「心読まんといて！それと頭悪くて悪うございましたな！」

チクソウ！いやホントはそこまで頭悪くはないよ？多分！勉強が苦手なだけだから！

なあみんなはわかってくれるよな！

「ハァ～こんなのがサーヴァントで大丈夫かしら・・・最悪死ぬわよね・・・私・・・」

おやおや！凛や何を不安になっておるか！つうか

「凜はどうかは知らんが俺ぁ凜のことダチだと思ってんぞ？」

「はぁ？いきなり何よ？意味がわからないわよ？」

全く凜はせっかちさんどすなぁ

「まっようするにダチが死にそうになってんのをほっとくマサさんじゃねぇってこった！安心しろや！死なしゃあしねえよ！むろん俺も死にませ～ん！」

最後のほうは微妙におどけ口調になったけど、どっちも本音だぜい！命は賭けても消費はしねえんですよ！俺はな！

「フフ・・・まっ期待してるわよ」

うむ！中々の笑顔！諭吉渡した時よかよっぽと可愛いやね

「なあ凜？」

「何かしら？」

「撫でていいか？」

撫でたくなりました！だって可愛かったんだもの！可愛い＝撫でる！もはや俺にとっては常識だ！

「ハァ？いきなり何言って・・・って撫でてるし・・・ああもう髪が乱れる・・・」

「いやすまん！可愛いと思ったら撫でる！
もはや本能なのだよ！」

「かっ！かわっ！」

むっ？赤なった！中々の染まり具合だ！うむ！凛には赤がよく似合うぞ！

っておやどうした凛？指を鉄砲みたいにしてからに？

「ッーーー！！食らいなさい！」

『ドンドンドン！』

おう！霊〇？すげえな！

『ガキンガキンガキン！』

まっ全然効かないけどね！

「ハァァ！なんでガンドが！って人体から発する音じゃないわよ今の！」

おやま！驚いてらっしゃいますな！うむ、では定番の

「バグだからね！カッチカチやぞ！」

しときました！

「バグって・・・でもマサにはピッタリだわ・・・」

「だろ？っとそういやさっきんはなんだったん？霊〇？やっぱ霊〇？」

気になるのでござる！漢なら憧れる技の一つだからな！

「違うわよ！アレはガンドよ！いわば呪いよ、当たれば風邪をひくとかそんなもんだけど・・・」

なんだ霊〇違うか？残ね

「まっ私クラスの魔術師が使えば銃弾並の威力は出るけど」

おい！

「それマサさんじゃなかったら死んでるよ？狙ってた場所、完全に急所ばかりだったしね！」

ホント、バグでよかったです！

「いいじゃない生きてるんだし、男でしょ細かい事は気にしない」

クッ・・・そう言われちゃあ仕方がねえ

「許してやるわ！マサさんは漢だからね！」

「そうそう！けど・・・意外とマサ・・・頑丈で使えるかも？」

うむ！その目は完全に盾にする気ですな！まっ構わんけど

俺の硬さをナメるなよ！ダイヤモンドどころの騒ぎじゃないぞ！

っとそだ

「今日学校行くのか？一応は弁当作ってっけど？」

確認！確認！ちなみに自分の分も作ってます！

「今日は・・・行かないわ・・・アンタに街の案内しないといけないし」

おっ！そうなん？

「いや悪いね？んじゃ俺ん生活用品なども買わんとなぁ・・・あっ資金はあっから凜に渡したやつから出さんでもいいぞ？アレは宿賃と食費だからな」

なんせ生身だからね！もう気分的には引越しと変わらんし！

「そっ！それじゃあもう少ししたら出ましょう」

あいあい！

・

・・

・・・

「それじゃあ出るわよ！」

「うい！」

アレから食後のミ〇ミ〇しつつまったり過ごして

出発となりました！

『ガチャ』

「行ってきま～す！ってコラ凛も言いなさい！」

「なんでよ？」

なんでよってこの子は！

「心の充足はアイサツからです！はい！」

「なによそれ？寧ろ贅肉でしょ？」

全くああ言えばこう言いやがりますね！凛

「贅肉じゃねえですぅ！寧ろ余裕の現れと思っときなさい！つうか心に贅肉なんぞあるかいみんながみんな糧となるんですよ！」

少なくとも俺はそうです！まっ後半はノリで言っておりますがね！

「ハァ？そんなものかしらね？しかたないわね・・・んっん行ってきます」

うむ！よきかなよきかな！

「じゃ行きまっしょい！」

「ええ」

玄関とこで多少コチャコチャしたが街へGO！

「凜？先ずは服が欲しいでござる！後バスタオルとか歯ブラシとか！」

「はいはい、それじゃあこっちね」

服やらなんやらを購入！

「うむ！んじゃ次は・・・ミ〇ミ〇だ！後食材！」

「そっちはマサから渡された生活資金から出すわ、一応私も半分くらいは出す」

「よかよか！気にするねい！」

「そっ？正直助かるわ」

と食材&ミ〇ミ〇購入！

でその後は荷物を一旦コインロッカーに入れて

街の探索！凜言わく

「いつ戦場になるかもわからないしね、それにもうサーヴァントを召喚している魔術師もいるはずよ、出来ればそれを調べたいんだけど・・・まぁそこまでは無理ね？」

との事です！

まあ確かにサーヴァントが誰かとかまではわからんですけどね！

んじゃ街を見渡せる！うむあのビルがよかろう！

「凜？アレん上に行きましょう！バッチリ見えるぞ！」

「そうね、それじゃ行きましょうか」

でビルん所へ！ってアレ？

「閉まっとる！どうする？こじ開ける？それとも跳ぶ？」

「は？こじ開けるはわかるけど、とぶって何よ？」

うむ！わかってねえっぽいです！ならば実体験が早いやね！

「こういうこと！」

『バッ！』

「へっ？何いきなり？」

凜ん抱えて！

「あらよっと！」

『ダン！』

大ジャンプ！

「うっ嘘ォォォォ！」

「残念ながら事実でござるニンニン！」

ちょびっとＮＩＮＪＡ！気味です！

「よっと！」

『タン』

はい着地！うむ！

「街ん様子がよく見えらぁな！」

いい景色だね！コレだけでも跳んだかいがあったわな！

っと凜？

「魔力使えば出来ないこともないけど・・・でも魔力使った様子ないのに・・・あっアンタはどれだけ非常識なのよ！」

フッ・・・

「バグだかんね？ちなみに二段ジャンプと空中疾走もできるぞ？」

「ホントにとんでもないわ！バグっていうだけはあるわね」

ハッハッハ！

「ちったぁ見直したかね？」

「正直少しはね？まあ性格はアレだけど」

ほっといたけで！直る見込みはもはやないから！

「でどうさね？なんかわかる？残念ながら俺ぁ魔術とかそのあたりはサッパリだぞ？」

切り替えの早さが自慢です！

「それに関しては期待してないから、ってあら？」

期待されてないのも悲しいものが・・・ってどうした凜？

「アレって・・・まさかこっちに気付いてる？」

ん？どれ！凜が見てる方に目を凝らしてみるかね、っておよ？

「あの少年知り合いか？」

「見えるんだ私は魔力で強化してるっていうのに・・・質問の答えは半分当たりで半分外れね」

ふむ、ってこたぁ

「同じ学校の同級生ってとこか？」

「そうよ？意外と頭回るわね？」

ほっといて！ってあの少年もどっかで見たような・・・メインキャラ？まっいっか

あの少年がこっちに気付いてるかってことだよな？ふむ・・・倍率アップ！むっ！なるほど！

「多分、半信半疑ってとこじゃね？ふむふむ・・・と・お・さ・か・い・や・ま・さ・か・な、だとよ！」

「わかるんかい！どれだけ非常識なのよ！」

いやそんなん言われても！つうか役にたったのに何故に怒られてんの俺？

「まっいいわ、正直助かったし、けどあの位置からここが見えるなんて」

「俺みたいにバグなんじゃね？」

「アンタみたいのがゴロゴロいてたまるか！」

確かに！けど少なくとも俺よかシャレにならんやつは一人はいるけどね！ええそうですジジイです！

奴ならここからブラジルにいる人物の顔とかまで見分けられると思うぞ？

っとジジイん事は置いとくとして

「とりあえずはこの場から離れましょう！今なら見間違いと思うかもしれんし？」

「ええ、そうね」

つうわけで

『バッ！』

「下に下りまぁ～す！」

「コレは落ちるよォォォ！」

そうともいうね！でもあくまで下りるだ！俺的には！

『タン』

「ほい着地！」

「思ってたよりは衝撃がなかったわ・・・けど次からは事前に言いなさい！」

「あいあい！前向きに検討しまぁす」

政治家的な答えです！緊急事とかあるしね？

「ハァ・・・思ってたよりマサが凄かったのは嬉しいけど・・・性格が致命的なマイナスだわ」

マイナススタートは慣れとるわい！っとそだった

「凜？さっきん少年、遠坂っつってたけどさっきは知り合いじゃねぇつったよな？つうこたぁ凜って有名人なん？」

結構気になってんですよね？

「ん？まぁね？こうみえても品行方正の才色兼美で通ってるからね？それなりに有名なんでしょ？」

品行方正ねぇ・・・

「才色兼美は認めるが品行方正ではない！確実にない！絶対にない！」

「煩いわね！ほっときなさい！」

いやほっとけつわれてもなぁ、うん才色兼美だけどね！確かに可愛いし、でも品行方正に関しては・・・ハッ！

「影でそうとう努力したんだな・・・クッ・・・」

「何かしらその涙、心のそこから腹がたつわ！」

凜の努力が胸に痛いぜ・・・・

・　・　・

でアレから荷物を取りに戻り帰宅となりました

まぁ人が見えなくなった所でガンド撃たれけどね！

まっ俺にはきかないけどね！

『ガチャ』

「はいただいま～！」

「ただいま・・・ハァ妙に疲れた」

ツッコミ疲れですな！初期のツッコミ役によくある症状だ！

「そのうち慣れる！頑張れ凜！負けるな凜！」

応援してみた！

「アンタのせいでしょ！！」

やっぱし怒られた！残念でぇす！けどナイスツッコミです！

っとそだ晩メシ晩メシ！あっちなみに弁当は食ったぞ？やっぱし凜が悔しそうにしてたのが印象的でした！

まっそれは置いといて・・・

「カレーを作る！晩メシはカレーです！何故ならそれがこっちにきた時に与えられた唯一の知識だからね！有効活用せねばなるまい！」

まっ正確には、もうちょいだけ教えてもらったけど、概ねそれだけですし

「ハァ～そういえばそうだったわね・・・
それじゃ私はお風呂入ってくるからよろしく」
「おう！まかせろ過去最高のカレーを作ってみせらぁ！」
燃えろ俺の料理人魂！
「あっ！後、覗いたら殺すわよ？」
っておいおい凜さんよう
「折角テンション上げてんのに水さすなや！つうか覗かんつうの！
なんか知らんけど俺ぁそういうエロティカル方面の感情ものっそい
薄いから
ぶっちゃけ凜がスッパで目の前通ってもノーリアクションですま
す自信があるぞ？」
まっ実際はノーリアクションじゃなくて服を着ろくらいは言うけど
「それはそれでムカつくわね？」
どうせいちゅうんじゃい！まっいいさね
「ほれはよ入ってきなされ、あっ俺も凜が上がったら入るんで！」
風呂は好きです！落ち着きます！
「はいはい！じゃっ！夕飯よろしく」

『ガチャ』

うむ！では早速作りますかね！

再び燃えろ！俺の料理人魂！

・

・

・

・

うむ！後ジックリ煮込むだけなり！チクッと味見したがかなり美味いぞ！我ながら！

まさに過去最高のカレーでござる！

『ガチャ』

おっと！凜上がったようですな！つか結構長風呂だったな？

「ふぅ～サッパリしたわ・・・でどうカレーの方は？」

ってコラ凜さんや

「なんでバスタオル一丁やねん、あっカレーは過去最高のデキですぞ！味見するか？」

っておよ？どうした凜？ガックリ肩落としてからに？

「ホントにリアクション薄いわ・・・っていうかカレーに負けた気分なんだけど・・・」

あっそういうこと？けどなんなこと言われてもなぁ、っとそだ

「服を着たほうがいいとマサさんは思うぞ？女の子なら慎みを持ちなさい！」

過去何度も言ったセリフで注意しました！一応はな？

「わかってるわよ！ちょっと試しただけよ！」

わざわざ試すなや！難儀なやっちゃ

「わかったんなら、はよ着てこい！」

「行くわよ！」

『ガチャ』

なんで俺が怒られてんだ？俺悪くねえだろ！寧ろ親切だっただろうに！やっぱカルシウムが足りてねえんかな凜さんは？

ミ〇ミ〇飲んでるってのに

まっ今はカレーだ！焦がしたらアウトだし！掻き混ぜろ！一心不乱に掻き混ぜるのだ！

そらそらそらぁ！

『ガチャ』

「ってマサ？アンタ何やってんの？」

むっ？服を着てきたか！つうか見てわからんのか？

「カレーを掻き混ぜとる！焦がしたらパーだかんな！」

「あっそ？あぁ後は私がやっておくからアンタもお風呂入ってきなさい」

むっ？そうか？助かる！

「じゃよろしく！焦がすなよ？」

「焦がさないわよ、ほら早く行きなさい」

うむ！着替えを持って・・・風呂だ！っとその前に

「覗いちゃや～よ？」

一応釘をさしときます！

「覗くか！！」

いや過去に覗かれそうになった経験があるもんで！ついつい

『ガチャ』

～俺入浴中～

「やっぱし風呂は最高だねぇ！」

で上がって着替えっと・・・

シット！やってもうた・・・またやってもうた・・・ピンポイントで上着を忘れた！
過去の失敗を繰り返してもうた・・・

いや大丈夫だ！凜だぞ？凜ならきっと大丈夫！そうさ！そうに違いない！信じろ！
うむ！なんか大丈夫な気がしてきた

よし！

『ガチャ』

「サッパリしたでござる！」

「あっ上がっ・・・」

ん？どうした凜？いや違う！違うはず！

『カチッ』

って何故に火を止める？あっもう充分煮込またってことだよな？
そうだよな！

「ちょっとそのまま待ってなさい上着を着たらダメよ！もし着たら令呪使ってでも脱がすから！カメラ取ってくる」

おう！マジか・・・つうか令呪って切り札ちゃうかい・・・流石

に使わすわけにはイカンですチクソウ・・・
・
・
・
・
大分パシャパシャやられました・・・つうか普通は逆だろ？もうコレ何度目だっけ？
いやもういいや
「まさかマサがあれだけイイ体してるなんてね、驚きだわ」
驚いたのは・・・いや正直・・・若干ではありますが予想はできてました・・・ええ上着を忘れた時点で何となくそうなるような気がしとりましたとも
でもね！少しくらいは希望を持ったっていいじゃないか！希望を持つことの何が悪いってんだ！
あっちなみにわからない人は・・・やめようメタだし・・・
「ほらマサ？カレー食べないの？折角作ったんでしょ？」
「食べる～！」
カレーに逃げました！じゃないと耐えられんとです！
で二人でカレーを食います！
「うむ！美味い！過去最高のデキ！しかしジジイには敵わねえ・・・高いぜジジイの壁は！」

「嘘でしょ？コレより美味しいカレーがあるの？私が食べたカレーの中で最高に美味しいわよ？」

あるんです！ふむ・・・具体例を出すか

「凛？このカレーは確かに美味い！自分で作ったもんながらな？けど仮にだこのカレーに麻酔薬が入ってたら食うか？」

「はぁ？食べるわけないじゃない」

ですよね～！俺も食いません、がしかし

「ジジイのカレー・・・つうか作った料理な？は・・・麻酔薬が入ってるとわかってても食っちまうくらいに美味いんだわ」

「はい！何よそれ？ってマサ？まさかアンタ・・・」

フッ・・・流石は凛だ察しがよい

「かなりの数やられた・・・目が覚めたら雪山とか砂漠とかはザラにあったよ・・・」

「アンタも苦労してんのね・・・ミ○ミ○飲む？」

「サンキュー凛・・・凛は優しいねぇ」

「そうでもないわよ・・・流石にほっとくのは人して終わりでしょ」

そう考えられるのが優しいってことですよ

その後のカレーは何故かちょっとだけしょっぱい味がしたおかしいな？カレーは辛いはずなのにな・・・

後、何故か凛が妙に優しかった、その優しさがちょっとだけ痛かったです。

第一話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

時系列とかどうだったかなぁ・・・ゲフンゲフン！ええ多分ズレなどが発生したりすると思いますが頑張っていきますので何卒よらしくお願いします。

感想などもありました是非に

第二話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

さあ！いよいよ加速してきました！何がと？いえキャラ崩壊です

まっまあ今さらですけど・・・・

今回もアレがアレですので強い心でおすすみ下さい。

第二話みたいな雰囲気！

凜視点

『ボフッ！』

「ふぅ～」

自室のベッドで横になりつつ、自分のサーヴァント・・・サーヴァント？アレってホントにサーヴァントなのかしら？

既にサーヴァントかどうかすらも怪しいわよね？でも魔力は送っていないけど令呪からの繋がりはちゃんとあるし

まっまあいいわ！マサの能力について考えてみる

まず驚くべきことは体の頑丈さだ、私のガンドを受けても平然としている、あの様子だとまだまだ余裕がありそう

そして脚力や視力、これも驚く程に高かった、数十メートルを軽く跳躍したり

魔力で補助をしてようやく顔を確認できるくらいの距離の人物から読唇術まで披露したり

しかも素の状態でだ、なんて非常識・・・マサいわくバグキャラって言っていたけど

確かにマサにぴったりの表現だと思った

性格は変人の一言につきるけど

でも悪い人物ではないわよね？

そう悪い人物ではないのだ、ただ非常に相手をするのが疲れるだけで・・・

「ハァ～マサが来てからペース乱されっぱなしよね？私って・・・」

私の信条として常に優雅たれとあるのだけどハッキリ言ってマサ相手には優雅と言えるような態度で接することは出来てない

それどころか今日なんてつい出来心とはいえバスタオル一枚でサーヴァント？とはいえ男の前にでるなんていう事までしてしまった

自画自賛みたいだけど正直、私は容姿にはそれなりに自信があったんだけど

「まさかアレほどリアクションが薄いなんてね・・・」

その時の事を思い出して、自分がなんて馬鹿な事をしたんだろう、という思いが沸き上がってくるけど

それ以上にこう怒りというか悔しさというかそんな感情のほう余程強い

なにせマサはチラっとこちらを見て軽く注意をしただけで直ぐにカレーを掻き混ぜ出したのだ

なんていうか

バスタオル一枚の美少女＜カレー

みたいな感じで・・・ン？何よ？自分で言うなって？煩いわね！ほっときなさい！

ンッン！みたいな感じで、こうプライドがね・・・

まあその後に意趣返しとしてマサの上半身裸の写真を撮りまくってやったけど

ン？何？私の趣味じゃないのかって？ちちち違うわよ！確か確かにマサはイイ体してたけど傷とかもいい感じでついてて、なんかこう興奮したけど

でもあくまで意趣返しだから！ホントよ！信じなさいよ！機会があったらまた撮ろうかな？とか思ってるけどホントだから！

常に優雅たれ！コレが私の信条だからね！・

・

・

マサ視点

「それはもう無理だとマサさんは思うわけですが？」

ン？アレ？何を言ってでしょうね？けどなんか言わんといけない気がしたんだよな？

あっちなみに俺はソファーで寝てんぞ？まっ昨日もだったけどね？

まっどうでもいいッスね？さて明日にそなえて寝るとしますかね？

・・・・・

朝だぜい！朝メシと弁当作るぜい！サクッと作る！

で朝メシと弁当作ったら

『ガチャ』

「ふぁ～おはよう」

凜が起きてきました、つうか眠そうだなオイ？低血圧か？つうかもうアレだな、コレで品行方正とかって詐欺だろ？

『ドン！』

『ガキン！』

「朝っぱらからガンドをぶっ放すのは淑女としてどうかとマサさんは思うぞ？」

「っさいわね、なんか不穏な空気を感じたのよ」

どうやらまたも考えを読まれたらしい、エスパーめ！ハッ！

「エスパー凜！始まるよ？」

「始まるかァァァ！私は魔術師だァァァ！」

うん知ってる！言ってみたかっただけだし？そういう時ってあるだろ？

まっ何はともあれ

「おは凜！朝から元気だな！」

目が覚めたようでよござんした

「ハァ～朝っぱらから疲れた・・・顔・・・洗ってくるわ・・・」

『ガチャ』

疲れた顔で顔を洗いにいきました、つうか最初に洗いなさいな、まっ今は朝メシを並べときますか

で凜が戻ってきたので朝メシです！

「今日も良い日だご飯が美味いってか？」

「確かに美味しいけどね・・・なんかやっぱり納得できないわ」

そこは納得しなさいよ、全く！っとそだ

「今日は学校行くのか？」

「ええ、あまり何日も休むわけにはいかないしね、優等生で通って

るから」

うむう、つうこたぁ俺ぁどうすりゃあいんかいね？留守番？いや性にあってねぇしなぁ、ふむ・・・まっとりあえずは

「頑張れ凜？優等生のメッキをつけるのは非常に非常に大変だとは思うがな！」

凜を励ましてみた！

「死ね！」

『ドン！』

『ガキン！』

ガンドを撃たれた！何故？心配したというのに？

「余計なお世話だからよ！後！魔術師だからエスパーじゃないから」

「先回りされた！」

チクソウ・・・マサさんションボリです・・・

しかし立ち直りは早いぜ！

「凜先～生！凜が学校行ってる間、俺は何してりゃいんだ？」

どちらかっつうとこっちが本題です！

「う～ん、ホントはついて来てもらいたいんだけどアンタ生身でしょ？霊体化できるの？」

霊体化か・・・フッ・・・確かにできんな！しかしマサさんをナメるなよ！

「霊体化とやらはできんが、方法ならある！」

「は？どんなよ？」

よし！ならば見せてやろう！

「そぉ～い！」

『バッ！』

「なっ！」

フッ・・・コレで凜は俺の姿は見えまい！フハハハ！流石は

「まっまる見えよォォォォ！」

『スポン！』

なっ何ィィィ！まっまさかあの伝説の男の最終兵器ともいえるアレを！

「ただダンボール被っただけでしょォォォ！そんなアホな方法で見つからないと思ってんのアンタはァァァ！」

むっ！アホな方法だと聞きずてならんな！
「凜！コレはアレだぞ？数々の潜入任務をこなしてきた男が使っていたとても由緒ある」
「うるさいわよ！却下！」
最後まで言わせてくれてもバチは当たらないと思うんですけどチクソウ・・・
「もういいわアンタは適当に街を探索しておきなさい、いくらなんでも人が大勢いる学校で仕掛けてはこないでしょ、もし何かあっても令呪で呼ぶから」
最終的にはそんな結論になりました、つうかそんなグッタリした顔で言われたらマサさん悲しんですけど？
でも負けない！
「学校が終わる時間くらいんなったら迎えにきたほうがいいか？」
とりあえずはそれっぽい案を出してみました！
「そうね、そうしてちょうだい」
うむ！ならその方向で！っとそだ
「学校ってどこにあんのかわかんねえんですけど？」
危ないとこでござった！昨日街は案内してもらったけど学校ん場所はまだ知らんのですよね？

「あぁ～、そうだったわね・・・それじゃ学校に行く時間になったらついてきなさい」

うむ！了解！

でその後は食後のミ〇ミ〇！あぁ最高です！まさに至福のひと時ってやつですな！

「ミ〇ミ〇飲んでる時はホントに幸せそうよね？常に与えとけば大人しくなるかしら？」

幸せだが大人しくしてるかは約束できんな？大人しい自分なんて想像もつかんわい

つうわけで

「無理でござるな！人生楽しくが１番ですよ？一回死んだ俺が言うんだ間違いねえ！」

「そういえばそうだったわね？でも楽しむのはいいけど少しは自重なさい」

うぃ！前向きに検討します！多分無理だけど！常に全力だぜい！

っとぼちぼち学校の時間じゃね？まっ俺が行ってた学校基準だけど

「凜や？そろそろ出ないと、いっけなぁ～い遅刻遅刻！ってセリフとともに曲がり角で転入生とぶつかって恋が始まってしまうぞ？」

「長いわよ！っていうかそんな出会いフィクション以外であるか！」

ですよね～？けども一つだけ

「魔術師ってフィクション丸出しじゃね？完全にファンタジーじゃね？」

「それをバグキャラのアンタに言われたくないわよ！」

・・・

む？気になるかね？では説明しよう！

「このガクランはかなり頑丈なのだ！滅多な事では破れないしな？それに・・・」

「それに？」

ヤベエ・・・どうしよう半端にタメをつくったはいいけど、特に理由らしい理由が思い浮かばん・・・どうする俺！考えろ考えるん

「特に理由はないわけね？」

「はい・・・スンマセン頑丈だから以外には思い浮かばなかったでござる」

チクソウ、この俺ともあろうものが・・・

「なんで落ち込んでんのよ？ほら行くわよ？」

「ういッス・・・」

次の機会までには考えておきます多分

そんな思いを抱きならがテクテクと学校へと向かいます

「なぁ凛？なんか俺、めっさ見られてね？もう穴が空くほどに見られてね？」

段々と制服をきた人が多くなってきたと思ったらかなりの視線を感じました、まっ実際はなんで見られてんのかはわかってんだけどね？二度目だし、まっようするに

「迂闊だったわ・・・普通は違う学校の制服来てる人がいれば注目されるわよね・・・ハァ・・・どうしよう」

ということですよ？しかしどうしますかねぇ？

むっ！閃いた！

「俺は凛の遠い親戚でこの街に来たばっか、んでガクランなんは服がまだ届いてなくてコレしかなかったからってのはどうよ？」

「かなり強引だけど何か聞かれたらそれで乗り切ることにするわ・・・」

時には強引さも必要さ！

「頑張れ偽優等生！」

「偽をつけるな！あっ！なっなんでもないわよ～アハハ・・・キッ！」

コレは大変ですな！って怖！めっさ睨まれた！ある意味ガンド以上の破壊力！

っと、おっ？見えてきたな？アレが凛が通ってる学校か？ふむふむ覚えた

「じゃ凛？学校ん場所は確認できたんで俺ぁ街を適当に練り歩いてくらぁ？弁当残すなよ？」

「アンタは母親か・・・っとマサ？コレ持ってなさい学校終わったら連絡するから」

む？離脱しようとしたらば凜に何かを投げわたされました・・・

ってコレ携帯か？まっ助かるけどな

「いつの間に手に入れたかは聞かんほうがいいよな？」

「わかってるなら早くいきなさいシッシッ！」

ヒドイぞ凜！折角気をきかせたっつうのに！今度、弁当のご飯の上にそぼろでヒンヌーって書いてやるからな！覚えてろ！

「何かしら今物凄く不快な気分になったわ」

「おっとイカン時間だ！じゃ俺はこのへんで！サラバだ！ニン！」

『シュバッ！』

ＮＩＮＪＡしました！いや違うから逃走じゃないから、ただちょっと無性にＮＩＮＪＡしたくなっただけだから！ホントだぞ？

・　・　・　・

で今は街をぶ～らぶらしとります、しかしアレだな、学校に潜入してた方が楽しかったかねぇ？

今さらながらに若干後悔・・・ふむ・・・今から学校に戻るか？
でもな、凜に怒られそうだしな

けどヒマだしなあ、ふぅむ・・・っておよ？

・
・
・
・

イリヤ視点

昨日、シロウに忠告しに街まで来たけど今日も何となく街まで来てみた

今はバーサーカーはいないけどね？たまにはこうやってゆっくり街を歩くのも悪くはないかな？

それに昨日から気になってることがあるしン？違うよ？聖杯戦争に関する事じゃなくってただ街で売っていたアイスが気になっただけ

昨日から食べたかったんだけど昨日は忠告したら直ぐに帰っちゃったからね？

でも今日はコレが目的だし？夜からは本格的に聖杯戦争の為に動かないといけないしね？

っと見つけた！さってと何を食べよっかな？

フンフンフ～ン！ん決めた！やっぱりバニラよね！基本が一番

「バニラ下さ～い！」

「はい！少々お待ち下さい」

楽しみ！昨日、ここで買ってた人も美味しそうに食べてたし、フフン♪まだかな？

「お待たせしました！２００円になります」

きたきた！

「はいお金」

ン？ちゃんとお金くらい持ってるわよ？子供扱いしないでほしいわね？こうみえて立派なレディーなんだから、まっ今は関係ないけど

「あの・・・お客様・・・外国のお金は・・・ちょっと」

アレ？

「なっなんでよ？お金はお金じゃない！私はちゃんと払ったわよ！お釣りはいらないからアイス頂戴よ！」

渡したお金はそのアイス１０個分くらいはあるんだから！

「ですが・・・外国のお金は当店では使えないことに」

「なんでなんで！お金でしょ！」

むう！融通が効かないわね！魔眼使っちゃおうかな？って私が考えてたら

『ポン』

って頭に手を乗せられた、私が驚いていたら

「俺もバニラ、ダブルな？あっ金はコイツん分もまとめて俺が出すんで」

って言って私の分のアイス代を払ってくれた

その人は黒い服をきたシロウと同じ年くらいの男の人だった

・・・・

マサ視点

いやついつい、アイス買ってまいました、けど見逃せなかったしね？

しかし、コノ子、外国ん子か？円を持ってなかったんかね？

っとなんか謎の少女Ｉがポカンとなっとるぞ？まっそらそうか？

いきなりガクラン姿ん俺がアイス奢ってんだものな？

でもまっ今は

「ほい！食いたかったんだべ？」

謎の少女Ｉにアイスを渡します

「えっあっありがとう」

うむ！円のことは知らんが、ありがとうが言えるのでマサさん的には全然ＯＫの良い子です！

「ダブルお待たせしました」

っと俺のもきたな！

「あっちで食おうや？」

近場にあった公園で食うことにします、あっ金は前払いで払ったからな？

っとアレ？

「どったの？」

「ねえなんでアイス買ってくれたの？」

むう？なんでとな？なんでと言われると何となくってなるんだが・・・ってこのシチュ前にもあったな？んじゃその時んセリフで

「知ってるか？アイスはな一人で食っても美味いんだが二人で食うと更に美味いんだぜい？どうせ食うなら美味い方がよくね？」

ちょっくらアレンジしてみました、けど概ねそんな感じ

「そうなんだ？フフ・・・じゃあっちで食べよう！」

うむ！ナイススマイル！アイス一個でそのスマイルならお釣りがでらぁな！

と思いつつ公園のベンチへＧＯ！

「美味えな？」

「うん美味しい」

二人でアイスを食べまするっとそうだ

「まだ名前言ってなかったな俺ぁ鬼島　政成な？マサって呼んでやってくれ？ユーはなんて名前なんだ？」

自己紹介です、で謎の少女Ｉの名前確認

「わかったマサだね？私はイリヤだよ」

ほう！イリヤな！覚えた！ってそういやなんか見たことある気が・・・いや微妙？メインキャラ？わからん？まっいっかそれよか

「やっぱし外国ん子だったんかイリヤっ子は？どうりで円を知らんわけだな？後で両替？だっけ？円に変えといた方が便利だぞ？」

「うん・・・さっきのでわかったかも」

うむ！賢い子ですな、ってそういやアレだな

「イリヤ一人か？危なくね？イリヤみたいん可愛い奴はアレな奴に

拉致られかねんぞ？」

危険ですぞ？最近は日本も物騒なんですから！

「エへへ可愛いかな？・・・でも拉致って今のマサのこと？」

「よしそのアイスは自動的に俺の物になりました」

ったく！いくらマサさんでも怒りますよ！確かに言われてみれば

アレだけど！

「わわ！嘘だよ嘘！」

全く！紳士たる俺に言う事ではないぞ！

「そっそういうマサも一人なの？」

むっ？話題転換の術か？ふむ！ノリましょう！

「まぁな？もうヒマでヒマで、危うくそこいらのヤク〇の事務所に

ケンカ吹っ掛けるとこでしたわい」

「マサ過激だね？」

おう信じた！素直だなオイ！

「冗談だぞ？」

「うん知ってる！」

なんですと！やるなイリヤっ子！意外とできるぜ！

そんなイリヤさんにはマサさんから

「ミ〇ミ〇が送られます！やったな！」

バニラアイスとミ〇ミ〇まさに乳製品の一大コラボレーションやぁ・・・キツ！ちょち後悔

「何コレ？飲み物？」

なぬ！ミ〇ミ〇を知らんとな！って外国ん子なら知らん可能性もあらなぁ、しからば

「俺の中での至高の一品でござる！美味いぞぉ！」

「ふ～ん！じゃ飲んでみよ！ンッンッン・・・ふぅ！うん美味しいかも？」

うむ！流石はみんなのミ〇ミ〇だ！外国の子のハートもガッチリキャッチだぜ！

「ってなんでマサの方が嬉しそうなの？」

フッ・・・わかってませんなイリヤっ子よ

「ミ〇ミ〇仲間が増えたからだな！よきかなよきかなってな？」

自分の好きなもんが褒められたら嬉しいってのもあっけどな！

「フフフ・・・マサは変な人だね？」

「そのセリフ、かなり言われてんな？まっ自覚はあんだけどな？コレばっかりはどうにもならんわ」

もはやどうにもならんのですわい、けど走り続けるぜ！ゴールはまだまださ！

「自覚あるなんてやっぱり変わってるよ」

いんですよい俺はそれでいくんだから・・・っとぼちぼち昼メシん時間だな？

ふむ・・・イリヤと食うか？アイス食ったばっかでアレだけんども

「イリヤ？俺ぁ弁当があんだけど一緒に食うか？二人分にはちと少ねえけど、アイス食ったばっかだから丁度いいべ？」

とイリヤに聞いてみる、したらイリヤ

「いいの？」

って小首を傾げなさる、うむ・・・撫でる！可愛いと思ったら撫でる！

「ンッ？子供扱い」

「違いますう！子供だからじゃなくて可愛いから撫でるんですう！」

全く！コレ結構言ってるよ？っとイリヤさん途端に笑顔だな？

「ならいいよ！エへへ」

うむうむ！でナデナデしながら

「さっきん話しだけどな？一人でボソボソ弁当食ったら美味さ半減だろ？けど二人ならあら不思議！美味さは四倍だ！、コレを弁当は一人よりも二人の法則と呼ぶ」

「アイスの時と同じこと言ってるよ？」

ぬかったわ！でも気にしねえでごぜえます！だってホントだしねえ、俺にとってはだけど

つうわけで

「弁当食う？食わない？さあどっち！チクタクチクタク・・・」

「えっと・・・」

まあ俺ん中では答えは一択だけど

「ブッブー時間切れ！強制イベント！マサと弁当を食べるが発生しました！」

「ぶぅ何よそれ結局は一緒に食べるんじゃない」

そういうことです！だって一人で弁当食いたくなかったんだもの！

寒空の下で一人で弁当とかって考えてみ？心の汗が流れてくるぞ？

あっけどアレだから別に俺が淋しかったわけでは

「淋しかったんだったら最初からそう言えばいいのに」

ギクリ！

「ちちちち違いますぅ！別にそういう感じじゃないですう！ただイリヤがお腹すいてんじゃないかなぁっていう紳士なマサさんの優しさですう！」

そう！そういうことだから！勘違いしないで・・・

「じゃ私、行っちゃおっかなぁ別にお腹すいてないもん、アイス食べたし？」

「スンマセン！嘘つきました一人で弁当食うのは淋しいんで一緒に食って下さい」

弱いとか言うな！ってコラ！イリヤっ子、その、してやったりって笑いはやめて！

「しょうがないなあ！じゃあ食べて、あ・げ・る！アイスのお礼もあるしね」

クゥ！悔しい！でもそれ以上に嬉しいです

さっ切り替えだ！弁当食うぞ～！

「ねえマサ？フォークは？スプーンは？えとコレ？お箸だっけ？コレも一つしかないよ？」

ぬおう！ぬかったぁ！しかし即座に閃いた！

「イリヤ？何食いてえ？」

「えっ？じゃコレ！でも・・・」

うむ！了解！なんかまだイリヤはわかってないっぽいけど

「はいア～ン！」

「うっうんア～ン！ング！あっ美味しい」

うむ！お口に合ってよかったわい、さて俺も食うか

パクっとな！うむうむ！

「マサ？間接だよ？」

「気になるか？別に直接ズキューンじゃあるめえし？まっどしても気になんなら俺ぁ手で食うけど？」

ってアレ？コレも何回か言ってる気がするような・・・まっいっか

「ううん別に気になんないけど、私一応レディーなんだけどな？」

「知ってるが？まあ俺ぁダチんたいしては大概こんな感じだし？」

デリカシーがないとか言うのはやめといたげとくれよ？一応少しくらいはあるような気はせんことも無きにしもあらずだから

「ダチ？」

むむ？イリヤさんどうしたんかね？ってそか？流暢に日本語喋っとったからアレだったがダチってのの意味がわからんのな？

「友達のこった！友達、やくしてダチね？コレ次の小テストに出るから覚えて帰るように」

「友達・・・私とマサがいつから？」

なっなっななんですとォォォ！ツッコミは！ってそこじゃねえよ！いやそこも重要だけど！

「アイス食って名前を教えあった時からですな！つうか今さらやろがい？っアレか？

もしかして俺の一方通行か？それゃあないぜイリヤさんよう？マサさん泣いちゃうよ？いい年した男が泣いちゃうぞ？いいのかな？見るにたえないぞ？」

アレ？なんか後半アレな感じだな？つうかアレ？どしたイリヤ？ポカンとしてからに？

「プッ・・・フフフ・・・アハハ！」

って急に笑いだした！何故に？そんなに俺ん様子がアレだったのか？若干不安になるだろ！

「アハハハハ！うんうん、わかった！私とマサは友達だね？じゃないとマサが泣いちゃうもんね？」

ホッ！よかった！しかしコレで！イリヤとダチになった、やったぜ！ってか、今のイリヤ、ナイススマイルです！

「イリヤ？撫でてるぞ？」

「事後承諾なんだ？でもいいよ友達だしね？」

とこうして俺はイリヤとダチになったのでありました。

そいでその後は二人で弁当を食いきって、暫く公園で遊んでおりました

まあ途中で

「そこのキミ？何をしてるんだ？ちょっと署まで」

と不審人物扱いされかけたけどな！イリヤに助けを求めてみたらニヤリと笑って

「助けて～～～さらわれる～～～」

って言われたけどな！まあイリヤ抱えて逃走しようとしたら

「嘘！嘘！この人、私のお兄ちゃんだから」

つって助けてはくれたけど、心臓に悪いわ！

いやまあぶっちゃけ逃げ切る自信はありまくりでしたけどね？

第二話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

白い小悪魔さんでした！気付いたら出てました、何故？

いっつもこんなんです！こんなのボクの（以下略）と思ったかたはスンマセンでした

既に凜もアレですけど・・・

けど頑張っていきたいと思いますので、お暇ならばまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非

第三話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

やってもうてます、今回もまたエライ事になっていますので心を強く持っておすすみ下さい。

第三話みたいな雰囲気！

どうやらイリヤ、迎えが来るらしい、丁度、凛から、はよ来いメールが来てたので
そのまま別れることに

「また遊ぼうなぁ～」

「うんじゃあねマサ！」

ピコピコと手を振るイリヤが可愛いかったです！

とコチャコチャ考えながら歩っていたらば到着です！

「うい！凛・・・・クッ・・・・」

「なんで泣きそうな顔！！」

いやだってさぁなんつうか・・・こう・・・なんつうか・・・

「他の生徒の方々に一生懸命、愛想笑いしていた凛を見てたらこう胸が痛くてな・・・クッ・・・・」

「本気でムカつくわね！ン！コホンなんでもないわよ～」

ほら現在進行系で頑張ってるし？

「魔法少女も大変だよな・・・頑張れマジカル凛！負けるなマジカル凛！」

「胡散臭い名前をつけるな！大変なのはアンタの相手よ！！あっなんでもないわよ～ちょっとコッチ来なさい！」

『グイッ！』

おう？人気がないところまで凜に引きずられました

で人気が無くなった所で

『ドンドンドン！』

『ガキンガキンガキン！』

無言でガンドを撃たれました、しかぁし

「残念ながら効果はないようだ！」

つったら凜さんプルプルしながら

「切り札の宝石・・・5番と6番を使えばなんとか・・・」

ブツブツとかなり不穏な事を呟きだしました、まあ多分きかないとは思うけどね！まっとりあえず

「落ち着きなされ凜さんや？味方相手に切り札はどうかとマサさんは思うぞ？」

と凜を落ち着かせます、それが好をそうしたのか凜さん

「そう・・・そうよね・・・ハァ～フゥ～・・・コイツは味方！どんなにアレでも一応味方！落ち着け私！常に優雅たれよ！」

なんとか落ち着きました！つうか優雅ってねえ

よし

「ミ○ミ○飲む？あっ飲みかけじゃないぞ？」

「いただくわ！ンッンッンッ！」

ミ○ミ○を渡してみた！豪快に飲んでますな！うむ！

「実に男前だぞ凜！」

サムズしながらナイススマイルでそういったら

「死ねェェェ！」

『ドンドンドン！』

『ガキンガキンガキン！』

ものっそいガンド連発された！まっきかないけどね！

っとイカンイカン！

「凜？今日はコレからどうすんでごぜえますか？」

「ハァハァハァ・・・本心を言えば帰ってゆっくり寝たいわ・・・

でもそういうわけにもいかないし・・・それに・・・」

お疲れだな凜さん？まだまだ序ノ口だっつうのに、まっそこはいいとして

「それに？」

それに、の続きを促します、したら凜、顎に手をあてて何やら考えモード、ハッ！まさか！

「先を考えてないとか？それ朝、俺が使ったぞ？」

テンドンか？

「違うわよ！マサじゃあるまいし！」

違うらしい、まっそれはそうでしょうね？っと続きプリーズ！

「ンッン！学校の屋上の所なんだけど魔術を使った後があるのよ、まだ詳しくわ調べないんだけど、もしかしたら学校関係者の誰かがマスターなのかも知れないわ」

なぬ？ふむ・・・つうこたぁ

「凜みたいにこん学校に通ってるダレかか先生が魔術師だっけ？つうことか？ン？アレ？凜？昨日、学校に魔術師は凜しかいねえつってなかったっけ？」

そうなんですよね？昨日、カレー食いながらそんな話しもしていたんです！そういうことにしといて！

っと今はアレなことを言ってる場合ではねえな

「そこなのよね？魔術師がいたんだったら気付くはずなんだけど・・・隠密性に長けてるか、もしくは魔力自体がとても少ないか・・・」

なるほど、なるほど・・・まっ今んとこはわかんねえっつうこったな

「じゃとりあえずは、その魔術？を使った場所ってのに行ってみようや？ほら犯人は現場に戻って来るっていうだろ？」

「刑事ドラマじゃないんだから、でもそうね・・・行ってみましょう」

うむ！わかってる所から片付けるだ！捜査の基本だぜ！・・・

はいやってきました屋上です！いつの間にやら日は暮れて辺りはスッカリ夜でございます

ン？いつの間にそんな時間が経過したのかって？それは聞かない約束だ！マサさんからのお願い！

「マサ？何をボーっとしてるの？ほらコッチよついてきて」

ある意味、必要なことだったのでござるよ！とか思いつつも凛についていく

「ここよ、どう何か感じる？」

ふむ・・・このソレっぽい落書きみたいなやつか・・・ふむ・・・なんつうかアレだな

「イヤな感じ？こう・・・昔・・・どこぞのゲリラとケンカした時の設置型の罠ににてるような・・・微妙に違うような？悪いよくわかんね」

「そう？ゲリラの下りは面倒だからスルーするとして・・・罠っていう表現はある意味では当たりかもね」

スルーされた！でも罠が当たりってどういうこっちゃ？

「解析してわかったけどこの魔術は最悪のタイプよ・・・」

俺がハテナ顔をしていたら凜がその落書きみたいなマークを見ながらイラついた顔でそう話す

「最悪ってどゆこと？」

とりあえず凜の話しの先を促す

「この魔術は学校全体を結界のように包んでいるわ、そしてこの魔術が発動したら結界内の人間は生命力を奪われる、で奪われた生命力はサーヴァントへ」

ハァァァァ！ちょマジか？

「んだそれゃ！胸糞悪！」

「ええそうね・・・胸糞悪くなるわ」

どうやら凜も同じ気持ちらしい、まっ幸いつうかなんつうか、その結界とやらが発動する前に発見できたわけだが

「凜？そのまま見過ごすってわけじゃないだろ？」

ニカッと笑いながら凜にそう聞いたら凜は

「わかってることを聞かないの？今から結界の基点を見つけて破壊していくわ、私が管理する街でふざけたことはさせないわよ」

やっぱりね！うむうむ！

「流石は凜！じゃ先生お願いしま・・・チッ」

「ン？どうしたのよマサ？」

いやね？どうしたもこうしたも・・・

「勿体ねえそれを壊すのか魔術師？」

明らかに堅気じゃねえ雰囲気のやつがいやがんですよね？さてどうしたもんか、うむ

とりあえずは

「ほら邪魔すんな、おやつは戸棚の上っていったでしょ！今日はケーキだから早く帰って食べな」

交渉に出てみよう！なんせ俺、紳士だから

「オマエは俺の母ちゃんか！」

おう？意外とノリが良いかも？つうかアレだなコイツ、全身青だな？もう真っ青だぞ？驚く程の青さ

「アンタ・・・サーヴァント？アンタがこの結界を仕掛けたの！」

コチャコチャ考えてたらば凜が、青男、通称ブルーレンジャーにそう問いかけております、したらブルーレンジャー

「さあ？どうだろうな？」

と惚けなさった、ふむ・・・

「凜？多分、これやったのブルーレンジャーじゃねえと思うぞ？」

「誰がブルーレンジャーだ！俺はランサーだ！」

うむ！ナイスツッコミ！やっぱノリいいな？

「マサ？アイツが仕掛けてないってどういうことよ？」

ふむ、まあどうゆうことつわれたらアレだな

「半分は勘だな？で半分はアレだ、さっきの『勿体ねえそれを壊すのか？』つう言い方がな？自分で仕掛けた感じの言い方じゃなかったっぽい、だろブルーランサー？」

つうことです！まあそういう言い回しをする人もいんだろけど

「混ぜるな！ラ・ン・サーだランサー！」
それにノリいいし？なんか堅気じゃねえけど気のいいやつっぽい
「なるほどね・・・アンタ意外と頭回るわよね？」
そいつぁどうも
「じゃランサーの疑いもめでたく晴れたことだし、俺ら今からコレ壊して回らんとイカンからじゃなランサー」
とランサーと別れ・・・
「ああじゃあな・・・て違うだろ！ああやりにきいな！オマエ、サーヴァントだろ！普通こういう状況であったらやる事があんだろ！」
られなかったです、惜しい！途中まではノってくれたのに、それにアレだぞ
「なあ凛？俺ってサーヴァントなん？いまいち自信ないんスけど？つうか俺に普通を求められてもなぁ？」
と思うわけよ、で凛もそんな俺の言葉にコクコクと頷きながら
「確かにね、私もいまいち自信がないわね？それにマサに普通を求めるのは深海魚が5年で陸上で生活をするより難しいことよね」
ですと！うむうむ・・・凛さんわかってるぅ！けど若干複雑です
「どういうサーヴァントだよ・・・」

あっなんか疲れてる？しっかしどういうサーヴァントか・・・ふむ

「カレーが得意なサーヴァント？」

「アヴェンジャーでしょ！」

でしたね～覚えてたんだな凜、俺なんてスポーンと抜けてたつうのに！

「アヴェンジャー？イレギュラーか？」

あっもうランサーさんや

「アヴェンジャーはやめれ、俺ぁ鬼島　政成ってんだ！マサでいいぜい？」

「アッサリ真名言いやがった！！」

えっそんなに驚くことなの？

「ランサーだったかしら？マサはイレギュラー中のイレギュラーよ、サーヴァントの常識根っこからひっくり返すようなやつよ？まともに相手したら疲れるわよ？」

お～い凜さん？言ってるこたぁ間違ってねえですけど向こう気遣ってどうすんの？

「ああ・・・よくわかったよ」

わかるんだランサー、ちょぴり悲しいじゃないか！

まぁいいさね

「でランサー君や、すんのケンカ？」

一応確認

「ああ・・・俺のマスターから言い付けでな一度はやり合ってこいだとよ」

あらま大変ね？しゃあねえ

「んじゃ軽く運動しますかね？下行くべ？凜下りるぞ」

『バッ』

「はっ？また？」

「あらよっと！」

『ヒュ！』

「コレは落ちるって言ってるでしょォォ！」

俺的には下りるなんです！

「あの魔術師（マスター）苦労してそうだな・・・」

うっせえでごぜえますよランサー君！

「よいしょ！」

『スタッ！』

とりあえずは下におりました、まあ上でもよかったんだけど回りん物壊したら凛がうるさそうだし、それに多分直すの俺だし

「ハァ・・・で大丈夫なのマサ？」

おやま？心配してくれてるようで、凛さん優しいねえ

そんな凛に言うこたぁコレだな

「バグキャラ、ナメんなよ？こちとらジジイ以外にゃケンカで負けたこたぁねんだよ」

ニカッと笑いながらそう言いましたしたら凛もニヤと笑い

「そっ？まっ無理はしないことね、危なくなったら援護するわ」

と軽い調子でそう返事を返す、うむ！そんくれえが丁度いいわな？あんまり重いのぁ俺には似合わん

「よっと！」

『スタッ！』

うむ！ランサー君も丁度のタイミングで来ましたな！さて

『ゴキゴキン』

いつものように両手の指を鳴らしながらクビを回し

「やりますかい？」

ランサーに声をかける、したらランサーも

「ああ！」

と神妙な雰囲気で頷きつつ手に持つ赤い槍を構えた

ふむ・・・

「そこはオマエ、アレだろ？槍も青じゃねえと？」

「知るかァァァ！」

なんかそれが開戦の合図になりました

・

・　・　・

・

凛視点

「知るかァァァ！」

『ヒュバババババ』

マサの余計な一言にツッコミながらランサーが凄まじいスピードで槍を突き出す、私なんかではその槍の軌道も見えはしない

しかしマサは

「そぉーい！素手ッバリアァァァ」

『ガキンガキンガキン』

気の抜けるような掛け声を上げながら『素手』で槍を弾いているのだ

ガンドの時から頑丈だとは思っていたけど・・・なんて規格外・・・

「堅すぎるわよ・・・」

思わずそう呟く、その声が聞こえたのかマサは

「バグだからね？カッチカチやぞ？」

と言いながら親指をたてサムズアップ、余裕ありそうね・・・

「ってコラ！よそ見すんな！つうかありえねえだろ！どんな体してんだよ！」

ランサーがそう言うのももっともだわ私もそう思うし

「タンパク質あたりだと思われますが？もしくはミ〇ミ〇？」

「「どんな体だァァァ！！」」

って何故かランサーと一緒になってツッコンじゃったじゃない！

「ダブルツッコミ！ナイスコンビネーション！」

つ・・・疲れるわ・・・実際に戦ってるのは私じゃないのに、別に魔力とか使ってないのに・・・こうガリガリ精神力が・・・

「ハァ・・・アンタが頑丈なのはわかったから・・・避けるとか攻撃するとかしなさいよ」

もう指示もおざなりになってきたけど仕方ないわよね

「うい！んじゃイクぜい？ランサー君？」

『ヒュッ！』

マサがそうランサーに言うと一瞬でマサの姿が見えなくなる

「なっ！！チィ！」

『バッ！』

ランサーにはその姿が見えていたのか咄嗟に後ろに飛びのき次の瞬間

『ズドォン』

ランサーが立っていた場所には大きい穴が空いていた、その穴の中心には当然というべきか

「おお！ナイスな反応！いい反射神経しとるな？ランサー君だてに

青くはないな！」

と軽口を叩くマサがいた、そんな軽口を叩くマサとは裏腹に私はマサの予想外、いえある意味、予想通りの戦闘力に驚きを感じてた・・・・・

ランサー視点

ふざけた奴だと思ってやり合ってみれぁあコイツはとんでもねえ奴だ

素手で俺の槍を弾き返すわ、俺でもギリギリわかるか？ってくらいのスピードで動くわ・・・正直な話し侮ってたが・・・当たりクジってやつか？

チッ・・・足枷がなけりゃな・・・それにコイツふざけた奴だけど結構面白えんだよなぁ

アッサリ真名ばらしたり、サーヴァントとしての認識すらも薄いし、魔力も一切感じねえ・・・完全に生身で俺と渡りあってんだぜ？

それにだ

「アヴェンジャー？オマエ、本気どころかかなり手え抜いてんだろ？」

「嘘・・・」

魔術師の嬢ちゃんが驚いてやがる、まぁ無理もねえわな、あんだけの動き見せられてまだまだ底どころか器の淵も見えやしねえ

で俺の問い掛けにアヴェンジャーはつうと

「アヴェンジャー言うなっつの！マサだ！もしくはマサナリ！オマエがアヴェンジャー言うんだったら俺はオマエんことブルーランサー言うぞ！」

どっかズレた答えを返してきやがった、つうか

「混ぜるなっつってんだろ！ランサーだランサー！オマエの事もマサって呼ぶから混ぜんなよ！」

と結局はマサと呼ぶことにした、そしたらマサは満足気に頷きつつ

「うむ！それでよし！ランサー君！で質問の答えだが答えはＹＥＳですな！俺がちぃと力入れてブン殴ってみろ『チタマ』がパカッと割れるぞ？」

とふざけた答えを返してきやがった、つうかマジか？

「じょ冗談だろ？」

思わずそう聞き返すとマサのやつは

「やってみよっか？」

つって拳を握り思いきり振りかぶりやがった、マジか！なんかマジでやりそうだぞコイツ！

「マサ！やめんかァァァ！」

『カッ！』

あっ嬢ちゃん令呪使いやがった！

「凛？冗談なんスけど？本気でやるわけねえでございましょ？いくらマサさんでも流石にせんですよ？」

冗談だったらしい・・・あっ嬢ちゃんプルプルしてんな、ありゃそうとう怒ってんな・・・

「こっこっこここのバカタレェェェ！どうすんのよ！令呪使っちゃったじゃないのォォォ！」

「もう凛はうっかりさんだな？」

「アンタのせいでしょォォォ！」

なんか俺のこと忘れてたギャーギャー言い合ってんな

・・・ククク・・・面白え奴らだわ・・・・

マサ視点

いやぁ凛さんご立腹ですな！ちょっとしたおちゃめだったのに、まあ令呪だっけ？三回限りの切り札を一回使っちまったものな

まあぶっちゃけ効果の程はわかりませんけど

にしてもアレだよな昨日、俺に上着、着させないために令呪使いかけてたよな？そういや、ふむ・・・

「なあ凜？昨日、使いかけてたよな？ほら・・・俺が」

「それ以上喋ってみなさい殺すわよ」

まあ怖い！すげえ殺気です！おっとろしいぞ凜！

「お～い俺のこと忘れてねえか？」

む？スマン！ランサー君ついつい

「ランサー・・・やっちゃいなさい」

ってアレ？凜さん？アレ？おかしいな、今ランサーに命令してなかった？

「嬢ちゃん？オマエ、一応アイツのマスターなんだろ？」

うんうん！流石はランサー君！いい所に気がついた！まあ俺的にはダチなんだけどね？

「ランサーもう一度だけ言うわ・・・殺れ」

アレ？いま『殺』れって言わなかった？マジでか？つうかものっそ怖いんですけど？

「マサ・・・悪い、逆らえねえ」

あらやだランサー君、従うんですね？でも気持ちはわかる！アレは怖い！

でランサー君、槍をグッと構えるさっきまでとは段違いの気迫です

「凜さ～ん？マサさんピンチよ？援護は？」

で思わず凜にそういってみました

『ドン！』

『ガキン！』

ガンド撃たれました、どんな援護？マサさん悲しいぞ？

「ククク・・・面白えやつだが、まっ仕方がねえんだ悪いが・・・」

アン？

「その心臓貰いうける！！」

『ギュオ』

うお！なんだぁ？必殺技の類か？なんかそんな気配が・・・って気配？アレ？

『パキッ』

「誰だ！」

あっランサーも気付いたみたいね？そうなんスよね？

「どうやら見られてたみたいね？つうかどうすんの？」

一応ランサーに確認してみます、したらランサー

「悪いが勝負は預ける」

『シュバ』

つってどこぞに行ってしまわれました、アレかなソロバンの時間か？

とかコチャコチャ考えていたら凜が

「マサ！何やってるの追いなさい！ランサーは目撃者を消すつもりよ！」

ととんでもないことを言う！ってマジか？

「凜！後からついて来てくれ！俺ぁランサーを追う！」

『シュバ！』

ギリギリ、ランサーの姿が見えたんでそのまま追跡！

校舎ん中か？ってマズッ！

「悪いな目撃者は消せって『今』の主の命令なんだ」

はっ？『今』？ってそれどこじゃねえですやん！

「じゃあな」

『ヒュ！』

ランサーが槍を目撃者の少年の心臓部分に向けて突き出す

『ヒョバ』

『ガキン』

が残念！ランサー君！

「滑り込みセーフ！ってか？」

俺ん方が早かったようですな！

「チィ！追い付いたか！っておいマサ？その少年・・・」

あん？何がさ？俺の華麗なスライディングにいちゃもんつけようってのかコラ！

ってアレ？

「ブクブクブク・・・」

わあ蟹みたい！って何故？まさか間に合わなかったというのか！

「おいコラ！ランサーどういうこった！」

とりあえずランサーに確認！

「いやオマエが滑り込んだ時にな・・・オマエの膝がイイ角度で入ってたぞ？」

えっマジで？俺のせい？えっ？マジで？

「ああランサー君・・・凜には内緒で」

「ああ黙っといて・・・あっ！・・・悪い俺用事あるから」

『シュバ！』

ン？どうしたんだろランサー君？慌ててやっぱソロバン塾があったんでしょうか・・・

「マサ？」

ギクリ！ああなるほど！そういうこと

「やあ凜さん、おはやいご到着でございますな？」

爽やかな笑顔で対応してみました！

「こっのバカタレがァァァ！」

『ドンドンドン！』

やっぱしダメでした！めっさガンド撃たれた！

『ガキンガキンガキン！』

まっきかないけどね！

・

・

・

・

で少々コチャコチャあったものの少年は無事でした！

いやよかったです！で気絶してる少年S！こいつ

「昨日、ビルから見たやつじゃね？」

なんですよね？やっぱメインキャラだったんか？

とか思いつつ凜に確認

「そうね・・・衛宮君・・・まっマサのせいで気絶はしてるけど無事ならよかったわ・・・」

ほう？って凜、名前知ってたんかい？って同級生ならそういう事もあらぁな！

「でどうする？」

方針を凜に確認

「とりあえず無事みたいだし・・・そのうち目も覚めるでしょうから・・・私達は戻るわよ・・・流石に疲れたし・・・」

ふむ・・・なるほど

「了解ッス！」

素直に従いました！ン？いや違うから衛宮君とやらが起きた時に上手い言い訳が見つかんなかったとかそんなんじゃないから！

ホントだよ？信じれ！

「ほらマサ！何やってんの行くわよ」

「うぃッス！」

とこうして俺と凜は家に帰る事にしましたとさ。

第三話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

ホントスンマセンでした！

とんでもなくキャラ崩壊！

コレから更に加速していきます・・・

ですが頑張っていきますのでお暇ならまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非

第四話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

いよいよ登場あの人です！まあ早くも崩れてますが

ええいつものように心強くもっておすすみ下さい

第四話みたいな雰囲気！

「あっ！マズイ！」

いやエライこっちゃ！マズイ事を思い出したぞな！

「ン？マサ？急にどうしたのよ？」

いやね・・・うん・・・

「さっきの衛宮君とやら、そのまま家に帰れたとしてさ、また襲撃されないかなぁと？」

ええそうなんです！さっきはランサーなにやらササッといなくなりましたけど、なんやかんやで戻ってくるのでは？と思うわけです！

「あっ！マズイわ！ああもう！マサ行くわよ！」

ガッテン承知！

『バッ！』

「凜？場所はわかるか？わかるんならナビよろ！」

凜を抱えて！GO！

『ズダダダ！』

「はやっ！てそれどこじゃないわね・・・次右！」

あいよ！ってアレ？なんで凜、家の場所知ってんだ？いやそれどこじゃないわな

今はとにかく衛宮君とやらの家へ！

『ズダダダ！』

・

・

・

・

士郎視点

『ガキン』

「チッ！うまく防いだな？」

クッ！なんだっていうんだ！

俺の目の前には朱い槍をもった男、さっき学校であったことは、実際にあったことだったってことか！

ここ最近、何か妙なことが起こってる気がすると思っていた

昨日、学校から出た時に知らない女の子に

「早く呼ばないと死んじゃうよ？」

ってわけがわからないことを言われて、詳しく聞こうと思ったら、女の子は走りさってしまい結局意味はわからずじまい

その後その日バイトだったからバイトに出たらその帰り道ではビルの屋上の上に学校を休んでいたはずの遠坂の姿を見た

隣にはガクラン姿の知らない男、すぐに二人の姿は見えなくなったから見間違えと思ってさほど気にしていなかった

そして今日、慎二に弓道場の掃除を頼まれて引き受け、一人で弓道場を掃除をしていた一人だったこともあって結構な時間になってしまい

急いで帰ろうとしていたら

『ガキンガキンガキン』

って何か堅いもの同士がぶつかり合う音が聞こえた、少し気になったので見にいってみれば

そこには

『ヒュバババ！』

人の規格を大きく越える動きで槍を振るう青い男と

『ガキンガキンガキン！』

人ってなんだっけ？と思わずクビを傾げたくなるようなガクラン姿の男が戦っていた

っていうかアレってどう見ても素手で防いでいたような・・・

思わず

「なんでさ・・・」

と呟いてしまったことは仕方がなかったと思う

まあ幸いにも、その時は俺の呟きは聞こえなかったようだったけど

でしばらくの間、青い男の槍をガクラン姿の男が防いでいたのだが、変化が訪れる

ガクラン姿の男が初めて攻撃を仕掛けたのだ

いや俺なんかの目では全然見えなかったから仕掛けていたが正解だ

何せガクラン姿の男が消えたと思ったら次の瞬間、青い男が飛びのき、そこには大穴が空いていたのだ

余りの光景に息をのみこむ、あの青い奴もガクラン姿の奴も、とんでもなさすぎる！

そう思った時にまた戦いに変化が訪れた

『ギュオ！』

青い男が凄まじいまでの殺気を放つ、余りの殺気に空気まで凍りついたような感覚に陥る

マズイ・・・ガクラン姿の奴、殺され・・・殺され・・・殺され・・・なさそうだ

何故かそう核心してしまう、普通だったら間違いなく、殺されてしまうと思う所なのに何故か殺されるとは思わなかった

そんな俺の考えは置いて、青い男がその槍をガクラン姿の男に放とうとした時に

『パキリ』

「誰だ！」

と気付かれてしまった！俺はマズイと思い全力で校舎の中に逃げ込んだ、けど

「悪いな目撃者は消せって『今』の主の命令なんだ」

追い付かれてしまい

「じゃあな！」

青い男が俺の心臓目掛け槍を突き出すのが見えたと思った瞬間に

『ガキン！』

「滑り込みセーフってか？」

とそんな声が聞こえたと同時に胸ではなくて腹、具体的には鳩尾のあたりに衝撃を感じ、その衝撃とともに俺は意識を手放した

そして目が覚めたらそこは誰もいない夜の学校、さっきまであったことは幻だったのかと思ってしまう程に静まりかえっていた

俺はハッキリしない頭を抱えつつ、そのまま家に帰ることにした

そして現在
「っそ！！」
魔術で強化したポスターを使って必死で槍の攻撃を凌いでいる
「面白え技使うな？まさかそんなもんで俺の槍を凌ぐなんてな？がっもう持たねえだろ？大人しくしてろ小僧」
確かに、たった二度、たった二度、槍を防いだだけで強化したポスターはグニャグニャにひしゃげている、もう持ちそうにない
「ハァハァ！学校で気絶したのもやっぱりオマエが原因か！」
息も切れ切れに俺が青い男にそう言うと青い男は
「アレはマサの仕業だ！確かに間接的には俺も関わってるが！」
どうやら違うらしい、マサ？あのガクラン姿の男か・・・有り得る、なんだろうか？
特に知っている奴ではないのに自然とそう思えた
「っていけねえ、ああどうもマサのやつと会ってから調子が狂うぜ・・・まっ悪い気分じゃねえんだけど・・・ククク・・・」
そう言って笑う青い男の顔はどこか楽しげに見える、しかし途端に苦虫を噛んだような顔になり
「コイツ殺しちまったら、マサの奴、キレるだろうな・・・チッ・・・久々に面白えやつと会えたと思ったんだが・・・悪く思う・・・

いや怨んでくれていいぜ」

コイツにも何かあるのだろうか？

いや今は生き残る事を考えるんだ！

「でや！」

『ヒュ！』

もはや使い物にならなくなった強化ポスターを青い男に向けて投げ付け

『バリン！』

倉の中なら何か武器があるかもと考え窓ガラスを突き破って庭へ

『ヒュ』

『ゴスッ！』

「グハッ・・・」

逃げる時に槍を薙ぎ払われ、脇腹に貰ってしまった、折れたか？

いや今は倉へ！

『ガチャ！ギィバタン！』

「ハァハァハァ・・・クッ・・・」

痛む脇腹を抑えなんとか倉まで辿りつき直ぐに倉の扉を閉じる、青い男は罠を警戒しているのか『今』は倉の中までは入ってこなかった

けど、『今』はなんだ、その内に確実に倉の中まで入ってくるだろう

その前になんとか

「ハァハァ・・・武器・・・何か武器は・・・」

倉の中を必死で探る、けど役に立ちそうなものは出てきそうにない

「カッハッ！！」

『ビチャ』

内臓もやられたか？苦しさと共に口から血を吐き出す

目が霞む・・・頭が回らない・・・

『ピチャ・・・ピチャ・・・』

俺の口から出た血が倉の床に落ちる

「お～い小僧！そろそろしまいにするぜ？」

倉の外から青い男の声、クソ・・・これまでかよ・・・

ふざけるなよ！俺はまだなってないんだ、オッサンと約束したアレに俺は・・・

『カッ！』

なっなにが！

「床が光って・・・」

『ゴヒュウ！』

「クッ！！」

凄まじい光、その余りの光りの強さに目を閉じてしまう

「うっ・・・くっ！」

その光りが弱まり俺が目を開けた先には

「問おう！貴方が私のマスターか？」

金色の髪に銀の鎧を纏ったまさに幻想的ともいえる一人の女の子が立っていた・

・

・

・

マサ視点

「もうすぐよ！見えたわ！あそこ・・・え？」

アン？どったの凜？急にビックリ顔になってからに

ってアレ？衛宮家に見えるんは衛宮君とやら、コレはＯＫ！そら衛宮君の家に向かってんだから当然っちゃ当然だわね

でランサー！コレもＯＫ、ある意味では予想通りだし、まあランサー君も色々とあんだろうね、校舎ん中で言ってたし

で最後、アレは女の子？鎧着てるけど？もしや・・・

「コスプレ？」

「バカね！ランサーと戦えてるのよ！普通に考えてサーヴァントに決まってるでしょ！」

うん、だと思ったよ！なんせあの子も見た事あるような気がするしね、多分メインキャラ、ってそだ凜に言っておかねば

「俺なら普通にやり合えたぞ？サーヴァントにとやらになっても俺自身特に変わりはねえし？」

「アンタは普通じゃないでしょ！」

ですよね～！バグだしねえ、っておろ？ランサー君、何やら俺ん時に見せた必殺技っぽいのぶっ放そうとしてんぞ

ふむ・・・

「凜！ちょっくら乱入する！」

「はっ！ちょっとアンタ何考え」

『シュバ！』

いやだって見過ごすのもアレだしね？

それに・・・

「ゲイ・・・」

「若い身空でそんな道に走るな！オラァァァ！」

バッターキック！

「なっ！」

『ズドォォン！』

ランサーが危ない小道に入っていきそうなのを見過ごせるかい！

「グハァァァ！」

うむ見事な放物線！ン？不意打ち？知らんがな！コレはアレだ！

教育だ！時には鉄拳も必要なのだ！

まあ今は足だったけども

「マサ？アンタが考えてることは間違いだと断言しとくわ」

ン？凜？そうなの？でもランサー

「ゲ〇って言ってたじゃん？ハッキリ聞こえたし？」

『ガバッ！』

「人聞き悪い事言うんじゃねえ！アレは俺の宝具の真名解放だ！！」

おう？ランサー君？おはやい復活で、つうか真名解放？宝具？

「なあなあ真名解放って何？宝具って何？なんか響きがかっけぇんだけど？」

「知らないのかよ！」

いやそんなん言われてもランサー君困りますがな

「はいはいアンタには後で教えてあげるから・・・今は・・・ハァどうしようかしらこの状況？」

わぁーい！凛先生流石だぜ！けど直ぐにため息、まあね、確かにアレだよね

まっとりあえず

「どうも先日コッチにやってきた鬼島　政成です、よろしく！」

自己紹介してみた

「えっあっ・・・セイバーです」

ほう！セイバーとな！ってセイバー？アレ？どっかで聞いたよう

な？

「セイバーって私が呼びたいと思ってたサーヴァントじゃない・・・なんで衛宮君のとこに・・・」

そうそう！そうでしたな！確かそんなこと言ってましたな凜

「ハッ！いけない！アナタもサーヴァントか！」

おう？俺？セイバーさん俺に言ってますのん？って完全に俺に向けて言ってますな

「まあ一応な？自覚ないけどねえ？なっランサー？」

セイバーの問いに頷きながらもあえてランサーにふってみた

「ああセイバー、コイツは確かアヴェンジャーだったか？まっさっきも言ってたが真名鬼島　政成、マサかマサナリって呼べだと」

うむ！説明ご苦労！

「クラス名より先に真名を名乗ったと言うのですか！！」

おう？ビックリ顔！目を丸くしてますな！結構可愛いです！にしてもまたその類の質問かい？

「カクカクシカジカでマサにサーヴァントの常識を当て嵌めるのは無謀よ」

はい凜さんありがとうございま～す！けど無謀はちょっと言い過ぎのような気がします

「ククク・・・プッハハハ！だからあの時にカレーって言ってたのかよ！ダーハッハッハ！面白え～！ああ腹痛え～ダーハッハッハ！」

おう？どうやらランサーのツボを的確についたようだ！

「カレーですか・・・食べてみたいですね」

おやま！セイバーさんはそっちに食い尽くんですね、カレーだけに！うん今のは忘れてね？

「昨日作った残りあっから食うか？二日目だから更に美味くなってるぞ？あっランサーもどうよ？」

何となく、そう聞いてみました

「おっ！マジかいいね～」

「いいのですか！」

うむ！ノってきた！では今日はみんなでカレーパーチーを

「っていきなり何言い出してんのアンタわァァァ！却下よ却下！」

開催できなかったです、残念！全く凜め

「そんなにカレーを一人じめしたいのか！このいやしんぼ！」

ちょと反抗してみた！

「んなわけあるかァァァ！死ねェェ！」

『ドンドンドン』

『ガキンガキンガキン！』

やっぱしガンドの雨が降りました、まっきかないけどね！

「ン？この音って・・・校庭で聞こえた・・・それに・・・マサ・・・ン？あっ！あぁぁ！オマエ！俺が気絶した原因！」

ぬあ！バレてる！何故？ハッ！

犯行現場には俺と衛宮とやらとランサーしかいなかった、衛宮君は即気絶したので面は割れてない、俺は衛宮君に教えてない

つまりは・・・

「ランサー？オマエ言っちゃったの？もう内緒って言ったのに」

そうバレた原因はランサーしか考えられんのだ！

「オマエが言ったのはオマエのマスターに黙っとけってことだろ？その小僧は入ってねえだろ？」

むっ！こやつやりおる！ってなぁ

「ランサー、おまっそこは空気読もうぜ！」

全く！ランサー君！もっと頑張ろうよ！オマエならやれたよ？もう

「ってやっぱオマエが原因なのか！」

ぬ？ふむ・・・いや確か俺が原因ですけどね？

「なあ衛宮君とやら？確かに確かにユーが気絶したのは俺が原因ですよ？でもねアレだよ？下手したらキミ槍が貫通してたとこだったんだよ？

それを俺がこう華麗なスライディングで防いだんですよ？だからね・・・つまり俺がいいたいのはだな・・・えと・・・スンマセンでした！ホントわざとじゃないよ？」

結局は謝ることにしました！だってなんやかんやで衛宮君が気絶したの俺のせいだしね！

それに素直に謝ればきっと許してくれるさ！

「いや・・・まあ確かに・・・あの時はヤバかったし助けてもらったのは事実だよな

うん、わかったよ許すよ、いや違うな、ありがとうだよな」

おう！許されるどころかお礼を言われました！なんたる好青年！

「オマエ！良い奴！あっ俺んこたぁさっきもランサーが言ってたけどマサって呼んでくれ！あっ衛宮、下ん名前はなんつうんだ？」

「えっああ士郎だけど？」

ほう！士郎な！よし覚えた！

「士郎かよろしく！」

「ああ！」

グッと握手！うむ！ダチが増えたぜ！

っとそだ！

「ランサー？オマエまだ士郎狙ってんの？なんだったら俺とさっきん続きするか？」

ランサーに確認を取ってみる

「いやその小僧のことはもういいわ、やる気失せたしな、まっオマエともやり合いてえとこだが・・・今はやめとく足枷が欝陶しいしな」

足枷？ン？校舎で言ってた『今』のマスターってのと関係があんのか？

「じゃなあ！マサ！セイバー！」

『シュバ！』

と脳内コチャコチャしてたらランサー君退場です！

「ハッ！ランサー待ちなさい！」

ってコラ！

「セイバーさんや、追わないの！こういう時はサラッと行かせてあげんのが様式美ってやつなんだから」

『バッ！』

セイバーを抱えて阻止しました

「なっ！離しなさい！」

なんかジタバダしてるなセイバー君！ちょと可愛いぞ？

よし撫でる！

「なっ！いきなり何を！」

「ナデナデだ！ジタバタセイバーが可愛いかったのだ！」

可愛い！つまりは撫でるもはや常識だ！

「ッ！この身はサーヴァントです！可愛いなどと！」

いやそんなん言われても可愛い可愛いんですよ？

「ハァ～セイバー無駄よ、マサ相手にそんな事一切通用しないわ、後マサ！アンタいつまでセイバー抱えてんの、そろそろ下ろしなさい」

流石は凛！わかってますな！っと凛に言われたようにセイバー下ろしますかね

『バッ！』

とセイバーを下ろしました

でその後、何故かセイバーに

「せい！」

『ヒュバ！』

と何やら見えない剣で斬りかかられましたがそこはお馴染み

「素手バリアァァァ！」

『ガキン！』

で防ぎました！そしたらセイバーさん

「なっ！素手で！」

やっぱり驚いてましたけどね！

「やっぱり見間違いじゃなかったんだな・・・」

ついでに士郎もそんなこと言ってました、そういやランサーとのケンカ見てたね？

とコチャコチャしてたら凛が

「今さらだけどこんばんわ衛宮君？」

と士郎に優雅にアイサツ・・・ふむ・・・

「凜？そのキャラキツイ！」

「死ね！」

『ドン！』

『ガキン！』

ガンド撃たれた！でもね？キツかったんだもの、アレは流石に見逃せませんでした！

「遠坂？」

おう？士郎困惑気味ですな？ってそういや

「セイバー？セイバーのマスターって士郎なん？」

八割方は確信してるけど一応確認

「ええそうです」

ふむん・・・つうこたぁ・・・

「士郎も魔術師？」

ってことになるんだよな？アレ？だよな？多分？

「アンタは・・・初日に教えたでしょ・・・」

うっ・・・確かにそうなんですけどね

「ってことは遠坂も魔術師だったのか？」

士郎は士郎で凛が魔術師だったと知って驚いております

「衛宮君もでしょ？なんせセイバーのマスターなんだから」

「いや俺は半人前だし・・・あっ！それにマスターとかサーヴァントなんだよ！」

おう？どうやら士郎君、知らないようですうむ！

「仲間！」

グッと握手！

「えっはっ？」

ふむわかってないようだな！

「知らない同盟だ！俺もよくわかってないからね！」

「あっそうなのか？」

うむ！そうなんですよ！つうわけでここは頼りになる

「よくわかる凛先生の解説だよ！よろしくお願いします！ほら士郎も」

「あっああ、お願いします」

なんやかんやで士郎もペコリと頭を下げます！ってアレ？凛先生、何プルプルしてんのん？

「なっなんで・・・なんでこんな半人前にセイバーが来て、私にはコイツなのよォォォ！」

凛の叫び声が夜空に響き渡りました

・

・

・

・

でアレからなんやかんやありつつも士郎ん家の中で話しつうか説明を受けることに

中に入るとガラスが割れとります

「士郎？箒とちり取りは？俺なら踏んでも無傷ですむけど凛とか士郎、セイバーもだけどケガしちまうぞ？」

と片付けに入ります、まっ補修もできんこともねえけど

「コレくらいなら直ぐに直せるわよ・・・・ブツブツ」

『カッ！カシャカシャ』

おう！すげえ！凛が何やら呟いたと思ったら巻き戻し映像みたく

ガラスが割れる前の状態に

「凄いな遠坂、俺にはそんなことできないぞ？」

士郎もビックリしてますな！

「フッ・・・見たかマジカル凛のマジカルパワー！」

何となく胸をはってみた！

「胡散臭い名前つけるな！大体こんなの初歩の初歩でしょ！魔術師なら最初に習うことよ！」

ぬ？そうなの？ってそんなん言われても

「俺、自己流でやってきたから正式には習ってないし」

「俺、魔術師じゃないし？ただの高校生だし？」

おっ凛さんまたもやプルプルしてますね？

「フフ・・・衛宮君、衛宮君はまあいいわ・・・うん、ホントはよくはないけど・・・でもね・・・マサが『ただ』の高校生ってのは納得いくかァァァ！」

噴火した！

「確かに・・・マサが『ただ』の高校生っていうのはムリがあるよな」

引火した！

「そうですね、この時代の学生の基準はわかりませんが、間違いなく大きく外れてる事は私でもわかります」

大炎上！

「まっ自覚はあるけどねえ？」

「だから余計タチが悪いのよ！」

今さらどうにもなりませんってば

「って凜？説明すんじゃなかったか？」

いや大分話しが横道にそれまくってしまったので無理矢理起動修正

「ハッ！そっそうだったわね、それじゃあ何も知らない衛宮君の為に説明してあげるわ」

うむ何とか修正成功のようです

『スチャ』

っておい凜さんや？

「眼鏡の意味は？」

「何となくよ！」

何となくか、まあ気持ちはわかる！結構似合ってますしね！っとそだ

「士郎？キッチン借りていいか？なんか軽く摘めるもん作ってくる、小腹がすいた！」

「あっああ別にいいけど、マサは聞かなくていいのか？」
いや一応一回は聞いてるしね、あんま覚えてないけど
「どうせもう一度説明しても忘れるでしょマサの場合、あっ私、なんか甘いのよろしく」
凜もなんやかんやいいつつわかってらっしゃるようで
「あいよ！じゃ！士郎とセイバーも食うだろ？」
「ああ」
「是非！」
セイバーの食いつき半端ないな？まっいいけど
んじゃまっ作りますかねえ？っとその前に
「キッチン何処？」
「あっああキッチンはそこ行ってすぐだ」
キッチンの場所確認です！
でキッチンに行って、材料確認！うむ！アレを作りますかね！
『ジュージュー！』
はい完成！もはや得意料理に数えられる
ホットケーキです！
で後は・・・コーヒー！ここらへんも慣れたもんです！

さて、運びますかねっと、適当な盆に乗っけてＧＯ！

「はいおまた！」

「ン？きたわね？丁度よかったし少し休憩しましょう」

どうやら説明の方も一段落ついていたようですな

「コレは・・・とても美味しそうですね」

まっそれなりには自信があるぜい！作りまくったからな！

「確かにマサ意外だな？」

よく言われるよ！まっともかく

「いただきましょう！あっコーヒーもあるからな、コレは凜、甘めにした、セイバーも同じくだ、士郎はブラックだけどダメだったら言ってくれや」

ちなみに俺もブラック！

「あっ・・・美味しいわ・・・」

「ええこの食べ物も絶品です」

うむ！やっぱり美味いと言ってもらえると嬉しいね！

「俺も料理するけどお菓子は余り作れないからな・・・うん美味いよマサ」

おっ？士郎も料理すんのか？ふむ

「じゃ後で俺式ホットケーキの作り方教えたるよ」

「あっホントかマサありがとな？」

いえいえ、別に構いませんとも！っと俺も食うかね

『カキンカキン！』

・・・やられた！しまったぁ！油断した！またかよ！まだだよ！

「あっ俺のもない！」

士郎もか！クッ！

「悪いわね？つい美味しかったから」

「もうないのでしょうか？」

凛め！いや凛まだよし！例え口だけとは言え謝ってると思わなくもない！

がセイバー！オマエ、お代わり要求って！まだフォークに刺さってんだろ！クソウ・・・もきゅもきゅ食いやがって！可愛いじゃねえか！許すしかないじゃないか！

「マサ・・・何となく気持ちはわかる」

「うむ・・・アレは怒れん・・・まっコーヒーでガマンしようや」

士郎と更に仲良くなれた気がしました。

「お代わりは・・・」

「後で作ったげるからガマンなさい！」

そうなに気にいったんかいセイバー！まっ悪い気はしないけど

「はい・・・」

しょんぼりセイバーが可愛いかったです

「ヤバイ・・・持ち帰りたいわ」

気持ちはわかる！では俺も凜に続こう！

「士郎セイバーくれ！」

「いきなり何言い出すんだ！」

凜に対抗してみたのだ！

「この食べ物が食べられるのなら・・・いや・・・私は騎士です食べ物で釣られるなどあっては・・・しかし・・・」

後、微妙にセイバーが釣られかけてましたうむ！セイバーも結構面白いかもしれん！

・

・
・
・
で多少コチャコチャありましたが
「・・・・っていうわけ、どう衛宮君、アナタはどうするつもりなの？」
と説明終了！ちなみに俺、説明の間にちょこちょこコーヒー入れたり、セイバー用のお菓子作ったりしてました、セイバー結構食いしん坊！
でも美味しそうに食べるのでマサさん的には満足です！
「俺は俺は・・・」
ふむ、悩んでまんな？まっそらそうか？いきなりそんなわけわからんことのど真ん中にポーンと投げ込まりゃ耐性のないやつはそうなるわな
ン？俺？俺は色々となれてるし？キーワードはジジイだ！
「まっ今はとにかく衛宮君のマスター登録をしにいくわよ」
ほえ？マスター登録？まっ何となくはわからんでもねえけど
「凛先～生！何処に？後、凛もしてんの？」
「私はアンタが来た日にしたわよ、で行く場所は・・・言峰教会よ・・・」

教会？何故に教会？ハッ！

「セーブしに行くんだな！」

「んなわけあるか！」

ですよね～！まっ軽いボケですよ、まっ察するに

「その教会でマスターの登録ってのをやってんですね？所謂、審判みたいな感じってか？」

「まっちょっと違うけどそんな感じで合ってるわ、そこの教会の神父が監督役をしてるのよ」

へえ～なるほろね？ン？何だろ？凛微妙にしかめっつら？俺のボケの影響ではないと思うが、ふむ・・・

「そこの神父と知り合いなんか？更に言うなら仲悪い？」

「私の兄弟子よ・・・仲が悪いってのとはちょっと違うわね・・・アイツは性格がかなり歪んでるのよ、苦手なやつってところかしら」

ようするにキライってわけね？まっなにわともあれ

「行くとしますか凛さんや？士郎君、セイバー君も」

と衛宮家を出発することに

まっその時に

「セイバー？その恰好はマズイから」

とセイバーの鎧に士郎からダメ出しが入り

「しかしいつ戦いになるかわかりませんので」

でセイバーはセイバーで譲りません、頑固さんです！

「ねえセイバー？セイバーは霊体化できないの？」

そこで凛の提案が入りましたがどうやらセイバーさん

「すいません霊体化はできません」

とのことでした、まっ急に透けろ！って言われても困りますよね？そんなセイバーさんには

「セイバー！コレを使うのだ！いざという時にコレを使えばあら不思議！バレずにすむという」

「ダンボールはもういいわよ！」

『ビリ！』

凛に破かれた・・・チクソウ、最高の隠密道具が・・・

「マサナリ、あまり落ち込まないでください流石にアレはどうかと思いますが気持ちは嬉しかったです」

セイバーに慰められました、でもダンボールはセイバー的にもNGだったらしい・・・クソウ

あっちなみにセイバー、俺のことはマサナリと呼んでます、士郎に関しては最初はマスター言ってたけど結局はシロウに落ち着きました、後、凛はリンね？

っと今はそのことは置いておくとして、真面目な話、セイバー、そのまま鎧で出たら職質受けそうだな？

「セイバーじゃせめてコレを着てくれ」

むっ士郎君何やら打開策？っておい

「雨ガッパかよ！コレはコレで職質されてまうだろ！」

流石のマサさんもツッコムよ！

「ですが仕方がありません」

えっ？納得すんのセイバーさんや？

「そうね鎧を外すのもダメ霊体化もダメ、まっ仕方がないわ」

クッ・・・凛までもが・・・でも負けない！何か何か手は・・・

ってそだ！雨ガッパでもいいんなら

「士郎！カーテンつうかカーテンの布使うぞ？」

「はっいや別にいいけど」

うむ士郎の許可は得た！

「セイバー来なさい！」

『グッ』

「引っ張らないで下さい」

うっせえです！

「凛と士郎は１０分くらい待っててくれや」

セイバーを引きずりながらも、凛と士郎にそう言っておくのも忘れません！

でカーテンの布を外してセイバーにあて大体の寸法をみて

作業開始！

～俺作業中～

はい終わり！ジャスト１０分！

「セイバー？コレなら鎧の上からでも着れんべ？」

ン？何の作業をしてたかとな？ふむ、みなさんある程度お察しの通りに

「コレは・・・まさかあの短時間でカーテンの布をコートにしてしまうとわ」

はいそういうこと即席のコートを作ってました！

っと

「じゃお披露目といきますか？」

「ええマサナリ、ありがとうございますコレならば恥ずかくはありません」

うむうむ！ナイススマイル！納得はしててもアノ雨ガッパはキツかったようね

っと凜達を待たせてる玄関までＧＯ！

で凜から

「アンタそんなことできたの？」

って聞かれたので

「まな？このガクランも特注で作った、半自作だし？コレからは仕立屋マサと呼びたまえ！」

実はそうだったんです！破れたりするたびに自分で直してたら半自作になってたんですな！

「仕立屋って・・・私のも何か作って貰おうかしら？」

ン？凜のか？ふむん・・・

「ヒマがあったらな？」

とりあえずはそう言っておきました

で士郎はというと

「ふむ・・・コレは確かに良い物です、即席で作ったとは思えません」

と着用している即席コートを見ながらそう感想をもらすセイバーを見ながら

「うん・・・似合ってるよセイバー・・・うん・・・」

と悲しそうな顔で雨ガッパを片付けてました

その姿が少しだけ涙を誘いました。

でも後悔はしてない！

第四話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

ああ・・・もう・・・コレｆａｔｅじゃない・・・

というくらいに崩れていますが更に加速していきます

でも頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします

感想などもありましたら是非に

第五話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

ええホントスンマセンです、かなりヤバイです、もはや原型が・・・

・

というくらいにヤバイ事になっていますので心を強く！強くもっておすすみ下さい。

第五話みたいな雰囲気！

目指せ教会へ！

つう感じでテクテクと教会に向けて歩いております。

「なあマサ？」

すると士郎が何やら神妙な面持ちで話しかけてきました。

「どった士郎？凛の偽優等生っぷりにショックを隠しきれんのか？」

「死ね！」

『ドン！』

『ガキン！』

どうやら凛に聞こえたようですな、地獄耳め！はっ！

「コレが噂のマジカル凛のマジカルイヤーか？恐るべしマジカル凛！」

「だから胡散臭い名前をつけるな！それに丸聞こえだったわよ！」

「まっ聞こえるように言ったからな！」

ニカッとナイススマイルでサムズしてみた

「フフ・・・フフフ・・・５番６番！セット！！」

うおう！ものっそい怒っとる、殺る気満々です、なんか学校で言ってた切り札使おうとしとるし？

「とっ遠坂？おっ落ち着けって、なっ？」

「そうですリン、マサナリはリンのサーヴァントなのでしょう？」

士郎とセイバーが止めに入ってくれました、まぁ士郎君、完全にビビッてましたが、まっ確かアレはおっとろしいです。

「フゥフゥ・・・落ち着け私！マサは味方・・・どんなにアレでも一応味方・・・」

うむうむ！何とか落ち着いてくれたようですな、では

「ミ〇ミ〇飲むか？」

ミ〇ミ〇を渡します、この流れわかるな？

「飲むわ、ンッンッン！」

そうここからやはり

「流石は凛！男っ前だなって士郎が言ってた！」

ちょっとアレンジしてみました。

「アァン？」

『ギロリ！』

「ちょ！言ってない！俺は言ってないぞ！指を向けるな！」

うむ士郎君、必死！まっアレだけの殺気ぶつけられながらガンドの発射態勢に入られたらそうなりますわな、寧ろその状態でも喋れる士郎君は勇気があるぞ！

まっ一応助けますか、銃弾並っつってたから流石の士郎君でもエライ事になってしまうしな、それに原因、俺だしね？

つうわけで、ササッと凛と士郎の間に入り凛が伸ばした指先に向かって

「○・T！」

宇宙の友達ごっこをやってみた、平和の証だ！

「死ね！」

『ドン！』

『ガキン！』

超至近弾をもらいました。何故？

「ハァ～ホントに疲れるわ・・・」

でその後の凛さんガックリなってました、大丈夫さそのうちになれる！っとそだった

「士郎？さっき何か言いかけとりましたけど何だったんだ？」

大分、脱線しまくっていた話しを戻しますしたら士郎君

「マサが変な事言い出すからだろ？おかけで恐ろし『ギロリ』いやなんでもないぞ遠坂？うん！」

流石は凜だな！一睨みで士郎を黙らせるとはあの技はマジカルメンチと名付けよう！

『ドン！』

『ガキン！』

無言でガンドを撃たれた、まっきかないけどね！

っとイカンがな、またもや脱線し始めとる。

「ンッン！さて聞こうか？士郎君や？」

「切り替え早いなマサ？」

まっそれが持ち味だからね、切り替えの早さには定評がある！

と脳内コチャコチャしていたらば士郎が

「マサはさ、いきなりこんな事に巻き込まれて大丈夫なのか？見た感じ俺と同い年だろ？」

真剣な顔で俺にそう聞いてきた、そんな士郎に俺は

「まっ慣れてるからね？後、士郎たぁ同い年だぜ？」

あえて軽い感じで返しました、重いのは似合わんしな？

「軽いなマサ？しかも慣れてるって？」

「士郎君や？目が覚めたら砂漠だったことはあるかね？」

「はっ？あるわけないだろ？」

フッ・・・でしょうね？いくら魔術師とやらとはいえそんな経験は普通はありませんよね？

だがしかし

「俺はある！両手両足の指を足しても遥かに足りないくらいの回数でな！あっ氷の世界もあったな～、そういや何故か奮戦地帯のど真ん中だったこともあったよなぁアハハハ～」

アレ？どうしたんだろ？なんか士郎の顔がぼやけて見えないや

「凛？目薬ないか？なんか視界がぼやけてんだ？」

凛に目薬がないか聞いてみた

「マサ・・・目薬はないけどコレ使いなさい」

何故かハンカチを渡されました。

「たっ大変なめに合ってきたんだなマサの奴・・・クッ・・・」
「流石の私も同情してしまいます・・・クッ・・・」
士郎君とセイバーさんの優しい視線が胸に痛かったです。
「っとまあこんな経験を積んでるマサさんは多少の事では動じないのだよ士郎君！」
ミ〇ミ〇を飲みつつ士郎にそう言うと士郎から
「立直り早いな！！」
との言葉をいただきました、じゃないとやってられんとですよ。
それに心強い味方のミ〇ミ〇のお陰でもあるのだ！
つうわけで
「士郎も飲むか？元気の源だぞ？あっセイバーも？」
士郎とセイバーにも進めます。
「あっああ貰うよ！」
「いただきます！」
うむうむ、仲間が増えたぜ！広げようミ〇ミ〇の輪！
と教会までの道のりをみんなでミ〇ミ〇しながら向かいました。

そして

「凛さんやココホントに教会か？」

教会に到着して思わず凛にそう言います、いやね？だってね？確かに見た目は教会だけどね？とても毒とか呪いとか解いてくれそうにないんですよね？

と俺が考えていたらば凛さん

「残念ながら教会よ。」

との事です、マジかよ？

「だって凛？アレだぞ？絶対アレだって地下に魔王とか居るって！もしくは武器の密売とかヤバァーイ葉っぱとか扱ってるって！」

「魔王ってアンタ・・・でも後半は否定できないわね？」

いや魔王の下りはマサさん的にもどうだろう？って思ったけどね？つうか凛も後半に関しては否定できんのかよ！

よしならばココは！

「凛！この教会潰そう！なぁに一分！いや３０秒あれば更地に変えてみせる！で跡地に別荘を！」

「やめときなさい、別荘は気になるけど今は我慢なさい。」

むう、残念なり、しかし今はということは後からならＯＫなのだな？

「アンタ、ホントにやりそうね？っと衛宮君そろそろ中に入りましょう、マサも入る？」

むっ？既に頭の中では間取りまで決めてたのだが？っと入るかどうかか？ふむ・・・

「神父に会った瞬間に飛びつきＤＤＴをブチかましてもいいのなら？」

更にそこから流れるような動きで腕十字へと繋げるぞ！

「ハァ～アンタはココにいなさい、行くわよ衛宮君？」

むう残念！芸術的な連係を披露しようと思ったのに

「ああ！わかったセイバーはどうする？」

そんな俺の考えをよそに士郎はセイバーも入るのかと確認しておりまする、でセイバー君の答えは

「私も外で待っています、マサナリではありませんがこの教会は何か引っ掛かりますし、シロウ何かあったらすぐに御呼び下さい」

との事です、どうやらセイバーもなんかイヤな感じがするみたいですな、っと俺も凛に

「凛も何かあったらすぐ呼べよ？」

と言っておきます、したら凜は

「ええわかったわ、さっ行くわよ衛宮君？」

コクリと頷きながら士郎に声をかけて中に入って行き士郎も

「ああ！」

と凜の後を追って教会の中へと入っていきました。

「さぁてセイバー？待ってる間、シリトリでもする？」

「緊張感のカケラもないですねマサナリ？」

いやそんなん言われても、まっ一応は何かあったら即座に動けるようにはしてるよ？

けどヒマやん？

「んじゃ待ってる間は何をせいと？」

「ふむ・・・では少し話しをマサナリ？アナタは生きたまま生身の体でサーヴァントとして召喚されたのですよね？」

お話ですか？まっいいですよい、っとしかしサーヴァントねえ？

「サーヴァントに関しては自覚はねえけどな？けど生身は生身だぞ？バリバリ生きてるし？現役高校生だぞ？」

ガクラン着てるしね？まっセイバーにガクラン言ってもわからん

でしょうけど

「そう言えばシロウの家で学生だと言っていましたね？先程の話しを蒸し返しますが学生でありながら何故アノような経験があるのですか？」

アノような？ああ！アレか？それはまあ一言ですむな

「ジジイのせいだ！」

「はっ？マサナリの祖父ですか？」

うむ、コレだけではわからんようですな、では

「俺のジジイはかなりブッ飛んでんだわ、アレは俺が中学になったばっかりの時だったか・・・・・・・」

【ジジイ・エピソード～ジャングル編～】

を聞かせてやりました、で最後に

「とんでもねえべ？」

そう締めたらセイバーさんに

「そっ・・・それは・・・寧ろマサナリよく無事でしたね？」

って言われました、まっバグキャラですからね！ああ人外バンザイ！

「更に言えばジジイはマジで強えんだわ、まっいつかはブッ飛ばしてぇたぁと思ってるけどよ？」

「フフ・・・」

むっ？なんか笑われとる？

「セイバーさんや何がおかしいのかね？」

「いえ・・・実に楽しそうな顔をしていたので。」

むっ？そんなツラしてたんか？と俺が顔を弄っているとセイバーに

「マサナリのクラスはアヴェンジャーと聞いていましたが・・・フフ・・・いつか勝てるといいですね？」

優しい顔でそう言われた

「おう！いつかな？」

そんなセイバーにナイススマイルのサムズで答えました。　まぁぶっちゃけ、もう会えるかはわかんねえんですけどね？

けど、そんな顔でそう言われたら、そう言うしかねえわな。

と俺が考えていたらば

「おっ？戻ってきたみたいね？」

「ええ、そうみたいですね？」

凛と士郎が教会から出てきました、っておよ？何やら士郎君、何やら思うとこがあったみたいね？真剣な顔してるもの、つうこたぁ

「セイバー！俺、この聖杯戦争に参加するよ！未熟なマスターだけどヨロシクな？」

やっぱしね？手を差し出しながらそうセイバーに言うとセイバーは

「わかりました、では私が剣となりましょう！よろしくお願いしますシロウ」

コチラも手を伸ばしてグッと握手しています。

うむ・・・士郎とセイバーを見てたらなんつうかアレだな。

「俺らのスタートってなんか軽くなかった？」

「アンタにシリアスは似合わないわよ？」

ですよね～？まっ俺もそう思うしね、けどちょっとだけ羨ましいッス！つうわけで！

「凛？俺・・・明日の特売戦争に参加するよ！」

「好きになさい」

むう、凛め、冷たいじゃないか！アレだぞ？特売の時のおばちゃん達のパワァは半端じゃねぇんだぞ？なんつうか気迫が違う、鬼気迫るとはまさアノ事だ！

「ほら？帰るわよ、今日は妙に疲れたわ。」

脳内コチャコチャしていたらば凜が帰宅宣言をなさいました

まっ俺ぁ疲れてはいないけど風呂入りてえし腹減ったし、その意見には賛成です！

「士郎、セイバー？帰んべ？特に士郎は明日も学校だろ？寝坊したらアレだぞ？遅刻遅刻と言いながら以下略」

「そんな出会い聞いたことねえよ！！」

うむ、俺もないっうかコレはアレだな

「二度ネタよね？朝、私にも言ってたし？」

「スマン！ついつい？」

若干反省とこんな感じでコチャコチャしつつもスッタラスッタラ帰ります

すると凜が士郎に

「今まではつい手助けしたけど、それもココまで！衛宮君も正式に参加を表明したってことはコレからは敵どうし・・・」

なんていいやがりました！マジか凜さん？世知辛いぞ！と文句を言おうとしたらば

「のつもりだったんだけど・・・」

おう？何ですの人の事をジロジロと見てからにハッまさか！

「イヤ！また写真を」

『ドン！』

『ガキン！』

言いきる前にガンドをブッ放なされましたそして凜さんに素敵な笑顔で

「こ・ろ・さ・れ・た・い？」

って言われちゃいました！怖！

「こっ怖え～」

士郎君も余波にやられたようです、ヤバイくらいにガクブルなっとります！

「おっ恐ろしい程の殺気です、いえ寧ろアレを直接向けられて今だに意識を保っていられるマサナリを褒めるべきでしょうか？」

そして何故かセイバーさんに褒められました、フッ・・・こんくらいで懲りてたらそれはもはや俺とは言わないのだよ！

「セイバーもアレを見ればわかるわよ・・・ええ、そうよ・・・この際アレを見せて・・・それから・・・うんそうね！それがいいわ！」

っておい凜さん？何やら不穏な事を呟いておりますが？

「セイバー？ちょとコッチに来て？」

わぁ凜さん素敵な笑顔！

「えっあっ・・・いえ、そっちに行ってしまっては戻れなくなりそうなので代わりにシロウを」

アレ？セイバーさん？さっき剣になるとか言ってなかった？今完全に士郎をイケニエにしようとしたよね？アレ？幻聴かな？

「ちょセイバー！なっなんでさ～」

幻聴じゃないらしい、士郎にもバッチリ聞こえたようです。

「私が呼んでるのは衛宮君じゃなくてセイバーよ？」

しかし凜さんが呼んでいるのはあくまでセイバー

「マッマサナリ！リンを止めて下さい！」

セイバー君、涙目になりながらも俺に助けを求めて来ました、うむ可愛い！って違うがな、凜を止めるのだな、任せろ！

「凜さん？あの～セイバーも嫌がってる事だし」

「何かしら？」

『ニッコリ』

あらやだ凛さん素敵な笑顔で令呪をちらつかせてからに、それ切り札でしょ？既に一回使ってるよね？まあ俺のせいだけど。

つうわけでコレ以上使わせたらマズイ気がするので。

「スマン、セイバー！」

素直にセイバーを差し出しました！

「うう・・・わっわかりました・・・」

すまないセイバー！キミの犠牲は無駄には・・・アレ？犠牲？アレ？

「セイバー？コレ見て？どう思う？」

『ピラッ！』

「こっコレは！素晴らしく鍛えられたまさに戦士の・・・」

「でしょう？欲しい？」

「是非！！」

まあきゃっきゃしてからにハハハ・・・つうかアレじゃね？コレ犠牲になってんのって俺じゃね？と俺が考えていたらば士郎が近づいて来て

「なっなあマサ？一体遠坂はセイバーに何を」

「士郎君？言ってもいいが多分俺が喋った瞬間にガンドの雨が降るぞ？」

「あっああ聞かないでおくよ、うん！」

賢明ですよ士郎君。

赤信号は渡っちゃダメ！マサさんとの約束だぞ？

で二人が落ち着くまでの間は士郎とシリトリしながら待っていました。士郎中々強いぜ？と勝負が白熱してきた所で

「ンッン！でさっき何の話しをしてたっけ？ああ！そうだったわね、敵同士になるって話しだったかしら？」

「ええ、確かそういう話しでしたね？しかしリンとは同盟を結んだようなものですしアレを戴いた借りもありますので私としては・・・」

凛&セイバーがようやく還ってきました、ってセイバーさんやどんな同盟を？いや気にするな、気にしちゃダメさ！だってほらあんなにも星空が綺麗だから・・・

っとイカンイカン！逃避している場合ではござらぬ

「ワルシャワ！」

「まだ続けんのかよ！！今は遠坂の話しだろ？」

えっ？だって勝負はまだついてはないではござらぬか？

でもま士郎の言う事も、最もですな。

「凜？結局どうすんだ？」

と凜に方針を聞いてみます。すると凜さん

「まっある意味、セイバーとは同盟を結んだようなものだけど、そっちは今は置いておいて、マサ？アンタ、士郎とセイバーの二人と戦えと言われたらするの？」

むっ？俺？ふむ・・・

「まあ喧嘩なら？」

「あら？喧嘩とは、いえ戦うといえば戦うのね？」

まぁね？基本は買いだけど

「マサ？本気か？」

うおう？士郎そんな顔すんなや？

『グッ！』

ってセイバーも見えない剣を構えんなっつの！

「落ち着けつの！あのな？俺ぁ士郎とセイバーとはもうダチだと思ってる」

「だったらなんで？」

ええい士郎君、せっかちさんですなぁ

「ダチだと喧嘩はしないのか？例えダチとはいえ喧嘩くらいはすんだろ？けど喧嘩したらもうダチじゃなくなっちまうのか？マサさんは違うと思うぞ？」

俺がそう言うと凜が

「なるほどね？喧嘩はするけど殺しあいはしないってことでしょ？」

と補足説明、うむ凜さんわかっとるな

「流石は凜だ！わかってらっしゃる！つうか殺しあいってアホかっての？何が悲しくて士郎やセイバーと殺しあいせんとイカンのじゃい！」

あっちなみにランサーとも喧嘩のつもりですよ？アイツも結構、面白いし？

「ハァ～例え令呪使っても言うこと聞きそうにないわね？」

当然です！って使う気なんざサラサラないくせに、凜さん優しい奴ってマサさんは知ってんだぞ？

「そっか？喧嘩か・・・」

うむうむ！

「そういうこった！改めてここで宣言する！鬼島　政成はこの聖杯『戦争』で『喧嘩』してやんぜい！ダッハハハ！！」

「プッ！ハハハ！なんだよそれ？ハハハ！」

どうやら士郎のツボに入ったっぽい！うむうむ、俺には重いのは似合わんしな？

「リン、マサナリは本気であんな事を考えてるのでしょうか？」

「本気も本気、大本気よきっと、私もどうかと思うけど・・・アイツ見てたら本気でやりそうだしね？ハァ～、なんであんなのが私のサーヴァントなのか・・・」

「フフ・・・リン笑っていますよ？」

「セイバー？眼科に行きなさい？」

まっぶっちゃけ気にいらない奴にはヤリ過ぎるやもしれませんがね？

でも多分、死にはしないはず？多分？

とコチャコチャ考えてたら

「っとそうそう、衛宮君？私達同盟組まない？」

凛が士郎君に同盟を組まないかと持ち掛けなさった。まあマサさん的には全然ＯＫだけども

「本当か遠坂？確かありがたいけど？」

士郎君、微妙に疑問顔、そんな士郎に凜は
「まあマサの強さは凄いわよ？バグキャラってだけはあるわ？けどね・・・」
「けど？」
「マサの相手を一人でするのはホントに疲れるのよ・・・だから被害を分散させたいのよ」
あらま、凜さん？そんな理由？さっきまでなんかこうイイ感じになんかこうアレだったのに？
「ああ、何となくわかる・・・」
アレ士郎君？分かっちゃうの？納得しちゃうの？
「マサが少しは自重してくれれば別だけど・・・」
あらやだ冷たい視線！ふむ・・・
「ニカッ！」
ナイススマイルでサムズってみた
「ハァ～無理ね・・・ホント精神力が削られるわ・・・というわけだから、分散させたいのよ？被害を！セイバーともある意味、同盟組んでるし」
むう、被害って！凜さんやさっきから被害って・・・

「負けんな！凜！マジカルパワーで乗り切るんだ、大丈夫！マジカル凜なきっと出来るさ！」

とりあえず応援にしてみた

「だから胡散臭い名前をつけるなァァァ！アンタのせいでしょおォォ！」

うむうむ、凜さん絶好調！それでこそ凜だ。

「ハァハァハァ・・・衛宮君？同盟組んでくれるかしら？」

まあ息も切れ切れながらも目には力が篭ってますね？よっぽど疲れてんのかしら？

「シロウ？同盟を結んでもよいのでは？話しを聞くかぎりマサナリの戦闘力は魅力的です、それにこのままではリンが・・・」

「ああ、そうだな、不憫だな・・・うん同盟を組もう！遠坂、よろしくな？」

セイバーの後押しもあり、右手を差し出す士郎君、まあ士郎なら後押しなくても同盟組んでくれたろうけど。

「なっなんか複雑だけど助かるわ・・・コレで少しは楽が・・・」

同情されたせいか複雑な顔をしながらも凜も右手を出して握手！

うむコレならば

「俺も全力を出せそうだ！」

「ホントにやめて！ってアレで全力じゃないってアンタどんだけアレなのよ・・・」

フッ・・・まだまだこんなものではないわ！嘘だけど？常に俺は全力です。

「こっこれは確かに大変かもしれませんね」

お～いセイバー君、何を戦々恐々としておりれるか？

まっいいさね！

「セイバー？行くべ？」

『グイッ』

「はっ？行くとは？あっマサナリ？引っ張らないで下さい」

ええコチャコチャ言うねい、と凜と士郎が握手してる所までセイバーを引っ張っていって

『グッ！』

と握手している手の上にのせる、むろん俺ものせております。

「マサ何をする気だ？」

もう士郎君や察しが悪いですな

「どうせなんか変な思い付きでしょ？」

まあ思い付きだけどね？まっある意味ネタだけど

「ンッン！ええここに魔術戦隊マジカルレンジャーの結成を」

「しないわよ！」

「なんでさ！」

「しません！」

結成できませんでした、チクソウ・・・

「折角、役職まで考えたのに・・・」

「却下よ却下！」

「ええ～そらないぜマジカル凜ことマジカル・レッド？リーダーの役職だぞ？」

「いらんわァァァ！」

『ドンドンドン！』

ガンドの雨が降りました、まっ！

『ガキンガキンガキン！』

きかないけどね？

「っていうかマサって魔術使えるのか？」

「魔力は感じませんが？」

グハッ！痛いとこを・・・

『ガクリ』

「あっ崩れ落ちた」

「どうやら使えないようですね」

ええ使えませんよ？つうかサッパリサッパリですよ。

「フフ・・・マサのその姿を見れただけでも同盟組んで正解ね」

チクソウ、輝かんばかりの笑顔をしてからに凜め・・・

「このドＳめ！」

悪態をついてみた。

「敗者の弁が心地いいわね・・・フフフ」

チィクショー！まさかそういう切り返しとは、ガンドちゃうんかい！

しかし負けない俺はまだやれる。俺の心はまだ折れちゃあ

「そう言えば戦隊ものって5人だよな？1人足りないような・・・」

「グハァァァ！士郎ォォォ！！」

『ドサリ』

仲間だと仲間だと思ってたのにィィ

「綺麗に止めを刺しましたねシロウ？見事な手並みです。」

士郎に止めを刺されてセイバーが締めた。

「フフフ・・・ああ気分がいい！こんなに気分がいいのは久々ね～」

チッチクソウ・・・凛め・・・絶対に弁当にヒンヌーて書いてやる！！

『ドン！』

『ガキン！』

あっそこは撃つんだ？

『ヒュオ！』

『ガキン！』

って何故にセイバーまで？いやまあ、きかないけど

「不穏な気配を感じたのよ！」

「右に同じです！」

どうやら考えを読まれたらしい、まあセイバーも確かに・・・

『チラッ！』

足りない・・・

「シロウ？離れていて下さい・・・一撃で塵に変えてみせましょう！」

『グォォォ！！』

アレ？嘘？マジか？アレ？なんか必殺技ブッ放とうとしてるよ？

「おっ落ち着けセイバー！今、同盟結んだばっかりだぞ！！」

そう！良い事言うね士郎君！

「セイバー？許す殺りなさい？」

って凜ンンン！またかァァァ、何後押ししちゃってんの

「フッ・・・ハァァァ風王結界（インビジブル・エア）解除！」

『ゴヒュゥゥゥ！』

ってオイオイオイ！洒落んなってねえぞ？殺る気満々だぞセイバ

ー君！

「落ち着こうセイバー！マサさん味方よ？ほら今度、またホットケーキとか後、なんか美味いの作ってあげるから！」

いや多分、必殺技受けても平気な自信はあるけどね？けど怖いんですもん、故に必死に交渉！

「むっ！仕方がありません」

フィーシュ！釣れたなんとかセイバー君、怒りを修めてくれました。

「セイバー？ちょっと待って！」

って凜？どういうつもりじゃい、折角交渉が上手くいってるというのに、と考えながら凜を見ると素敵な笑顔をしながらスタスタと近づいてきなすった。

うむ・・・イヤ予感がガンガンするぜ！しかし凜さんお構いなしに俺の耳元でボソリと

「また・・・撮らしてくれたら考えてもいいわよ？」

ああ・・・やっぱし・・・イヤ確かに減るもんじゃないけどさ・・・けど何でやねん？

いやまだだ、諦めるな！

「凜？凜にも美味いお菓子作るからなんとかそれで！」

「セイバー？」

「わっわかりました・・・チクソウ・・・」

交渉に出たけど無理でした。クッ・・・素敵な笑顔をしてからに！眩しいじゃねえか！

「フフン！あっお菓子は勿論いただくわよ？」

去り際にキッチリとお菓子の件まで要求されました。

ン？むろん飲んだよ？撮影会はアレだけど自分が作った食べ物を美味そうに食ってもらえるのは俺としても嬉しいですしね？

とかコチャコチャ考えていたらば凛さん今度はセイバーに近づき

「ゴニョゴニョ・・・」

と耳打ち

「なっ！是非、私も！」

まあセイバーさんも素敵な笑顔。

「フッ・・・勿論よ同盟を結んだ仲じゃない？」

「リン！あなたに感謝を！」

『ガシッ！』

スッカリ仲良しさんですね・・・チクソウ・・・

「セイバーのマスター俺だよな？なのにな・・・なんでさ・・・」

『コン！』

ポッケに手を入れてそう呟きながら石ころを蹴る士郎の後ろ姿が涙を誘いました。

せっ世知辛え・・・

第五話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

凛さんもセイバーもマイルドな感じになってます。

けどある意味ワイルドです。ホントに・・・コレ大丈夫でしょうか？

でも頑張っていきますので、よろしければまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非！

最後にスマン士郎！

第六話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

警告、かなりヤバイ感じになっております、凄まじく無双しております・・・

それでも大丈夫という方は心を強くお持ちになっておすすみ下さい。

第六話みたいな雰囲気！

セイバー視点

今、私の目の前で信じられないような光景が繰り広げられている。

それは戦い・・・いやもはや戦いにすらなってはいないコレは一方的な蹂躙だ。

「■■■■■■！」

巨大な体躯と圧倒的な力・・・そのさまはまさに狂った英雄・・・バーサーカー、真名はヘラクレス、大英雄ともいえるその人物がケモノのソレとも言える咆哮をあげる

ただそれだけの事で空気が震えている

しかし私が驚いてるのは、そのバーサーカーの威圧ではなく

「もう！また半裸で歩き回って！アンタは図体ばっかり大きくなって！母さんねまた

隣の奥さんに笑われたのよ、もう母さん恥ずかくて、買い物にもいけないじゃない！」

「■■■■■（母さんゴメンよォォ）！！」

マサナリに土下座して謝ってる所だ、凄まじい光景だ。

「コレは予想外ですね・・・」

「ああ・・・」

思わず漏れた一言にシロウが相槌をかえし

「はっ恥ずかしいのは私の方よォォォ！」

リンが叫んだ、マサナリ、アナタはどれだけ規格外なんですか・・・

・・・・

マサ視点

アレからキャッキャ！してる凜とセイバーが落ち着いたのでスッタラスッタラ帰り道を歩きつつコレからどうすんべ会議をしていた。

「衛宮君の家で暫く厄介になるわ？」

「士郎よろ～！」

俺と凜の間では既で聖杯戦争の間は士郎君の家で過ごすという事で纏まってるでござる。

「なんでさ！」

むっ？なんでさ、つわれても、それは・・・ふむ・・・

「あのね？半人前の衛宮君、一人だと、危ないわよ？まっ今はセイバーがいるけど、アナタ今日だけで二回死にかけてるのよ？生き残ったのは運がよかっただけ、聖杯戦争の参加者がみんながみんな私

やマサみたいだとは思わない方が・・・」

ええい凜！長い、こういう時はな！ガシッと士郎の肩を掴みつつ

「士郎？それはアレだ！甲が乙してアレがソレだからだ！」

「あっあああわかった・・・うん・・・」

うむ、流石だな勢いは大切さ！

「強引に力技で丸めこんだわね？というか私の説得の意味は・・・」

「リン、深く考えたらいけません」

セイバー君、中々わかっておられる、そう深く考えたらアレだからね、みんなもそこらへんはサラッと流そう！

「まっ私も本音を言えばマンツーマンでマサの相手をするのが疲れるからってのはあるんだけどね」

「そっちの方が妙に説得力あるな」

むっ？なにかね？凜君、士郎君、その視線は、ふむ・・・

「５０パーセント！ボクのＭＡＸパワーの５０パーセントも有れば
ボクはキミ達を」

「言わせるか！」

『ドンッ！』

『ガキン！』

阻止された、あえてソッチん選んだというのに残念！

「ハハ・・・賑やかになりそうだな・・・」

「シロウ？全くと言っていいほど目に力が篭っていません」

むっ、全く彩りのある生活を約束するぞ？そう！

「じゃ凜ん家からカレー鍋を取ってこよう！そしてやはりカレーパーチーを開催せねば！」

カレー的な意味で！いやまあカレー以外も色々作れますけどね？

「シロウ！早く帰りましょう！そしてカレーを！」

おう、やっぱしセイバーさんの食いつきが半端ねえッス、食いしん坊め！でも美味そうに食べる姿は好きです。それにキラキラ笑顔が可愛いです。

「またソレ？まあいいけど・・・あっ！ついでに荷物とかも取ってこないとね？マサ？アンタどのくらい運べる？」

おう？今回は凜のＧＯサインもでなすった！流石の凜もあのセイバーの笑顔には勝てないようですな。

っと荷物がどれくらい運べるかでしたな？ふむん・・・

「家丸ごと運べるが？」

「はっ？家丸ごとって？いやアンタならやりかねないわね・・・」

やりかねんつうか出来ますってばさ？バグキャラ、ナメんなよ？

「そんな事されたらシャレにならないから・・・とりあえず軽く荷物は纏めとくわ」

結局、凛さんはそう決めなさいました。

「カレー鍋もお願いします。」

勿論セイバーさんにもそう言われた、任せれ、二日目の熟成を見せてやろう！

「士郎？つうわけで今夜はカレーパーチーだ！」

で士郎にもそう振ったら、ものっそい嬉しそうな顔で

「わ・・・忘れられてなかったんだな！うん勿論だ！マサ！」

って言われた、思わず目頭が熱くなった、チラッと凛とセイバーの方も確認したらこの二人も

「クッ・・・何かしら・・・衛宮君も見てると・・・クッ・・・」

「ええ・・・熱いものが・・・クッ・・・」

ってなっとりました。そして士郎はそんな俺達を不思議そうに見

ていました・・・クッ・・・

と俺と凜、セイバーが胸の痛みを耐えていたらば

「こんばんは、お兄ちゃん？ちゃんと呼びだしたね？」

と聞き覚えのある声が聞こえた、つうか昼に聞いたし？つうか今夜中よ？全く！

「コラ！イリヤ、こんな夜中に何してんの？昼にも言ったけど拉致られっぞ？」

「ふえ？アレ？マサ！！」

はいそうですマサさんですが？

「マサ？アンタ知り合い？」

いやいや凜さんや知り合いも何もアレですよ？

「ダチだ！ね～♪」

「ね～♪」

うむ、可愛いぞ、ナイススマイル！ってそだ

「お兄ちゃんって士郎の事か？士郎って妹いたの？」

「いや、初めて・・・違う、昨日会った子だよな？」

ふむ、妹ではねえけど顔見知りってとこか？

「うん、忠告しにね？ってそうだ！なんで冬木のセカンド・オーナーやセイバーと一緒にマサがいるの？まさか・・・マサって・・・でも有り得ない・・・」

ほえ？イリヤさんや？どうしたの、つうか途中で質問やめるとかされたらマサさん答えようがないよ？

「えと・・・一応確認ね？マサってサーヴァント？」

む？俺ですか、ふむ・・・

「サーヴァント？だ！」

あえて疑問系にしてみた。

「嘘！でも魔力感じないし・・・アレ？今なんかハテナが入ってなかった？アレ？」

おおう！ビックリ顔で混乱中です。

「えとアナタが誰かは知らないけどマサは私のサーヴァントよ・・・自信はないけど・・・で私やセイバー、サーヴァントの事を知ってるアナタは誰かしら？まっ予想はついてるけど」

あっ！そういやそうやん？結構重要やん？まっ確かに俺も何となくは察しがついてるけどね？

「マサがサーヴァントだったなんて・・・むう！気付かなかったよ、

でもそれなら仕方ないよね？ン、コホン！私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン、聖杯戦争の参加者よ？というわけで、殺っちゃえバーサーカー！！」

へえ！イリヤのフルネームってそんなんだったんだ、って今、『殺』っちゃえって言わなかった？イリヤっ子？聞き間違え？

「■■■■■■！」

あらやだ？何かしら？なんか文字に出来ん叫び声が・・・

『ブォン！』

まあ巨大な剣ですね？

「マサ！」

「マサナリ！」

「マサァァァ！」

おやま？そんなに慌てなくても大丈夫ですよ～

「素手バリアァァァ！」

『ガキン！』

こんくらい余裕で防げますからね？

「嘘！素手で私のバーサーカーの攻撃受けた！ヘラクレスだよ！」

「バグキャラですからね～？カッチカチやぞ？ってコラ、イリヤっ子！急に何すんの！友達にバーサーカー、けしかけたらいけないって習わなかったのか！もうマサさんだからよかったけど、普通の人なら潰れてるよ？」

ヘラクレス？聞いた事あるような？いやまあいいさね、それよか、このバーサーカー君、アレだよ？デカイ上に半裸だし、そんなんで道歩るってたら、国家権力にカシャってされんぞ？

ここは教育してやらねばな！つうわけで！

「もう！また半裸で歩き回って！アンタは図体ばっかり大きくなって！母さんねまた
隣の奥さんに笑われたのよ、もう母さん恥ずかくて、買い物にもいけないじゃない！」

息子を叱るお母さんモードで怒ってみた！いやむしろオカンモードだな、まっ俺にはいないけど多分こんな感じ？

「■■■■■（母さんゴメンよォォ）！！」

ほらね？バーサーカー君、キッチリ土下座つきで謝ってるし？

「コレは予想外ですね・・・」

「ああ・・・」

何を言っておるのかねセイバー君、士郎君オカン（偽）パワー、ナメんなよ？やんちゃなアイツだってひれ伏す

「はっ恥ずかしいのは私の方よォォォ！」

凛の叫び声が響き渡りました、うむ、凛さんすっごくイイ感じ！

・・・・・

セイバー視点

あまりの光景にほうけてしまっていました、が考えてみたら、アレ程の攻撃を真正面から平気な顔で受け止めたマサナリの防御力は凄まじいものがあります。

先程も規格外だと思いましたがこの体の頑丈さに関しても規格外と言わざるえませんね。

「バーサーカー何してるの！ちゃんと戦いなさい！」

イリヤスフィールの言う事も最もだと思います、自身のサーヴァントが土下座してる様を見れば普通はそう言うでしょう・・・

「■■■■■■■！！」

ハッ！いけない。

『グッ！』

私もマサナリを加勢をしなければ、と剣を構え飛び出そうとする、しかし

「ああもう、しゃあないですなぁ？イリヤ？オマエ、後でゲンコな？っとセイバー君や？俺にやらせれ？よかろ凜？」

とマサナリに止められてしまう、どうやら一人で戦うつもりらしい、そんなマサナリの言葉にリンは

「大丈夫なの？」

とマサナリに聞いているがマサナリはニカッと笑いながら

「まっ見てろ！マサさんの喧嘩っての・・・」

『ゴキゴキン！』

両手を開き指を鳴らしクビ回しながら

「見せてやんよ！」

『ダッ！』

その言葉と同時にバーサーカーに突っ込む、一見すれば無謀な特攻

「■■■■■！」

『ブォン！』

事実そんなマサナリに反応したバーサーカーはその巨大な体躯に似合う、斧のような大剣を振り下ろす。まともに受けては粉砕されてもおかしくない程の一撃。

「きかねえってば！」

『ガッギャリン！』

しかしその一撃をマサナリはまたも素手で受け、さらにそれを受け流す。

『ドオン！』

受け流された一撃が地面をえぐる、えぐられた地面がその一撃の破壊力を伝える、なんて威力！

「■■■■■！」

バーサーカーが咆哮を上げ再度その斧剣を振るおうとするが

『ガッ！』

「■■■■■■■！！」

マサナリが斧剣を踏み付けそれを許さない

「バーサーカー！どうしたの早く振り払って！」

イリヤスフィールがバーサーカーにそう命令するがその顔は驚愕に染まっている、いやイリヤスフィールだけではない、この私もリンもシロウもだ、無理もない、体格からして倍以上もあるというのに・・・信じられない光景

「悪いな？俺ぁ今からカレー温っためねえといけねえんだ？決めさ

せてもらうわ？」

マサナリはそんな私『達』の驚愕をよそにそうバーサーカーに告げると

『トトンッ！』

バーサーカーの持つ斧剣から腕へ、そしてその腕から肩、首へと駆け上がり。

『ガッ！』

両の足でバーサーカーのクビを挟むと

「おらよ！シュタイナァァァ！」

『ブォン！！』

その巨体を・・・

『ズォォォドン！』

地面へと転がしたのだ

「バーサーカー立ちなさい！」

「■■■■■■■■！！」

バーサーカーを地面に転がしたマサナリの力は凄まじいものがあるがやはりその程度ではバーサーカーを戦闘不能には追い込めない

イリヤスフィールの言葉に反応したバーサーカーが立ち上がろうとするが

『グッ！』

「残念ながらバーサーカー君？良い子は寝る時間ですよ？」

マサナリがバーサーカーに馬乗り気味にバーサーカーを抑えつけ拳を握りこめ

「おやすみィィィ！！」

『ガッゴン！！！！』

その拳をバーサーカーの顔へと振り下ろした、その一撃を受けたバーサーカーは

『ビクン！』

と痙攣を起こすとそれを最後に動かなくなった・・・なんて強さ・・・

「ハハ・・・なんて奴、流石バグキャラだけはあるわね・・・神の子を殴り倒すなんて・・・ホント味方でよかったわ・・・」

リンの呟きに私も頷きながら

「ええ・・・とんでもありませんね・・・」

と答える、するとリンは

「ねえセイバー？アイツ、アレで本気じゃないって言ったら信じる？」

驚愕の一言を告げる、アレで・・・本気じゃない？いや確かにかなり余裕があるようには見えましたが・・・

「嘘だろ！遠坂、アレでか？」

シロウがそんなリンの一言にそう返すとリンは引き攣った笑いをしながら

「その気になれば地球を割るって言ってたわよ？・・・まあそのせいで令呪使わされちゃったけど・・・あっまた腹が立ってきた」

引き攣った笑いから、殺気が篭った笑いへと変わった、恐ろしいですね・・・マサナリもそうですが、リンも恐ろしいです、同盟を組んでよかった。

・

・

・

マサ視点

俺、勝～利！

「マサ！」

おう凜さん？素敵な笑顔です、俺の勝利を喜んでいただけるんですな？

「おめでとう」

『ドン！』

『ガキン！』

何故かガンドを撃たれました、何故に？つうか

「どんなおめでとう？アグレッシブすぎるぞ凜さんや？」

「アノ時の事を思い出したら腹が立ったのよ！」

はっ？アノ時？はて、心当たりがありすぎてどの時かがわからんでござるよ？

まっいいさね、ガンド撃たれるのは慣れてるし。

さぁてイリヤっ子にゲンコをくれてやらねばね？

『ザッザッ』

「マサ、凄いね強かったんだ、でも・・・まだ終わりじゃないよ！私のバーサーカーはヘラクレス・・・さあ蘇りなさいバーサーカー！」

『シーーーン』

「えっアレ？なんで？ゴッドハンド（十二の試練）は・・・アレ？」

いやイリヤっ子、何を言ってんでございましょうつうかゴッドハンドって何？爆熱？いやアレはフィンガーだっけ？

「なんでなんで！バーサーカーには十二個の命があるんだよ！一個無くなったくらいじゃ」

「いや死んでねえし？気絶してんだけだし？つうか十二個も命あんのコイツ？」

いやマサさんビックリだわ、っとまあそこは置いといて

『ゴチン！』

「イタッ・・・ううマサ痛いよ～」

当たり前です！痛いようにしたんだから

「全く、イリヤ俺につうか俺らに言うことあるよな？」

「ぶう！殺すなら殺し」

『ゴチン』

「イダッ！そんなに叩いたらバカになっちゃうじゃない！」

「既におバカでしょ！なんだ？殺すなら殺しなさい？アホか？なんで俺がイリヤを殺さにゃイカンのじゃ！アレか魔術師ってのはバカばっかりなのか？」

全く、ホントにマサさん怒るよ？つうか怒ってるよ？

「あっ凜は別な？」

一応、凜にはそう言っておきます、またガンド構えてたしね？まっ撃たれてもきかないけど、たまには早めに対応するのだ！

「バカじゃないよ！バカって言う方がバカなんだよ、マサのバーカ！」

カッティーン、このちびっ子は！

「バカじゃありません！少なくともイリヤみたいに言わないといけないことがわからないような、おバカじゃないですぅ！」

確かに勉強は出来ませんけどね、留年しかけたけどね！でももっと大切な事ってあるだろ？

「むう・・・何を言えばいいのよ！」

ハァ～、ありがとうは言えるのになぁ、しゃぁねえ

「ヒント『ご』ではじまって『い』で終わる言葉だ！」

こんだけ言えばわかるだろ？

「ン？あっ！えと・・・ごめんなさい？」

「はい正解！ほら凜と士郎、セイバーにも！」

ビッと凜達の方を指差しながらイリヤにそう言います！しかしイリヤっ子、不満タラタラな顔で

「ええ～！」

とかほざきやがりましたので

「どうやらお尻ペンペンがおのぞみのようだな？」

つったら慌てて

「それはイヤ！わかったから、謝るよ！」

と走って凜達の方に向かいペコッと頭を下げつつ

「ご・め・ん・な・さ・い！」

と謝りました、まあめっさ不満顔でしたけど

「凜、士郎、セイバー許してやってくれ？一応は謝ってんで？ゲンコもくれてやったし？頼むわ？」

続いて俺も凜達三人に頭を下げつつそう頼む、ダチ通しの殺しあいなんて見たかねえしね？

「ハァ～まあ被害はゼロだし実質攻撃受けたのはマサだけだし・・・私も甘くなったものよね・・・いいわよ」

おお！流石は凜さん、優しいですな

「そうですね、それにもし私がイリヤスフィールを狙ってもマサナリが止めるでしょう？」

「当然だ！その場合はセイバー君、ゲンコかお尻ペンペンが待ってるぞ！」

「お・・・お尻ペンペン・・・恐ろしい攻撃ですね・・・流石に受けたくはありませんので不問としましょう」

うむ！流石のセイバー君もお尻ペンペンはキツイらしいな？

「戦ったマサが許してるんだ俺もいいぞ、本々殺しあいなんてしたくなんてないしな」

うむ、士郎君もやはりイイ奴ですな。

つうわけで

「イリヤっ子よ、許してもらったぞ？さて次は？」

「え？えと、ありがとう？」

うむ、１００点満点だ！

っとそだ

「イリヤも晩メシに一緒に食うか？今日はカレーパーチーだぞ？」

イリヤも晩メシに誘ってみます

「いいの？私、マサを殺そうとしたんだよ？」

おやま、何をいまさら、つうか

「俺、前に住んでた所で俺の命狙ってる殺し屋と同居してたぞ？」

勿論、Yさんの事です！

「何よそれ？アンタどんな生活してたの？」

む？凜さん、どんなつわれても・・・

「見ての通りの学生ですが？ガクラン着てますやんか？」

「いやそこじゃなくて！まっまあいいわ・・・突っ込んだら疲れそうだし・・・」

おいそこはガシガシ聞いてこいよ？ネタはたんまりあるぞ？

「マサはやっぱり変わってるよ」

「変人で有名だったからな？それに命を狙われた回数なんて軽く三桁越えてんし？ああバラエティーにとんだ人生バンザイ！」

キーワードは・・・ジジイだ！

「なんでしょうマサナリを見てると・・・胸が・・・クッ・・・」

「ああ・・・痛いな・・・クッ・・・」

それって恋の始まりかも・・・ねえよ！始まるかい！士郎男だし、完全に可哀相な奴を見る目だもの、さっき士郎を見てた時の目だもの・・・チクソウ・・・

「マサ大変だったんだね？よしよし」

ガックリと膝をついてたらイリヤに慰められました、やっぱりイリヤは優しい子でした。

「何かしら・・・普通は逆でしょってツッコムべきなんだけど寧ろシックリくるわね」

いやまぁ・・・結構な頻度でMさんに慰めてもらってましたから、具体的にはゲームでフルボッコされてた時とかね！

フルボッコしたのMさん本人だけどね！

「で？晩メシどうすんの？」

「立ち直り早いねマサ？」

切り替えの早さが自慢ですから！

「えっと・・・食べたいかな？お昼に食べたマサのお弁当美味しかったし」

うむ、そう言っていただけるとマサさんとしても嬉しいですな、では士郎に

「つうわけでイリヤも参加て事で？いいよな士郎？」

「ああ、少し聞きたい事もあるしな？」

聞きたい事？まっいいさね、ってセイバー？

「カレーの量は？」

「大量だ！」

「では構いません」

心配すんのはカレーの分量かい！全く食いしん坊さんめ！

「たった今、殺しあった・・・違うわねマサ的には喧嘩かしら？した相手と晩ご飯を一緒に食べるなんてね？大物なのか大バカなのか？」

「どっちも外れ変人です！」

「そうね？やっぱりそれが一番シックリくるわね？」

そういう事ですよい、マサさんはもうそれで行くのだ、突っ走るナリ。

「じゃ行こう？あっ！バーサーカーどうしよう？霊体化させちゃえばいいかな？」

おう霊体化？

『フッ』

おう？薄くなった？すげぇ！

「まさかバーサーカー、ＮＩＮＪＡ？」

「違うよ霊体化しただけ」

ほうほうコレが霊体化ってやつなのか？

でも・・・

「イリヤ？バーサーカー君、横たわったまんまだぞ？」

「見えるの！」

「薄っすらと？幽霊の知り合いいるもんで」

まだ登場はしてないけゲフンゲフン・・・メタでござった。

「幽霊の知り合いって・・・アンタどこまで非常識なの・・・」

「魔術師に言われたくねえでえす！」

「うっさいわね！バグキャラのくせに！」

・

・

・

「止めとこう・・・朝にやったばっかだし・・・悪かったな凛」

「そうね・・・不毛ね・・・私も悪かったわ・・・」

またも何となく謝りあう俺と凜でありました。

でその後は

『ズシンズシン！』

「バーサーカーおんぶってマサ力持ちだね？」

「おうよ！軽い軽い、まだまだイケるぜ？」

とバーサーカーを俺がおぶって士郎ん家に向かう事に、あっ因みに一般の方々にはわからないように結界とやらを張ってもらっとりますよ？霊体化も解除されとるしね？

「不自然ですがマサナリがやると自然に見えてしまうのは何故でしょう？」

「セイバー？多分慣れてきたのよ・・・私もそうだし」

「俺もだな・・・」

そいつぁよござんした、こんくらいでビックリしてたら持たないからね？自分で言うのもなんだけど。

「マサ私も持てる？」

「おお余裕余裕！つうか全員でも余裕だっつうの？っとそだ！」

『ズシン』

一旦バーサーカー君を下ろして。
「バーサーカーの上に乗るのだ！」
「はっ？なんで？」
「マサナリ？意味がわかりませんが？」
「そうだぞ？なんでだ？」
むう察しが悪いですなぁ見ろイリヤを
「うん！わかった！」
って素直に乗ってるよ？イリヤは素直な良い子です、っと一応は説明せねばならんか？
「バーサーカーごとみなさんを運びます！高速で！凛の家の荷物も取ってこなイカンしな？ほらバーサーカーかさ張るだろ？だから一旦士郎家に置いてだな？まあカレー零しちまってもいいなら」
『サッ！』
「さあ早く！シロウ、リン！」
素晴らしい反応速度ですなセイバーさん？言い切る前にバーサーカーに乗ってるし
「かさ張るってアンタ・・・まあいいけど・・・確かに荷物あるし

ね」

「なんかバーサーカー・・・泣いてるように見えるんだが・・・」

そういいつつも二人ともちゃんと乗ってくれました。

で

「よっと！シッカリ捕まってろい？まずはじゃ士郎家へＧＯ！」

『ドンッ！ズダダダ！』

と士郎家へダッシュ！その時のそれぞれのリアクションは

「速い速い～！」

イリヤはしゃぐ。

「コレだけ乗せてそのスピードって・・・ホント、バグキャラね」

凜、俺のバグっぷりを再確認。

「カレー・・・カレー・・・」

セイバーさんもはや心はカレー、一色。

「なんでさ・・・」

士郎なんでさ、でした。

そして士郎家に到着後

『ズシン』

とみなさんを下ろして。

「凜？行くぞい？」

「ええ、それじゃ少ししたら、戻ってくるわ」

『バッ！』

再び凜を抱えます。

「出来るだけ早くお願いします。」

むろん、というべきかセイバーに急かされつつも

『ドンッズダダダ！』

凜の家に急ぎました。だってセイバー君の目がね？カレーになってたんだもん、凄くワクワクしてる顔だったんだもの、そら急ぐわい。

「さっきよりハイペースね？まっあのセイバー見たらね？気持ちはわかるわ」

凜さんもわかっていただけて幸いです。

で家に到着後

「えと、とりあえずは必要なものは厳選するから少し待ってなさい」

「別になんでも持って来ていいぞ？つうかタンス事持ってたら早くね？」

との俺の提案によりタンス事持って行くことに。

「バッバランスが厳しいわね・・・でもこのカレー零したら・・・」

「セイバー・・・泣くんじゃね？」

「ちょっと見てみたいけど、やめとくわ」

というような会話をしながら士郎家に戻りました。

残りの荷物は明日以降で！

第六話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

戦闘シーンは苦手です・・・

ええもはやＦａｔｅの名前を借りた悪ふざけになってきました・・・

でも頑張って書きましたので許してやって下さい。

コレからも更にアレな事になりますが・・・お暇なればまた見てやって下さい。

感想などもありましたら是非に。

第七話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

凄く久しぶりにコッチを更新。

もうかなりキャラ的にも話し的にも、とんでもないことになってます

それでも大丈夫！という心が強いお方はどうぞ。

第七話みたいな雰囲気！

「お代わりを！」

「あいよ！」

ただ今、カレーパーチー、絶賛開催中！まぁパーチー言ってもただカレー食っとるだけなんスけどね？

ちなみにやはりというべきかセイバーさん、モリモリ食べてます、まぁモリモリつうより、もきゅもきゅって感じだけど。

「お弁当も美味しいかったけどカレーも美味しいね？」

フッ・・・イリヤっ子にも好評なようですわい。

あっちなみにバーサーカー君は外にいます、デカすぎて家に入れないんですな、あっ一応カレーは渡してんぞ？

「■■■■■■■！！」

つって喜んでたぞ？多分。

「マサ、今度、コレ作り方教えてくれよ？」

「おう！コツはコーヒー豆だ！まぁ詳しくは後でな？」

士朗は料理する側としてレシピが知りたいようですな。

「ふぅ、そろそろサッパリしたのが食べたいわね？、マサ、アンタ何かイイの作れない？」

サッパリか・・・まぁ確かにセイバー以外はみんなカレーを十分満喫したようですしな・・・よし！

「杏仁豆腐、食う人～！！」

俺が全員にそう聞いたら、みんな食べるとのことでした。

ちなみに

「いただきます！！」

と今だにカレーを頬張ってるセイバーさんの挙手が1番早かったです。

でサクッと杏仁を作ってみんなに振る舞いました。

コレもまた好評でござった！

「マサ？私のサーヴァントにならない？」

で杏仁後にイリヤっ子が突然そんなことを言い出したけど

「悪い！自覚はねえけど俺ぁ凛のサーヴァントなんですわ、スマンなぁ、あっでもなんかあったら言えよ？ダチとして手助けくらいはするぜい？」

つっといた。

「むぅ、残念！」

イリヤは微妙に残念がってたけど結構アッサリと引いてくれました。なんやかんやで素直さんです。

「マサを欲しがるなんてどうかしてるわ」

「おやおや凛さんや、心にもないことを」

「凛がそんなことを言っちゃうんだったらホントにマサ貰っちゃうよ？」

俺とイリヤのダブルアタック！

「むっ・・・まぁ確かにマサは強いし、魔力もいらないから負担はゼロのはずなんだけど・・・」

けど？

「疲れるのよね・・・精神的に・・・」

むっ・・・そこは、アレだよ、うん！

「気合いで乗り切るんだ！ニンゲンサイゴハキアイヨ～、キモチデマケタラダメネ！」

「ハァ～・・・だから疲れるって言ってるのよ・・・」

むうどうやら外人っぽいアレがお気に召さなかったようだ、残念！

「まぁ・・・正直な話し、手放す気は今の所はないわ、役に立つのは役に立つしね」

「ふ～ん、だってマサ？」

フッ・・・凜め！

「まさにツンデレのお手本だな！流石は凜だ！」

グッっナイススマイルでサムズってみた。

「死ね！」

『ドン！』

『ガキン』

やはりガンドを撃たれた。

「マサってホント、勇気あるよな・・・」

「ハグハグ・・・アレは勇気ではないと思いますが？マサナリ、お代わりを！」

なんか士朗に褒められたような気がするが即効セイバーに斬られた、一瞬、お代わり拒否をしようか悩んだが

「お代わりな？あいよ！」

やっぱし早く早くとキラキラ眼で見るセイバーの視線には勝てなかった、だってめっさ可愛いんですもん、こんなん勝てるか！

「持ち帰りたい・・・凄く持ち帰りたい・・・」

凛もあのセイバーの瞳の余波にやられとるしね？

「なぁ士朗、セイバーくれ！」

「だからやらないって！！」

チィ・・・残念、まぁネタだけど。

「凛、マサちょうだい？」

おう！なんと！

「・・・

「マサさんは漢だからね！気にしないさ！」

「マサ・・・簡単だね・・・」

簡単とか言うなイリヤっ子よ！意外と複雑な構造になってんだぞ？多分。

とコチャコチャありながらも、カレーパーチーは終わり、今はまったりタイム中で

「そういやイリヤって、士朗んことを『お兄ちゃん』って言ってたよな？アレって何？士朗の趣味？」

フと思い出したことがあったんで聞いてみた

「マサ！人聞き悪いこと言うなッ！！セイバーも遠坂も違うからな！！」

「人の趣味にとやかく言うつもりはないわよ？ただ、半径３メートル以内には近付かないでね？」

「シロウはマスターです、しかし・・・」

うむ、不用意な発言でした、士朗君、大変なことになってるな？

がしかし

（イケるなイリヤ？）

（まかせてマサ！！）

更に畳み掛けてみようとイリヤにアイコンタクト。

「ええ～だって私に会った時に、ハァハァしながら俺のことはお兄ちゃんと呼べ！って言ってたのに～」

うむ、上手い！

「人の趣味にとやかく言うつもりはないわ、ただ、半径3キロ以内には近付かないでね？衛宮君？」

『ニッコリ』

「私も・・・お兄ちゃんと呼ばされてしまうのでしょうか？そうなる前に・・・」

『チャキッ』

凛さん素敵な笑顔、セイバーさんは覚悟完了で見えない剣を構えてますし？

「なっなんでさァァァ～～～」

士朗の叫び声が響き渡りました・・・

「よくやったイリヤ！」

「フフ～ン！コレくらい軽いよ」

そんな士朗の横でグッとサムズしあう俺とイリヤでありました。

あぁ～面白ぇ。

「で話しは大分それたが何故に？」

アレから士朗の誤解を解き、再度イリヤに聞いてみた

「えっと・・・ほら、私からしたら年上に見えるでしょ？だから」

ふ～ん、なるほろね？

「マサも、お兄ちゃんって呼んでほしい？」

ほう、お兄ちゃんか・・・

「今日からイリヤの兄貴分！鬼島　政成です、どうぞヨロシク」

ペコリと一礼。

「やっぱりや～めた！いままで通りマサでいいや！」

アッサリ撤回された。

「なんでマサの場合は何も言われないんだ」

「アイツの場合はネタにするからでしょ？」

「それに口を挟む隙がありませんでしたし」

納得出来ない顔の士朗と解説の凛&セイバーでした。

っとそだった。

「士朗？オマエ、イリヤに何か聞きてぇことがあったんじゃねえの？」

またもや思い出したんで士朗に話しを振る

「ン？ああ、イリヤ・・・アノ時、ほら学校で会った時だ、なんで、あんなことを言ったんだ？」

ン？あんなこと？

「ン？あ～、アレ？アレはシロウが聖杯戦争でアッサリ死んんじゃわないようにだよ？だってシロウを殺すのは私だもん！」

ふ～ん・・・殺す・・・ねえ？

「まっアノ時は・・・だけどさ、今は・・・」

むっ？なんか見られた、とりあえずニカッとサムズしてみた。

「フフッ！その気はないけど、それにもしそんなことしたら」

『ヒュ！ヒュ！』

お尻ペンペンのシャドーをしてみた

「ぶるぶる・・・アレの餌食だもん、それだけはイヤ！」

「たっ確かにアレは喰らいたくありませんね・・・ある意味、どんな宝具より効果が高いかもしれません」

フッ・・・なんか知らんが恐れられた

「凛！やったぞ！なんか宝具が出来た！その名も『お尻ペンペン』だ！」

「却下！そんな宝具あってたまるか！！」

残念無念、却下された。

「まっまぁマサの宝具？のことはいいとして『なんで』俺を殺そうと思ったんだよ？」

そんな俺んことを流しつつ士朗君がイリヤにそう問うてます、まっ確かに、そう言われればそうですな？

ふむ・・・

「顔つきが気にいらないとか？」

「アンタじゃないんだから」

まっそらそうですな？けど流石の俺も、そんだけん理由で殺しざたにはしねぇですよ？まぁ気にいらない奴ぁブッ飛ばすけど。

と俺と凛が暢気に話していたら

「なんで・・・なんで？そうだよね？シロウにはわからないよね！

私が！私がッ！！」

『グオッ！！』

突然イリヤがキレた・・・

「なっなんて魔力！！」

『ゴヒュウ・・・』

イリヤん回りに風みたいなナニかが回っている

コレは・・・マズイ？

「クッ！シロウ！！」

『バッ！ヒュン！』

げっ！セイバー振りかぶっとる！

くそったれ

『ガキンッ！』

「マサナリ！今のイリヤスフィールは危険です！何故護るんですかッ！！」

はぁ？んな当たり前んことを

「ダチだからだっつうの！！頼むから今は引け頼む！！シロウも凛

も今は非難してくれ！」

「マサはどうするんだよ！！」

「俺ぁ頑丈だから大丈夫だっつの！！」

みんなに頼み、下がらせる。

さて・・・

「イリヤ？落ち着・・・かんくていいや・・・、気にいらんこともあらぁな？イライラしちまうこともあらぁな？ほら暴れてスッキリしちまえ、なぁに俺ぁ頑丈だからよ？チィとくれぇ八つ当たりしたってケガはしねぇよ？」

「ワァァァア！！」

『バキバキバキ！！』

「■■■■■■■！！」

『ブォン！！』

壁を壊してバーサーカーが現れ、デカイ剣で振り下ろされる。

『ガキン』

それをそのまま頭に受ける、が効きはしない。

しかしバーサーカーの・・・じゃねぇな？コレはイリヤんか？の

攻撃はやまない

『ガキンガキンガキン・・・・・』

何度も何度も振り下ろす、それが１００を越えたあたりで、ようやく

「ハァハァハァ・・・」

攻撃が止んだ・・・

「スッキリしたか？ちったぁよ？」

そんなイリヤの頭にポンと手を置き、そういうとイリヤは

「あっ・・・あっ・・・なっなんで？」

とまだ少し混乱気味。

「ダチだからな？ほれ！顔あげな？」

「えっ？」

「涙でぐっちゃぐちゃだぞ？ほら」

『グイッ』

結局、無理矢理気味に顔をあげさして涙をふきふきしました

「うむうむ！コレでよし！じゃ片付けせんとな？イリヤ、オマエも

手伝えよ？」

「なんで・・・」

はぁ？なんでって、こんイリヤっ子は！！

「散らかしたら片付ける！基本、オケ？」

「違う！！なんで理由を聞かないの！なんで攻撃を受け続けたの！なんで！」

あぁ～

「さっきも言ったべさ？生きてりゃあ何かに当たり散らしたくなることもあらぁ、んなことぁ俺だってある

コレばっかりは、どうしようもねぇよな？

俺ぁな、そういうんを受けとめたりすんのもダチの役目だと思ってる、だからだな？

まっ理由に関しては今はいいわい、いつか話しゃあいい」

気になるこたぁ気になるが、まっ色々あんだよな？多分よ？

「帰る・・・」

ふむ・・・なるほど・・・

「帰さん！こらイリヤ！俺に片付け全部押し付けるつもりか！」

『ガシッ』

ガッチリ頭を掴んで阻止！

「イタタタ・・・ちょっと、普通ああいう場面だったら素直に帰すものでしょう！」

よしよし、いいぞ、ノリが戻ってきたな？重いなぁ俺には似合わんしな？

つうわけで

「残念ながら俺を相手に普通がどうたらとか片腹痛いわ！そんなもんが通じると思うなよ！後、オマエ、シロウに、ごめんなさいしてねぇじゃん！」

「アレはシロウが悪いんだよ！私がどんな思いで過ごしてきたか知らないくせに『なんで』なんて言うからッ！！」

いやいや

「家を壊してしっちゃかめっちゃかにしたことじゃい！もしココに士朗の秘密のＤＶＤがあったらどうするつもりだ！」

最後の方は士朗に配慮して若干小声で話しました

したらイリヤっ子

「・・・うん、あやまる」

と実に素直に頷いた、うむ、イリヤ君ならわかってくれると思ったぜ。

で、イリヤ君、早速トコトコと士朗のところまでいき

「あの・・・シロウ・・・ごめんなさい」

ペコリと謝る

「あっああ・・・だっ大丈夫、俺も気付かないうちにイリヤを傷付けちまったかもしれないし」

うむうむ、流石は士朗君、優しいやつだ・・・がっ残念ながら

「ううん、そこじゃなくて、シロウの秘密のＤＶＤ壊してごめんなさい」

的外れだぜ！！

「衛宮君・・・まぁ衛宮君も男だし・・・大丈夫、普通よ普通」

素敵に理解を示しながらも距離をとる凛さん

「シロウ・・・私はアナタの剣になると誓いました・・・しかし・・・私の剣は折れそうです」

悲しい顔でそう告げやはり距離を取るセイバーさん。

「なっなっでたらめだ！誰がそんな」

「マサが言ってた」

「マサァァァ！！」

士朗がものっそい顔で突っ掛かってきたが
「あっ何？そんなに大切なＤＶＤだった？悪い！」
更に被せたら流石に殴られた、まっ
「いっ痛って～～～～」
逆に士朗が手を痛めてましたがね！
・
・　・　・
凛　視点
衛宮君をからかっているマサを見ながら
「ホント・・・真面目なんだかふざけてるんだか？」
思わずそんな言葉が漏れる、先程のイリヤの激昂、何故、そうなったかはわからない、ただ衛宮君の言葉が引き金（トリガー）になったとは思うけど
その時のマサの対応は、今のようにふざけた様子とは違い、真剣であった。
「あんな臭いセリフ、マジな顔して普通言う？」
「しかし、マサナリのあの対応は私は好ましいと思いました、私な

どただ剣を振ることしか出来なかった・・・」

あら？セイバー？何、落ち込んでるのかしら？

「セイバー？あの場合はセイバーが正しいわ、斬られそうになった私が言うのも変だけどアレがサーヴァント・・・というより『コッチ』側では普通、マサが変わってるだけ」

そうよね？それが『コチラ』側の普通。

「まぁそのお陰で助かったんだけど・・・フフ・・・ねぇ凛？マサやっぱり、ちょうだい？」

「イヤよ」

「残念」

今度はすぐに即答した

アレだけバーサーカーの攻撃を受けておきながら無傷であるというふざけた頑丈さにや戦闘力

コチラ側からしたら甘いやつだけど、既に私はその甘さもまた、気にいってしまっている。

そのせいか私も甘くなってきてるわよね？ホントに。

マサを召喚する前だったら間違いなく、こんなこと考えなかったわね？

「イリヤっ子！そろそろ片付け始めんぞ？こっちゃこい！あっ手を切ったらいけないんで軍手を嵌めるように」

「うん、わかった」

『タッタッタ』

アレだけのことを仕出かしたイリヤに対してもう普通に対応してるし。

「ホント、変なやつ」

「マサナリはそれでいいのでは？少なくとも私は好感をもてます」

まっ確かにそうなんだけどね？

・・・・

とそれから2時間後。

「うむ、完璧！」

「うん、完璧だね」

とスッカリ戻通りになった衛宮宅。

「なんでさ？」

衛宮君、その気持ちはよくわかるけど

「私が召喚した時も、メチャメチャに散らかってたけど朝起きたら戻通りになってたわよ」

まさか、ここまで早く作業してるとは思わなかったけど

「マサナリ、ホントに何者なんでしょうね？」

バグキャラでしょ？

・・・・

マサ視点

持ち前の補修スキルを発揮して、士朗家を直し

「さて、夜も遅えし、そろそろ寝ないとな？朝、起きれなくなっちゃうよ、特に凛が」

と早めに寝ることを提案、ちなみにイリヤっ子は

「泊まっていい？」

「士朗？泊めていい？」

「あっああ別にいいけど」

と泊まることになっとります。

「そうね・・・衛宮君、衛宮君は早めに寝なさい、私は寝る前に・・・やる事があるから」

ギラリと凛さんの目が光ります、やっぱしダメでした・・・なんやかんやでうやむやにしようと思ったけどダメでした・・・

「ああ！俺、すぐに寝るわ！ああ眠たい、凄く眠たい！」

士朗め・・・見捨てやがったな・・・

「アレですね」

「そうアレよ！！」

「凛、アレって何？」

フッ・・・アレとは何かと・・・

そう

『パシャ！パシャ！！』

撮影会です・・・チクソウ・・・

「マサ、凄い」

「そうでしょう、ホント、いい体してるわよね？」

「私のバーサーカーと全然違う」

「あのような筋肉ダルマとマサナリを一緒にしてもらっては困ります」

「そうね、イリヤ、失言よ、余り失言が過ぎると会員から外すわよ」

「ッ！！イヤ！あやまるあやまるから！」

ホント、楽しそうね？つうか会員って何？会員制なの？もう意味わかんねえんですけど

そして

「■■■■■■！！」

バーサーカー、セイバーの言葉にショックうけて泣きだしてんですけど？

つうか俺も泣きたいんですけどォォォォ！！

第七話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

会長　遠坂　凛

副会長　セイバー

会員　イリヤ

でした・・・もうホント、何コレ？

完全に悪ふざけになってきてます、コレからもますます、そうなってくと思います・・・

更に更新が少し遅れがちになってしまうかと思いますが、少しつづではありますが頑張りますので、どうかヨロシクお願いします。

ではまた！

第八話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

今回もまたエライことになっております。
特に士朗ファンはもうマジでゲッソリしてしまうくらいに！！
ですので、それでも大丈夫さ！という強靭な心をお持ちの方はどうぞ。

第八話みたいな雰囲気！

朝起きたらイリヤが布団に潜り込んでた
しかし
「慣れたものでした！」
さて、朝メシ作るか？
あっちなみに士朗ん家、結構広えッス離れまであるからね、凜は離れで寝てます。
ン？おろ？
「おはセイバー！早えな？今日も元気か？」
セイバーさん既に起きてたようだ、でアイサツ。
「あっマサナリ、おはようございます」
うむうむ、シッカリとアイサツを返すセイバー、良い子さんですなぁ。
「あの・・・マサナリ？頼みたいことがあるのですが？」
はて？頼み？あっ！
「朝メシんリクか？」

「違います！どれだけ私が食い意地が張ってると思ってるんですか！ボリューム重視でお願いします。」

してんじゃんリクエスト？綺麗にお辞儀までしてからに。

まっいいけど

「朝はシッカリ食べにゃイカンもんなぁ？任せれ！至高のタマゴ焼きを食わせてやろう」

「至高のですか・・・それは・・・楽しみです！」

まぁキラキラと輝いた瞳をしてからに可愛いじゃないか！

「・・・またですか？」

「だって可愛いからさぁ？しゃあないやん？」

むろん撫でてた！

「か・・・可愛いなどと！だから私はサーヴァ」

「はいはい、可愛いもんは可愛いんで～す！」

「うっ・・・あっ・・・むぐぅ」

赤くなりながらも唸るセイバーさんに凄く癒されました。

「ハッ！いけない！マサナリ頼みとは朝食のことではありません！」

「でしょうね？で何さね？」

「でしょうねって・・・いえ、ンッン・・・できればで構いません手合わせをしてもらえないでしょうか？」

おう？手合わせ？ふむ・・・

「いいぜい！まっ『アッチ』じゃ毎朝、やってたからな？よし！じゃそのルールでやるか？」

とのことで道場へ移動、なんと士朗家、道場までありやがりました。

ちなみに移動中に外に出た時にバーサーカー君を見かけたんで

「おは！元気か？」

「■■■■■」

アイサツしといた、バーサーカー元気らしい、更に申し訳なさそうに

「■■■■■」

「あぁ気にすんな、別にケガしたわけじゃねえから！」

昨日のことを謝ってきた、律儀なやっちゃ

「マサナリ・・・ハッキリ言いますが不気味です。」

でしょうね？なんせパッと見、何もない空間と話してるようなもんだしね？

つうわけで

「いやバーサーカーにアイサツしとっただけ」

「いるんですか？筋に・・・ゲフンゲフン、バーサーカーが？」

「いるいる、ものっそい悲しい顔でセイバー睨んでる」

「そうですか？ではいきましょう」

セイバー君、スルーしやがりました。

「後でなんか持ってきてやっからな？」

「■■■■■」

流石に可哀相だったんでバーサーカーにそう言ったら、めっさ嬉しそうに頷いてた、バーサーカー君、見た目ゴツイくせに、以外と愛嬌があります。

・・・・

セイバー視点

『ヒュバババ』

「よっはっとっ」

『ヒュンヒュンヒュン』

クッ・・・当たらない・・・最初にマサナリが持ち出したルールを聞いた時は、思わず

「それは・・・私を侮っているのですね？」

と言ってしまったが、実際にやってみると、掠ることすら困難。

マサナリが持ち出したルール

マサナリは一定の範囲からは動かない、攻撃を受け止めたりはせずに避けるだけ、私が使っている剣を使うのは可という、私にとってはかなり有利なルール。

しかし・・・

「せいッ！！」

『ヒュ！フォ！』

袈裟斬りから跳ね上げるように脇腹を狙う。

「残念無念！」

『ヒュン』

やはり当たらない、アッサリとかわされてしまう。

『ピピピッ！』

「おっと時間だな？」

クッ・・・結局、一撃も与えることが出来ないとは・・・

「もう一度お願いします。」

しかし、このまま引くのは騎士の名折れ、せめて一太刀与えたいと、そう願いでる

「おやま？セイバーさんも負けず嫌いですなぁ？が・・・朝メシを作らな」

「仕方ありません、腹が減ってはなんとやらです、さっ早く朝食を」

騎士の名折れ？意味がわかりません、認めるべきことは認める！それが真の騎士です。

朝食に釣られた？全く私を愚弄するのですか？

「アッサリ引いたなオイ！まっいいさね？セイバー美味そうに食ってくれっから俺としても作りがいがあらぁな？じゃ行くべか？」

「はい！ただいま」

実に楽しみです。

なんですか？釣られたわけではありませんよ！！

・・・・

マサ視点

道場から戻り、勝手に朝メシを作り出します。

途中で士朗が起きてきて

「はやいな？あっ朝メシ作ってくれてるのか？よし俺も手伝うよ」

と朝メシ作りに参加、うむ、中々の手際！

「やるな士朗？」

「そうか？でもマサには敵わないな？」

「まっ日々ジジイを越える為に腕を磨いてるからな？」

といったような会話をしながらも、サクサクと作っていきまする。

『ガラッ』

「先輩～おはようございます」

ン？

「士朗、客か？」

って士朗？

「・・・・・・・・しっ・・・・しまったァァァ！桜！忘れてた！」

ホワッツ？どうした慌ててからに？

「士朗～～～ごは～ん～」

「あっおはようございます、藤村先生」

「桜ちゃん、おはよう！」

ふむ、更に来客？

「ゲッ！マズイ！藤ねぇまで！！」

むむ？大分慌ててるな？察するに俺達のことをどう説明しようかというところか？よし

「士朗！任せろ！」

グッと士朗にサムズ！

「はっ？マサどうする気だよ？」

「まぁ見てろ！」

スタスタと玄関先に向かい

「どうも～おはようございま～す」

まずはアイサツ！

したら、来客二人さん

「えっと・・・・」

「誰？」

とハテナ顔、俺の後ろからついてきた士朗君は

「えっと・・・・コイツは」

となんとか説明をしようとするが

『バッ！』

と手を出して遮り。ペコリと頭を下げて

「ええ、この度、はれて士朗の婚約者となりました、鬼島　政成です、性別　男（漢）通称、マサ、及びマサナリ、ヨロシクどうぞ」

必殺　事故紹介！

「せ・・・・せんぱ・・・・い？」

「士・・・・朗？」

うむうむ、混乱中ですな？

「バカだったァァァ！マサに任せた俺がバカだったァァァ！何言ってくれてんだァァァ！」
うむうむ、士朗イイ感じだぞ？
とそこへ
「朝食はまだでしょうか？」
セイバー登場！よし更に被せろ
「あぁコチラはセイバーさん、街中で歩いてるのを士朗が、おっ！金髪美少女！と鼻息荒く連れ帰ってきた」
「やめて！コレ以上はホントに！！」
フ・・・士朗君、甘い甘い
「ふぁ～朝からうるさい・・・ン？」
よしイリヤが起きてきたな！
（イリヤ？イケるだろ？）
（当然！！）
「お兄ちゃん、今日もお医者さんごっこするの？」
上手い！上手すぎる！恐るべしイリヤ！
「せ・・・せ・・せ・・せんぱい・・・」

「士・・・士朗！こんな小っちゃな子に！！」

うむうむ、動揺が広がってますな？

「何を言い出すんだイリヤァァァ！！誤解！誤解だから！」

「ほう！5回もお医者さんごっこを？」

「マサァァァ！！」

流石に殴られた。

「いっ痛ってぇぇ～～～～手も痛いけど視線が痛ぇ～～～」

やはり士朗が手を痛めた、それよか、来客二人とセイバーさんの氷の視線の方がダメージがでかそうですが。

で最後に

「ン～～～～頭が重いわ・・・マサ」

「はいよ！」

凜登場、今だにすんげぇ眠そうです、で、すかさずミ○ミ○渡して、目が覚めた後に

「コレってどういう状況？」

場のカオスっぷりを聞いてくる、なので

「うむ、士朗がイリヤにお医者さんごっこを5回も強要したという事実が明るみに」

「・・・衛宮君？人の趣味はとやかくいうつもりはないけど・・・地球から火星あたり移住してね？」

「違う！違うんだァァァ！！」

士朗の叫び声が響き渡りました。

うむ士朗君スッゴクいい感じ！！

・
・
・

でそれから

「あぁ～さっきの全部嘘だから」

とネタばらしをして

「改めまして、おはようございま～す、なんやかんやで、士朗ん家に居候になることになった鬼島　政成で～す、さっきも言ったけど、マサかマサナリでよろしく」

今度はシッカリと自己紹介。

「えっ・・・あっえと・・・間桐　桜です」

うむ

「桜な、おけ！」

なんか大人しそうな子ですな～？

「う～ん、ホントに士朗の婚約者じゃないの？」

桜に比べてコッチはアグレッシブな感じん人です。

っと

「アレはネタですわいで、ユーの名前は？」

「ふ～んネタか～あっ私は藤村ね？」

ほうほう。

「藤が性で村が名前と申すか！！また珍しい」

「違う！」

でしょうね？

「じゃ下の名前は？」

「うっ・・・・・・が」

アン？

「大河！！大河よ大河！」

いやいや

「何故に怒ってんの大河さんや？」

「あぁ～藤ねぇは、大河って呼ばれたくないらしいんだよ」

士朗が教えてくれたが何故に？

「タイガーって言うなァァァ！！ガォーーッ！！」

あ～なるほど！がしかし

「まぁまぁ落ちつきなされ、大河さんや？いいじゃんトラ？カックィィし？」

「男みたいでイヤなのッ！！」

ふ～ん・・・

「いい名前だと思うけどねぇ？別に男みたいな名前っつったって、見た目からして普通の可愛い女の子なのになぁ？」

はてはて？

「えっ！！マジ？私、可愛い？」

「うん！大河が可愛くないというやつがいたら眼科に行けと俺は言

うね！」

今のキラキラ瞳も可愛いです。

「士朗！この子、イイ子！すっごくイイ子だよ！」

いやいや、どちらかというと俺は、悪い子の部類に入るんですが？

「むぅ～～～マサ？私は？」

「可愛いぞ？何をいまさら？」

「フフ～ン！」

まぁ得意げに胸を逸らしてからに、ほほえましいったらありゃしねえ。

「マサのやつ・・・アッサリ虎を手なずけたな・・・」

いや手なずけたって、猛獣？

「アイツは・・・なんでそうアッサリ、真顔で言うのかしら？」

「本心からそう思っているのでしょうね？・・・ということは・・・私も・・・いや私は騎士・・・しかし・・・」

凜が頭を抱えて、セイバーがブツブツ言い出した。

「俺何かおかしなこと言ったか桜君？」

「アッ・・・アハハ～ちょっとわからないです」

わからないらしい残念！

とそんなこんながありながらも、凛とかセイバーとかイリヤの説明を、つうわけで。

「あぁ実はですなぁ俺ぁ凛の遠～い遠～い親戚でして、凛んとこに居候することになったんでだけんど、うっかり凛さんは、その事を忘れて家の改築工事してやがりましてな？」

「ギロッ！！」

凛に睨まれた、が怯まずに

「で改築終わるまで、どうすんべ～と思っていたらば登場したのがすんげぇイイやつな士朗君！」

「なるほど！士朗だったら間違いなく家に来るか？って言い出すわね？」

うむうむ、ホントは全然違うんだが、大河さんイイ感じに勘違い！

よしよし。

「そういうことで、ごぜえますよ！で、そんな感じでセイバー！イリヤと増えていったんですなぁ」

「ふ～ん・・・納得・・・・」

よし！上手くいったか？

「出来るかァァァ！」

残念、むむぅ・・・よしなら

「じゃあ今日からココはハイツ衛宮で！まだまだ入居者受付中！」

「えっ？あっ私も私も入居希望！！」

おう？桜が食いついてきた？

「はい、桜さん入居で～す、大河は？」

「えっ私？う～ん・・・・って納得いくかァァァ！ガォーー！！」

トラが吠えた！

「まぁまぁ、大丈夫！士朗の趣味はかなりマニアックだから、凛やセイバーに手を出すなんてこたぁねえでごぜえます！イリヤは・・・俺が護る！（牡丹的な意味で）」

ササッとイリヤを後ろに隠して宣言！

「マサ・・・うん！頼りにしてる！」

フッ・・・任せろ！

「言ってることは、それなりにかっこいいはずなのに・・・あっ衛

宮君、近付かないでね？」

「決定的に使い所を間違えていますね？あっ！シロウ離れて下さい。」

うん、俺もそう思うぞ、凛さんセイバーさん、後、二人共素敵な笑顔で士朗から距離をとってからに。

「なんでさァァァ！！」

今日1番の絶叫でした、今日も士朗君とっても元気です。

でそれから後は、誤解やらなんやらを頑張って解き、凛、セイバー、イリヤんこともなんとか納得してもらいました。

そして

「朝メシ～朝メシ！！」

朝メシで～す、ここからは音声中心でお送りします。

「おっ美味しい～～～～士朗？腕上げた？」

「いや、今日はマサが殆ど作ってたから・・・しかしホントに美味いなぁ」

「えっ？コレ？マサナリ君が？うぅ～ん、やるね！ますます気にい

った！」

なんか大河にめっさ気にいられた。

「マサナリお代わりを！」

「あいよ！」

「ねぇマサ～食べさせて～」

「はいはい、あ～ん」

「やった！あ～ん」

ヒナにエサをやる親ドリの心境です。

「複雑だわ・・・ホント・・・なんでこんなに美味しいのよ・・・」

「文句言うな偽・優等生！」

「偽をつけるなッ！！」

「えっ？と・・・遠坂先輩？」

「ン？桜君、どうやら知らんようだな、凛ってこんなんだぞ？」

「そっそうなんですか？」

「そうなんですよ、だからまぁ学校で凛を見かけたら、あ～頑張ってるだな～？と温かい～目で」

「アンタはもう喋るな！ぬっ殺すわよ！！」

流石にガンドは撃たないようですな？しかしある意味ガンドよりも強力なマジカルメンチ！

とこんな感じで朝メシん時間は過ぎていきました、で、その後。

「マサナリ君さぁ、士朗と同い年でしょ？学校は？」

大河さんに、そう聞かれたので

「校長（変態）にタイガードライバー91したらクビになりもうした、いや残念！」

適当にそういっといた、あっ！クビの部分は嘘だが、タイガードライバー91はマジです！

「それはまた豪快だね～」

「でしょ？」

「「ワッハハハ」」

何となく笑いあう、俺と大河です。

「藤村先生とマサナリさんなんで笑ってるんでしょう？」

「ハハ・・・気があったんじゃないか？」

うむ、士朗君の言う通り！よし

「俺が力の一千万！」

「私が技の一千万！」

「「二人合わせて一億万パワーズ！！」」

・・・

「・・・マサ・・・ちょっとコッチに来なさい・・・」

まあ凜さん、ものっそい怒ってる？

で、物影に連れてかれて

「死ぬェェェ！！」

『ドンドンドン！』

めっさガンドを撃たれました。

『ガキンガキンガキン！』

まぁきかないんですけど。

「マサ・・・ホント怖いもの知らずだよな？」

「ぶるぶる・・・怖～～～」

「コクコク・・・凄く怖かったです」

「・・・お代わりは？」

「まだ食べてたんだセイバー？」

他の皆さんの反応はこんな感じ。

で居間に戻り

「ごめんなさい、少しマサ君とお話しをしてたものだから」

いまさらながら凜が猫を被りだす、他の皆さんは凜の鋭い眼光に気圧されてツッコミが出来んようだ。

つうわけで代表して

「凜、そのキャラきっつい！って士朗が言ってた」

と言ってみた。

「アン？」

『ギロリッ！！』

マジカル凜のマジカルメンチ！

「ガタガタガタ・・・言ってない・・・俺は言ってない」

効果はバツグンでした。もう生まれたての小鹿もかくやといわんばかりに士朗、めっさ震えてます。

「嘘～ホントは俺で～す！」

可哀相だから正直にそう言ったら

「来いッ！」

再び物影に連れてかれて

『ドンドンドンドンドン』

さっきの倍撃たれた！

『ガキンガキンガキンガキンガキンガキン』

むろん効かないけどね！

で、それから

「ボチボチ学校ちゃいまんの？」

と学校の時間が迫っていたので、学校組を送りだす。

「ほれ凜弁当！残すなよ？士朗もな？大河と桜は・・・スマン！コレでカンベン！」

と凜と士朗には弁当を、大河と桜には特製カレーパンを渡します。

「残さないわよ、美味しいし・・・」

「俺も分もか？サンキューなマサ？」

「カレーパン？今食べたらダメ？」

「アハハ・・・学校に着いてからにしましょうよ？あっマサナリさん、私の分までありがとうございます。」

と、四人にこんな感じでお礼やらなんやら言われつつ

「じゃ行ってらっしゃ～い」

「「「「行ってきます」」」」

四人を送り出しました。

で

「さてと！洗濯すっか？」

「マサ主夫みたい？」

むむ・・・

「まぁ言われりゃあ確かに？っとイリヤも手伝えよ？セイバーもな？」

「ええ～」

「私もですか？」

ぬっ？不満そうだな？

「じゃ二人はおやついらないな？」

「セイバー！早く洗濯物！」

「ええ！」

『シュバッ』

そう言った後の二人の反応は実に素晴らしかったです。

で洗濯やら掃除やらを終わらして。

『ジュージュー』

と今回のメニューは・・・

「タイヤキで～す！」

某殺し屋Yさんの好物メニューです、コレも作りまくったからなあ。

「はむはむ・・・美味しいですね？」

「うん！美味しい～」

二人にも大好評！

うむうむ、嬉しいですな！

あっちなみに、俺、一匹だけは確保できたと言っておこう。

っと

「俺ぁ今から昼メシと晩メシん材料の買い出しに行ってくるでござる！二人は・・・留守番頼めるか？」

もう冷蔵庫が空になってもうてまんねん。
「ええ私は構いませんが」
「私も別にいいよ！」
うむ、二人の了承も得たことだし
「じゃ行ってくらぁ！喧嘩・・・すんなたぁ言わんがあんまし散らかしてたらお尻ペンペンするからな？」
「しません！決して！」
「うん、絶対しない」
うむうむ、ならよし！と頷いてから
『ガラッ』
と外へ、で
「ほい、バーサーカー！二人が暴れてたら後で報告してくれな？」
バーサーカー君にタイヤキを渡して、そう頼むとバーサーカー君。
「■■■■■」
任せろとばかりにサムズアップ！実に頼もしい限りです。
そんなバーサーカー君に見送られつつ、買い出しに出掛けたのでありました。

第八話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

士朗君かなり弄られキャラに・・・なんでやねん？

そして後半は若干雑な感じに・・・

でも頑張りましたので許してやって下さい。

次回は・・・アノ人達の登場予定！

あっ感想などもありましたら是非お願いします。

第九話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

アノ人達の登場です。

ええキャラがやっぱりアレなことになっておりますので、注意しておすすみ下さい。

第九話みたいな雰囲気！

士朗ん家を出てスッタラスッタラ歩いていたらば

「バカね？コレはこっちを」

『ピーッピーッ！』

「出来ないじゃないですか？全く使えない」

「使えないですって！！アナタ！私はコッチの時代の人間じゃないのよ！なんでコッチの時代の人間のアナタが使い方わからないのよッ！！」

なんかフードを被った謎の女Cとスーツ姿の謎の女Bが争ってます、つか今の『時代』はてはて？まっとりあえず！

「お嬢さん方？何かお困りかな？」

なんかお年寄り口調になったのは気にするな！

「いえ・・・少しコレの使い方がわからなくて」

ン？スーツの女Bが指差した方をみる、ふむ・・・

「マジか？」

「恥ずかしながら・・・」

マジらしい、チラッとフードの人の方を見る

「フゥ〜〜本気よ・・・」

コッチもらしい・・・だってコレ、アレだよ？自販機だよ？自動販売機だよ？

あっなるほど！わぁった！二人共外国の方っぽいもんな？

「円ってわかる？ＹＥＮ？」

「失敬な・・・コレですよね？」

うむ・・・諭吉だな・・・うむ確かに円だ！がしかし

「コレ、万券使えねえから？千円とか小銭とかは？」

「・・・ありません」

うおう！なるほどねえ・・・

「しょーんなか、ホレ何が飲みたい？」

千円札を自販機に投入して、二人に聞いてみる

「コーヒーを」

「紅茶を」

「あいよ！」

ポチッポチと

『ガシャン・・・ガシャン・・・』

「ほれ」

購入した二本を二人に渡し

「あぁ自販機はな？今のようにコレ！千円！そして５００円！で１００円！５０円、１０円と、この種類のお金しか使えないわけです、おけ？」

軽くレクチャー！

「なるほど・・・助かりました、あっコーヒーの代金は？」

「あぁ～奢りだ、気にすんな？」

したらコクコクと頷きながらもコーヒー代を渡そうとしてきます、そんなスーツさんを置いて

「ンッンッ・・・マズイわ・・・」

文句を言ってるフードさん

「自販機で売ってるやつに過度の期待してどうすんの？そら専門店よか劣るやろが、そこそこ美味くなってるはずなんだぞ？」

「専門店で飲みたかったわよ・・・バゼットが変にケチるから・・・

」

アン？バゼット？

「キャスター、文句を言わないで下さい、ただでさえ資金には限界があるんですよ？」

ふむ、スーツさんがバゼット、フードさんがキャスターね？っと

「はいはい喧嘩しない喧嘩しない、他の人の迷惑になるでしょう？ほれ向こうに行きますよ」

「あっはっはい」

「ええ」

と二人を引き連れて、移動し

「あっと、俺ぁ鬼島　政成ってんだ？マサかマサナリでよろしく？」

自己紹介。

「あっ私はバゼット・フラガ・マクレミッツといいます」

ふむふむ、やはりスーツさんはバゼットさんでしたか？

「キャスターよ」

フードさんはキャスター、おけ！

「バゼットにキャスターだな？覚えたわい、で何？二人は旅行か？」
「はっ？えっいえ仕事で」
「旅行よ」
ふむ・・・
「チームワーク、バツグンだな？どっちやねん！」
「仕事です、この恰好をみればわかるじゃないですか？」
「旅行よ、この恰好が仕事着に見える？」
ホント、チームワークいいなオイ？っと、バゼットは確かに仕事着っぽいわな？キャスターは・・・
「バゼットの勝ち！！仕事と判断！」
「フフ・・・当然ですね？」
嬉しそうに勝ち誇るバゼットさん。
「ちょっとなんでそうなるのかしら詳しい理由を教えなさい」
対象的、食い下がるキャスターさん、ふむ理由ね？
「キャスター、パッと見、占い師じゃん？だから占いの営業かなぁと判断！」

もしくはコスプレ趣味？

「占い師って・・・営業って・・・」

あら？なんかガックリなってる？

「落ち込むくらいなら普通の恰好すりゃいいがな？まっバゼットのスーツも正直、浮いてるけど」

「なっ！私の恰好もッ！！」

うん、だってよくよく見たらスーツに手袋だよ？アレだよね？

「なんつうか・・・う～ん・・・あっアレだアレ！先生お願いします！って言われて出てくる凄腕用心棒的な？」

なんか微妙に違うけどニュアンス的にはこんな感じ？

まっ実際、こんな感じの用心棒（男）と喧嘩したことあるけど。

「ププッ・・・用心棒ですって、バゼット、女としての魅力に欠けるからそう思われても仕方がないわよね？」

「なっグギギ・・・婚期をとっくに過ぎたバツイチ占い師に言われたくはありません！！」

「なっいっ・・・言ってはならないことを言ったわね・・・」

「やりますか？」

「・・・塵にしてやるわッ！」

ふむ・・・

「まぁ落ち着きなされ？二人共、十分に可愛いぞ？」

「本当ですか！私がッ！」

「私も可愛いですって！！」

うおう！食いつきが半端ねえ！っと

「うむ、まぁ用心棒とか言い出したんは俺だけど、バゼットも普通に女の子として可愛いぞ？キャスターも婚期がどうとか言ってたけんど、そんだけ可愛いけりゃあ引く手数多だろうに？」

「・・・キャスター」

「・・・バゼット」

アン？

「「素晴らしい人物と出会えましたね（わね）」」

『ガシッ』

熱い・・・熱い友情が生まれた瞬間でした。

っとイカンイカン、友情が生まれた瞬間に胸を熱くしてる場合ではござらぬ。

「悪いけど俺ぁ食材を買いに行く途中だったんだわ！じゃこの辺で！また見かけたら声かけるわ」

そう言い残してバゼット&キャスターと別れたのでした。

・・・・

バゼット視点

随分と素晴らしい人物と出会えたものです。

コノ冬木の街に来た当初は私の不覚から酷い目にあいましたが。

「あのような人物と出会えるとは」

「そうね・・・私もコッチに呼び出された時はあんな最悪なマスターだったけど、あんな人物がマスターだったらよかったわね」

どうやらキャスターもそう思ってるようだ？

あっ、既に気付いている方もいると思いますが、私は聖杯戦争の参加者だ。

しかし私の場合は少々特殊な事情がある。

実は、私は『今』はキャスターのマスターではあるが、元々の私

のサーヴァントは・・・ランサーだった。

何故ランサーのマスターであった私がキャスターのマスターになっているのか？

それは・・・この街に来て、古くからの知り合いであり、この聖杯戦争の監督役でもあるアノ男・・・言峰綺礼に騙し討ちにあった為だ。

その際に令呪をと共にランサーのマスター権まで奪われてしまい、私自身も酷いケガを負ってしまった、しかし、なんとか逃げ出すことに成功し、朦朧とする意識の中

チラリとキャスターを見る。

そうマスターを失い、現界しているのも後僅かという状態のキャスターに出会ったのだ。

そして私とキャスターはお互いの生存の為に契約をした。

私はキャスターに傷を直してもらう為に

キャスターは私に魔力を流してもらう為に。

・・・・

キャスター視点

バゼットのコノ顔は・・・私と出会った時のことを思い出してる

ようね？

アノ日は雨だったかしら？

私のクラスはキャスター（魔術師）

聖杯戦争における、クラスの中でも、自分でいうのは釈だけど、そこまで重用されないクラス。

何故なら殆どのクラスに特に三騎士と言われる、セイバー・ランサー・アーチャーは強い、対魔力という魔力に対しての耐性のようなものがあるから。

私を呼び出した最初のマスターはその事を理解していた為に、私のクラス名を聞いた時、散々に罵り罵倒した。

そのくせに、自身よりも魔術師としての格が高い私に嫉妬の念を送る。

自尊心は人一倍の小心者、私に対して優位に立っている、その事を確認することでイヤらしく嘲らう。

ホント、マスターとしても男としても最悪のマスターだったわ・・・

私は、このマスターに使われるのがイヤだった・・・だから・・・私はこのマスターに対して素直に従うふりをした、ある時はおだて、ある時は癇癪の対象になり

それでも耐えた、文句も言わずにただ耐えた。

決して裏切ることはないだろう、そう思わせる為に、何故か？

それは、サーヴァントに対する三回だけの絶対の命令権、令呪があるためだ。

その令呪を簡単な下らない、用途で使わせるため。

そして、三回目の令呪を使った、その時に・・・私は・・・そのマスターを殺した。

後悔はしていない、あんな下らない男に使われるなんて許せなかったから。

マスターを失い魔力の供給が絶たれてしまい私の体は少しづつ焼失していく

後悔はしていなかった・・・けど、少しだけ、ほんの少しだけ

「消えたくない・・・」

このまま消えていくのがイヤだと、そう思った。

その時に

『ガサッ』

「はぁ・・・はぁ・・・」

傷だらけの女が草陰から出てきた、出血が多い・・・ほうって置けば持たないだろう、それは私の方も同じだったけど、だから

私は、その傷だらけの女に

「私と契約なさい・・・傷は治してあげるわ」

その傷だらけの女・・・バゼットに契約を持ち掛け、バゼットは、その契約を受け入れ、私はバゼットのサーヴァントになったのだ。

その後、お互いの情報を交換し、お互い男運がないわね・・・と肩を落としたあたりから、マスターとサーヴァントというより友人のような関係になったのよね？

まあ、このような関係も、正直悪くはないと思っているが。

それに・・・

「アノ子、中々いい男だったわね・・・」

中々と言ってはいるが、本当はかなり高い評価をつけている、彼は私が出会ってきた、男達に比べて、何かが違った。

そう、彼に可愛いと言われたその言葉、おだてではなく、本心から言っていると伝わった、心地いい感じだった。

「キャスター？年を考えた方がいいと思いますが？」

イラッ！

「バゼット？万年彼氏無し子は黙っていなさい？」

「グギギ・・・か・・・彼氏無し子・・・ですって？許せません！売れ残りの占い師！！」

フフ・・・

「塵にしてくれるわ？」

「その言葉・・・そのままお返しします！！」

一触即発の空気。

「なんだなんだ？喧嘩か？」

「キャットファイト？」

・・・

・
・
マサ視点
なんかまたバゼットとキャスターが喧嘩してる気がした。
にしても、キャスター、あの時、『この時代』とか妙なことを言ってたような・・・
もしや・・・サーヴァントだったりして？
『ピンポン』
ハッ！なんか正解音が聞こえた気が？
いやスルーだ！触れちゃイカン領域な気がする！
っととにかく食材食材！
家にはお腹を空かした子が二人待ってるからな？
とスーパーやら八百屋やらを巡り食材をゲットしまくる。
中々にイイ買い物でしたなぁ、あっむろんミ〇ミ〇も買い足したナリ！
よし、早く帰えってメシを作ると・・・
『キンッ』
アン？なんだ今の？なんか空気が変わったような・・・

ってオイ！マジか？真っ昼間だぞ？

はい、何がありましたかと言いますと路地裏前方に

「ハッハッハ！綾子、早く逃げないと死んじゃうぜ？」

イラッとくる変な本を持ったワカメ頭の性犯罪者。

「なっ・・・なんなんだよ・・・クソッ・・・慎二ィィ！」

そして服が破けまくってる女の子、完全に被害者です。

更には

「おお～怖い怖い、ライダーやれ」

『チャキッ』

無言でデカイ鎖付きの釘を構える、女の子。

ってマズイがなッ！

「じゃあな？綾子？」

「ひっ・・・」

『ヒュッ！』

『ガキンッ！』

はいセーフっと！

「呼ばれてないけど俺参上！大丈夫？」

素手バリアで釘を防ぎつつ、服がびりびりの女の子に話しかける。

「えっ・・・あっあんた・・・誰だ？いや確か遠坂と一緒にいた」

おっと、女の子A、俺を見たことがあるっぽい、ってそういや、その服、凛が行ってる学校の制服だもんな？

っと、まっとりあえずは

「どうも、鬼島　政成で～す、マサかマサナリでヨロシク！」

いつものように自己紹介。

「ま・・・マサ？」

「そっそ！っとユー服びりびりのマイッチングな感じになってるけど着る？」

とりあえず上着を脱いで、目の前に差し出す。

「えっ・・・あっ・・・キャァァァ！早く貸してくれ！」

まぁ普通はそうだよね？けどなんだろう、逆に新鮮、とか思いながらも

「ほいどうぞ」

と上着を渡してあげます。

「あっ・・・ありがとう」

うむ、素直にお礼を言える良い子のようだ。

「まっマサさん、紳士だからね？」

とりあえずそう言っといた

「・・・紳士？」

胡散臭い奴を見る目で見られた、クソウ・・・

「オマエ！誰だ！邪魔をするなッ！」

アン？

「普通は邪魔すんだろ？この性犯罪者が！」

俺がワカメ頭（性犯罪者）に向けとそう言うとワカメ頭（性犯罪者）

「なっ誰が性犯罪者だ！」

とかほざきやがります、どうやら自覚無しらしい、実に重症です。

しゃぁないので

「どう見てもオマエ！な～？」

ビッとワカメ頭（性犯罪者）を指差しながら教えてあげつつ、女の子Ａにも話しを振ってみる

「確かに！」

「こくん」

おっとどうやら、女の子Ａどころか釘を持ってる女の子にも、そう思われてたようです。

つうわけで

「ちとコレ持っててくれ」

「えっあっ・・・ああ・・・」

買った食材を女の子Ａに持たせ。

『ゴキゴキン！』

いつものようにクビを回しつつ指を鳴らし

「教育してやるよ？」

そうワカメ頭（性犯罪者）に告げる、まっ早い話しがヤキ入れね？

「プッハハハ！教育だって？ハハハ！生意気な！殺せライダー！！」

『ヒュッ！』

「んだぁ？テメェがこねぇのかよ！っとほいさ」

『ガキン』

ライダーと呼ばれた女の子の一撃をサクッと素手バリア。

「素手でッ！何をやってるんだライダー！早く殺せ！」

うわっ・・・うぜぇワカメ頭（性犯罪者）

「大変ねえライダー？だっけか？」

「・・・仕方がないですから」

ライダー君もゲンナリ顔です、けど

『ヒュバババ』

攻撃自体は加速してます、中々の速さ、まぁ

『ガキンガキンガキン！』

まだまだ余裕はありますけどね？

にしても

「ライダー目隠し着いてんぞ？どれ」

『バッ』

いやぁさっきからライダー君の目隠しが気になってたんですなぁ？

で思わず外してまいました。

ふむ・・・

「なんだ、普通に見えてるっぽいな？はい目の検査で～す！コレ何本？」

指を目の前に持っていって聞いてみた

「えっ・・・な・・・なぜ石にならずに」

ン？石？まっいいさね。

「コ・レ・何・本ですか？」

もっかい聞いてみる

「えっ・・・あっ・・・えと・・・さ・・・三本です」

うむ！

「はい正解！ちゃんと見えてますがな？ほらご褒美に撫でてやろう」

ン？ええ、そうですよ？ご褒美とか言ってるけど、なんか可愛い

かったんで半分くらいは撫でたかっただけでござる。

『ナデナデ』

「えっ・・・あっあう・・・」

うむうむ、ライダー君、すんごい可愛いッス、癒されまくる。

「なっなな！ライダー！何をやってるこのデカ女！」

「・・・」

あっライダー・・・なんかめっさ悲しい顔。

イラッときました！

「さっきからピーピー喧しいんだよボケッ！ちったぁ黙ってろや！」

『ショバッ！』

ＮＩＮＪＡ移動からのゲンコツ（死なない程度にかつ強め）

『ガゴッ！』

「がっ！！」

『ドサッ』

暫く寝てろ！

「ワカメ頭（性犯罪者）を倒した！経験値は手に入らなかった、マサナリは戦利品として謎の本を手に入れた」

「ＲＰＧかよ！つか経験値０かよ！」

女の子Ａのツッコミ、中々やるな？

っておよ？

「その本を所有するアナタが現在の私のマスターです」

再び目隠しを着用したライダー君がそんなことをおっしゃった。

って・・・

「今さらながらライダーってサーヴァントなん？」

ホントにいまさらです。

「ええそうです、サーヴァント・ライダーです」

ふむ・・・

「ライダーが仲間になった！」

「まだそのネタ引っ張るのかよ！ってサーヴァントってなんだ！つうかそいつ危険じゃないのかよ！」

女の子Ａツッコミから疑問連携です、っとそろそろ流石に

「女の子Aよユー名前は？」

そろそろ確認。

「えっあっ美綴　綾子だけど・・・・って今は」

「わぁってますがな、綾子君、ではまずはサーヴァントつうのはなカクカクシカジカだったような気がする！」

はいよくよく考えたら俺も知識薄っいッス。

「ような気がするって・・・いや、それより、そんなこと教えてよかったのかよ？」

むむ？ふむ・・・

「なんかマズイ気がする？いや大丈夫！大丈夫なはず？大丈夫だよな？うんきっと大丈夫メイビー」

「不安で一杯だなオイ！」

いやさ、そんなん言わても、ぶっちゃけ素人ですし？

「まっ、とりあえず専門家の指示を仰ごう！つうわけで着いて来てね？ライダーも」

はい専門家ってのは凛のことね？まぁ知り合いみたいだし大丈夫っしょ？

「あっああ・・・って待てって、そのライダーだったか？ホントに大丈夫なのか？」

どうやら綾子君、ライダーに不安を感じてらっしゃるようで、がしかし

「大丈夫大丈夫！目え見たけど、ものっそい可愛い目しとったし？きっと根は良い子です！」

と俺は思うわけでありんす。

「はっはぁ？そんな理由で？チラッ」

綾子君、流石に納得出来ないのかライダーの方をチラ見

「可愛い・・・えっ・・・私が・・・しかも目が・・・ああ・・・やりました、私は最高のマスターに出会うことができました・・・慎二（ワカメ）と手を切れて本当に本当によかった・・・」

うっうむ・・・

「大丈夫っぽいかな？ある意味危険だけど」

綾子君、納得してくれたようです。

「っとそうだ慎二はどうするんだよ？」

ン？はて？

「慎二って誰？」

「ワカメです」

クビを捻ってたらライダーが教えてくれた。

「コイツか・・・フッ・・・性犯罪者に相応しい刑を執行してやろう！」

つうわけで

『ブ～ラブ～ラ！』

はい、パンツ一着、逆さ吊りの刑です！

「まぁ妥当だな」

フッ・・・

「綾子君や、甘い甘いぞ！コレは性犯罪者としての刑だ！ライダーにデカ女と暴言をはいた罪も加算じゃい！ライダー可愛いのに！」

『サラサラサラ・・・』

フッ・・・コレでよし！

ン？何をしたかとな？

ただ

『趣味です！！ボクは変態です！！小さい子を見ると興奮します！』

と顔とか体とかに油性マジックで書いてやったのだよ！

「フハハハ！鏡を見るたび思い出すがいいわッ！！」

超強力って書いてあったから半年は消えんぞ！

「ヒドイ・・・とは言わないね、当然だ！」

フッ・・・綾子君、満足いただけたようで。

どれライダーは？

「また可愛いって・・・フフフ・・・可愛いって・・・最高のマスター・・・」

うむ、可愛いけど若干怖いッス。

まっとりあえず刑は執行したことだし

「じゃそろそろ行くべさ！昼メシ待ってる奴らがいるし」

「あっああ・・・あっと私、服買って来たいんだけど、ほら流石にさ？」

おっと、言われてみりゃあ確かに、それに

「ライダーもその恰好はマズイやな？じゃ服屋からだな？」

言ってなかったけど今は冬場なんスよね？けどライダー君、ボディコンっぽい服ですねん、似合ってはいるこど寒いだろ！って感じ

ッス。

「あっ私は霊体化すれば」

「ン～～～～却下！折角なんだから服くらい買いなさい俺が買っちゃるから、綾子もな？」

「私も？いや悪いって」

あらま遠慮してからに

「別に構わんって、あっあんまし高いのはカンベンな？ほら行くべさ」

「あっああ・・・なんか悪いな」

「ノンノン！謝るダメ！どうせなら違う言葉になさい」

「ン？あっ・・・ありがとう」

うむうむ。

「よく出来ました花丸です！」

ついついなでなで

「あ・・・あの・・・私も・・・」

「はいはい」

ライダーにも要求されたから撫でました。

ライダーも綾子も可愛いッス。

とコチャコチャありながらも

「じゃ今度こそ出発ってことで！行くぜい」

綾子に持たせていた食材を持ちつつ、そう言い

「ああ」

「はい！どこまでも！！」

ライダーどこに向かう気だ？とか思いつつ服屋へと向かったのでありました。

第九話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

後半が番外と殆ど同じ流れに

けど頑張りました。

後バゼットさんにキャスターさん、完全に別キャラな感じに・・・

けど頑張りましたので温かい目で見てやって下さると嬉しいです。

あっ感想などもありましたら是非に！

第十話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

今回はご都合連発！

キャラも、もはやダレ状態。

それでも大丈夫な方はどうぞ。

第十話みたいな雰囲気！

「ココって・・・衛宮の家じゃ・・・」

「居候してんだわ」

士朗ん家に帰ってきたらば、綾子が、そう聞いてきたので、そう答えときました。

で

「暴れてなかったか？」

バーサーカー君に留守番してた二人の様子を確認。

「■■■■■！」

どうやら暴れてはいないらしい、けどセイバーが空腹ゲージがイエローシグナル点滅中！

「マサナリ？何をしてるのかしら？」

「ン？バーサーカー君に報告を受けてた」

「なっバーサーカー！！居るんですか？」

「いるいる！中々に愛嬌があるぞ？」

「バーサーカーに対して愛嬌って・・・」

「それより霊体化してるのに見えてるのが驚きだわ」

とさっきから驚いてるお二人さん、そうバゼットとキャスターの二人です。

実は綾子とライダーの服を買いに服屋に寄った時に

「よお、さっきぶり」

「あらマサナリ？」

「マサナリですか？」

と二人に遭遇、どうやらお二人さん、俺が言ってたことを気にして普通の服を購入しにきたようです。

「マサナリこの二人、マスターとサーヴァントです。」

「えっ？マジで？そうなん？」

「ええ、そうよ？そっちは・・・ライダーかしら？」

「なっキャスター！なぜ」

「何故って、もうバレてるわよバゼット？それでマサナリ？そのライダーを引き連れてるアナタは何者かしら？」

慌てた様子のバゼットさんに、冷静沈着なキャスターさん

っと俺が何者かね？

「私の最高のマスターです！」

よせやい照れらぁ・・・ってなんでライダーが？

「へえ～・・・そう私のマスターとトレードしない？」

「何をバカな、私はマサナリから離れるつもりはカケラもないですね。」

ふむ・・・

「綾子、先に服選んどくか？」

「アッチはほって置くのかよ！」

まぁ確かにほっとく訳にもイカンわな？

なんかキャスター君、手が光ってバチバチさせてるし

ライダー君はライダー君でアノデカイ釘構え出してるし。

「はいはい、店ん中で喧嘩しない！」

しゃあないので、その二人の間に割って入り喧嘩を止めました。

ちなみに何故か、この騒ぎに回りの人は無反応。

どうやらキャスターが結界とやらを張っていたらしいッス。

でそれから

「あっちなみに俺ぁサーヴァント？らしいぞ？自覚ないけど」

「なるほど、サーヴァント・・・なら私のサーヴァントのキャスターとトレードを」

何故か今度はバゼットがトレード宣言。

「バゼットどういう意味かしら？」

「先に言い出したのはキャスターではないですか？」

今度はバゼットＶＳキャスター？

「ってやめれっつの！」

コチラも間に入って止めました。

で、その後、なんやかんやありつつ

「じゃ詳しい話しは昼メシ食い終わったらつうことで！」

との俺の提案によりバゼット、キャスターも昼メシに参加することになったわけです。

はい回想終わり！

はよ昼メシ作らな、セイバーの腹減りゲージがレッドに変わってしまう、つうわけで。

『ガラッ！』

「たっだいま～！」

「マサ、おかえり！セイバーがヤバイよ？なんかブツブツ言い出し・・・ってアレ？」

家に入ったらイリヤっ子が出迎えてくれました、どうやらセイバー、もうちょいでレッドらしい。

「後ろん人達は俺の客な？つうかダチ、まっ詳しい話しはメシ作ってからな？」

「うっうん」

とりあえずポンとイリヤの頭に手をおきそう言って

「んじゃまっ、上がって待ってくれや」

ライダー、綾子、バゼット、キャスターにもそう言って昼メシを作りにキッチンへＧＯ！

・・・

・

はい完成！

で昼メシタイムです！

「もぐもぐ・・・」

相当腹が減ってたらしいな？セイバー一心不乱に食ってんし？

「美味しいわね・・・」

「ええ、とても」

うむバゼット、キャスターも美味しそうに食べてくれてます。

「って、ライダー？食わんの？」

「いえ私はサーヴァントですので食事の必要は」

いやさ、いまさらそんなん言われても、セイバーもキャスターもガッツリ食べとるがな？

ええい仕方ねえ

『ヒョイ』

テキトーなおかずを一つとって

「ほれ、あ～ん！」

「えっ・・・あっ・・・あ～ん、パクッ・・・」

うむうむ、それでよし。

「むぅ・・・マサ！あ～ん！あ～ん！」

おう？イリヤもか？

「はいはい、ほれ？」

「あ～ん、パクッ！フフ～ン！」

何故にライダーを見て不敵な笑い？

「マサナリお代わりを！」

「あいよ！」

セイバーもう食ったのかい！

「マサ、オマエ、なんていうか・・・お母さん？」

「ええもう、育ち盛りの子達が多くて大変ですよ？」

「否定しないのかよ！」

うん、なんか否定できん、強いて言うならお母さんじゃなくてオカンだけどな！

「マサ！あ～ん！」

「マサナリ、できれば・・・あの・・・もう一度・・・」

「マサナリ、お代わりを」

ええい！

「ほれ！ほれ！ほれ！」

「私も、あ～ん、してもらおうかしら？」

「キャスター年を考えて下さい、私が代わりにします」

「バゼット・・・塵になりたいの？」

「喧嘩すんならデザート抜きだよ！！」

「「してないです（わよ）」」

「やっぱり、お母さんだよな？」

とこんな感じで昼メシは過ぎていきました、あっデザートも好評だったッス。

・・・・

凜　視点

また妙なタイミングで私になったわね？
まぁいいわ。

今は昼休みの時間帯、今日は一応、衛宮君と食べることになっている。

そう今後の方針とかを少し話すためね？
それに、昨日、半端に終わってしまった結界のことも話しておかないと。

『ガチャ』

待ち合わせの屋上へと足を運び、外へと出る

外は快晴、多少は冬の寒さはあるけど、陽射しがあるせいか、そこまでの寒さじゃない。

「遠坂」

衛宮君はもう屋上まで来てたみたいね？

「こんにちは衛宮君？」

そんな衛宮君に優雅にアイサツ、最近はマサのせいで優雅とはとても言えないような感じだったしね？

「遠坂・・・もう手遅れ」

「アァン！」

『ギロリ！』

「いや・・・なんでもないぞ？ホント、なんでもないから。」

余計な一言は身を滅ぼすわよ？衛宮君？

ンッン、まあいいわ。

「とりあえず・・・話しはお弁当を食べてからにしましょう？」

「ああ。」

方針の話しや結界の話しは、お弁当を食べてからすることにした。

フフ・・・釈だけどマサの作る料理はホントに美味しいのよ？結構楽しみにしてる自分がいる。

まぁ少しは悔しいけど料理の腕はマサの方が完全に上だしね？ちなみに私は中華が得意。

まっ今はマサのお弁当を

『パカッ』

「・・・・・・」

「ン？どうしたん・・・ビクッ！」

フフ・・・

『バキッ』

「あら、やだお箸が？」

つい握り潰しちゃったわね・・・フフ・・・

「ガタガタ・・・」

まぁ衛宮君？何をそんなに震えてるのかしら？

「何かしら衛宮君？まさか・・・コレ・・・」

衛宮君を『幽牙（ゆうが）』な笑顔で問い質す。

「しっ・・・知らない・・・俺じゃない・・・ほっ・・・本当だから！」

そんなに吃ってたら逆に怪しいわよ？でもまあ・・・犯人は・・・アイツしかいないわよね？どう考えても？

「フフ・・・フフフ・・・・・・・・・マサァァァァァァァァァァァッ！！！！」

太陽に向かって犯人の名を叫んだ！

覚えていなさい！

弁当には、そぼろで

『ヒンヌー』

と書かれてあった、もうムカつくくらいに達筆な字でね。
「マサ・・・勇気ありすぎるぞ・・・」
その後は結局、話しをすることなく昼休みは終わった。
あっ弁当は食べたわよ？ムカつくくらいに美味しかったわ。
ホント・・・ムカつくくらいにねッ！！
・
・
・
・
マサ視点
『ヒュバッ！』
『ガキン！』
なんか急にセイバーに斬りかかられた、はて？
「セイバー・・・どういうつもりです？」
『チャキッ！』
ライダーがデカ釘を構えだした、ふむ・・・
「何故だかわかりませんが非常に不快な感覚がしたので！」

ン？ああ！なるほど、心当たりはありまくるが、今回はドンピシャでわぁった！

「ライダー止めれ～？セイバーのアレはツッコミだから！」

そう言ってライダーを止める、したらライダー君、渋々ながらも従ってくれました。

「過激なツッコミだね？セイバー？けどなんだろう私もなんか、もやもやする」

ふむ・・・まぁ確かにイリヤっ子も絶対的にフラットだしな？これぞまさにフラット3？

「むっ？マサ？今すっごく失礼なこと考えなかった？」

いやいやどちらかというと懐かしいことだ！でもまあ。

「大丈夫！イリヤには未来がある！」

グッとサムズしてそう言ってみた、したらセイバーが

「それはまるで私には未来がないと？」

いつの間にやらフルアーマー？コレはイカン！

「大丈夫！多分大丈夫！きっとメイビー！ほらミ〇ミ〇飲もうミ〇ミ〇！」

ミ〇ミ〇で切り抜けた、流石はミ〇ミ〇だぜぃ！ちなみに前回、ワカメ頭（性犯罪者）に暴言の罪を加算したやつのすることじゃないと思ったアナタ！

そこは流せ！愛がありますんで流して下さい、ホントお願いします。

「なんていうか・・・やっぱり人体から発する音じゃないよな？」

「まぁガッチガチだしね？」

コチャコチャ考えてたら綾子にツッコまれたんで何時ものように答え。

「アッチもかしら？」

「キャスター君、教育的指導！」

『ガツン！』

「ッ〜〜〜！」

キャスターにはゲンコ！

「キャスター・・・品がないです、全く・・・」

そんなキャスターにバゼットさんはちょっとだけ顔を赤くして呆れてました。

けどそんなバゼットさんが可愛いかったら撫でといた、文句は言わさん！

その後にイリヤ、ライダーもなでなで、というか寧ろ全員撫でました。

すんごい癒された。

っとイカンイカン、なんかこのままでは、ただの昼食会になってしまう。

つうわけで

「遅ればせながら、コチラは綾子君、中々のツッコミ指数を誇る期待の新星だ！俺がスカウトしてきた」

「違うだろッ！なんだよツッコミって！ってツッコんでるし私！」

はい流石です！コレからもその活躍には大いに期待してるぞ！

「まぁそれは2割くれぇは冗談として、ワカメ頭（性犯罪者）に襲われてるのを見かけて、救助してそのまま連れてきました。」

なんか色々はしょってるが概ねこんな感じ？

「あっちなみにワカメ頭（性犯罪者）はキッチリ干してやったぞ？ワカメだけに！」

ビシッとどこかに向かって敬礼しつつ、そのことも付け加えます。

「なんで敬礼？っとまぁはしょりすぎだけど大体はあってるな？あっその時にサーヴァント？だっけ？のことも聞いたから、まぁマサもよくわかってなかったぽいけど」

なんか知らんがしないといけない気がしたんです、それに仕方ないやんあんまし自覚ないんだし。

「ふ～ん、マサ？魔術ことは基本的には秘匿なんだけど」

イリヤに注意された、けどなぁ

「俺、魔術師じゃねえッス！つうか綾子、完全に巻き込まれたし、いまさらだろ？」

まぁ半分くれぇは後付けっぽいけど。

「なんだったら私がコノ子記憶を消してもいいわよ？」

キャスターがそう提案してくるが

「却下！せっかくダチになったのに俺が淋しい！」

「自分の都合かよ！」

うん、そうです！

「俺ぁ結構自分勝手なんですよ？」

「自分勝手・・・ねえ？」

む？なんだね？その視線は？ってあら？

「フフ・・・自分勝手だって」

「確かにマサナリは自分勝手ですね・・・フフ」

むむぅ・・・イリヤにセイバーまで？

「なんでソコで笑っているんですか？」

バゼットさんの言う通りだ！笑うポインツではないはずだぞ？

「私はそのマサの『自分勝手』は好きだもん、そのおかけでこうして生きてるし、美味しいご飯も食べれるしね？」

「マサナリの『自分勝手』は・・・何故か心地いいですから」

「ええ私もそう思います、コノ服もマサナリの『自分勝手』で買っていただきましたし」

「私のもマサ『自分勝手』で奢ってもらったしな？」

いやさ、だって、そうしたかったんだもの！

「なるほどね？そういえば私達のも出して貰ったものね？」

「えっええ、強引でしたね？」

はい、そうです実はバゼット&キャスターさんの服代もついつい

出しました、似合ってましたしね？

「まっ俺ん自分勝手は、そぉーい、して、続いてライダー！」

とりあえず話しを先に進めまする。

「コッチは、アレだワカメ頭（性犯罪者）のサーヴァントで、綾子を襲撃してた張本人だが、まぁ完全にやらされて感が出まくってたな？だからライダー君もワカメ頭（性犯罪者）の被害者とも言えます、俺的には」

ザックリ説明、まぁライダーは身内だから贔屓目だけど、俺は身内に甘いんです！

「それがなんでマサのサーヴァントになってるの？だいたいマサって魔力、全っ然ないよ？」

うん、その説明もするよイリヤ君？けど全っ然て力篭りすぎです、凹むだろチクソウ・・・

「あぁ～ごめんねマサ？よしよし」

凹んでたら凹ましたイリヤに慰められた、なんか年下に慰められるのが板についてきた気がする。

「ライダーが俺のサーヴァントになったんはコノ謎の本のお陰だ！ちなみに俺的にはライダー君もダチです」

サクッと立ち直りつつパッと謎の本を取り出す。

「なるほど偽臣の書ね？」

おろキャスターさんコノ謎の本のこと知ってんだ？ふむ

「キャスター先～生、偽臣の書って何？」

「それは・・・ライダーから直接教えてもらいなさい」

ふむ、まぁそう言われりゃそうだな？

「ライダー先生、お願いしま～す」

「先生・・・生徒との・・・危ない関係・・・それもまたいい」

「指導ッ！」

『ガツン！』

ゲンコです！

「ッ・・・す・・・すいません、つい・・・」

なにがついやねん！

「しまった・・・私がするべきだったわ」

ってキャスター君や！

「また喰らうかコラ？」

「いらないわ」

ゲンコをちらつかせて黙らせました。

でようやくライダーが

「ンッン・・・偽臣の書とは令呪を本の形に写したもの言わば令呪代わりのようなものです偽の令呪と言ったところでしょうか？」

と説明、なるほどねえ？ン？

「なぁ、今は俺が持ってるからライダーのいいたかぁねえけどマスター？は俺なんだろ？でイリヤが言うように俺ぁ魔力なんざぁ全っ然ねえよな？けどライダーのマスター・・・

つうこたぁ魔力がない奴でもマスターになれるんだよな？コノ本持ってたワカメ頭（性犯罪者）はなんでわざわざ奪われやすい本にしたんだ？ワカメ頭（性犯罪者）も俺みてえにコノ本を奪った？もしくは貰った？

・・・ン？待て待て、逆算すっと、俺→ワカメ頭（性犯罪者）→？・・・？って誰よ？」

はて？どういうこっちゃ？ってあら？

「意外・・・かも？」

「ええ・・・そうですね。」

「中々冴えてるわね？マサナリ」

「ええ、私もそう思います正直意外でした」

「確かに意外だよな？」

むっ？勉強が苦手なだけであって頭が悪いわけじゃないんだぞ！多分きっと！

「ああ・・・流石は私のマスター・・・」

うんライダー君、嬉しいけど、ちょっと怖いッス！

まぁ今は

「ライダー？オマエさんの正式なマスターって誰？あっ言いたくなけりゃあ無理に言わんくて言いぞ？」

ライダーにコレを聞くのが先ですな。

「マサナリ・・・お願いがあります・・・」

・

・　・　・

ライダー視点

慎二は私のことを便利な道具として見ていた、或は珍しい玩具、殺す為の兵器。

魔術師（マスター）との信頼関係が築けているのであれば、共に聖杯戦争を戦いぬく為の相棒（パートナー）としていることもできたでしょう。

しかし私の『正式』なマスターは優しすぎた、私を召喚しても、聖杯戦争という殺しあいの場に立つには優しすぎたのです。

故に偽臣の書を造り出し、その書の権利を慎二に譲った。

慎二は私の容姿が気に入らなかったようで、私のことを・・・デカ女だと言ったり罵倒した・・・確かに私は少しだけ身長が高い、それがコンプレックスでもある・・・

慎二にデカ女と言われるたびに腹が立った悲しくなった、私を蔑んだ目、その目がイヤだった・・・

慎二が仮のマスターになってから少しした後に慎二は、『魂喰い』をしろと言い出しました。

『魂喰い』

生命力を奪い自身の魔力へと変換させる外法。

慎二はそれを私に行うように命令し、私の力を上げることを考えたのです。

私はその命令に従い、ある場所に『ブラッドフォート・アンドロメダ（他者封印・鮮血神殿）』という結界を仕掛けた、コノ結界は

内部のものから生命力を奪い自身の魔力に還元するという、最悪の結界。

しかし大量の魔力を確保できる、コノ結界に慎二は満足していたようでコノ結界は保険に使うと、口元を歪めて笑っていた。

その後、慎二の更なる命令により、結界以外での『魂喰い』を実行することになってしまった。

その最初のターゲットとなった人物は

綾子という人物、慎二の知り合いで慎二が気に入らないと言っていた相手。

その綾子を襲撃していた時に出会ったのが・・・

今の偽臣の書の所有者であり、私にとっての最高のマスター、マサナリでした。

マサナリは私のことを・・・醜い化け物と蔑まれた私のことを、可愛いと言ってくれました。

嬉しかった・・・私の頭を撫でてくれた、嬉しかった・・・

目隠しを外され目と目があった、私の魔眼で石にならなかったのは驚きました。

私の持つ魔眼、キュベレイ、その魔眼で見た相手は石になる、石化の魔眼。

そんな私の目を石にならずにジッと見てくれた、そのことが嬉しかった。

私の『正式』なマスターの気持ちが解った気がします。

私の『正式』なマスターの名は・・・間桐　桜・・・

桜は・・・コノ家の家主の、衛宮　士郎という人物を好きなのようです。

桜が慎二に私のマスター権を譲ったのも、この士郎と戦いたくなかったというのも大きいかもしれません。

フフ・・・マサナリに、桜と士郎のことをお願いしてもいいかもしれませんね？

けど・・・その前に・・・

「マサナリ・・・お願いがあります・・・」

私は桜をなんとか助けたかった、桜の境遇は私と似ていたから・・・

私の真名は・・・メデューサ・・・周囲の悪意によって醜い怪物と変わっていってしまった、そんな境遇に似ている桜を助けたいから。

「任せろ！」

まだ、内容を話していないのに、笑いながら親指を立てるマサナリ。

「マサ？まだ聞いてないのに？」

イリヤスフィールの言うことも、最もだと思った、けどマサナリは

「いやぁライダーん顔がさ、なんかマジっぽかったしさ？ダチがそんな顔して頭下げてんだぜ？なんとかしてやりてえべさ？」

マサナリ・・・ああ・・・本当に・・・

「お人よしですね？」

「アン？お人よしぃ？セイバー君や、お人よしってなぁ、アレだぞ士郎みてぇな奴んことを言うんだぞ？俺ぁどっちかっつうと悪ガキだつっの！」

フフ・・・本当に・・・

「本気かマサのやつ？」

「アノ目は本気で言ってるわね？」

「ええ、本気ですね？」

桜・・・アナタはきっと救われます・・・私のマスターは最高のマスターなのですから。

・

・・・

マサ視点

なんかライダー、すんごい嬉しそう、ナイススマイル！

けど俺、変なこと言ったか？

まぁいいさね。

「じゃ、そのお願い？ってのを聞きてえんだが？」

ライダーのお願いとは何かを確認することに。

「マサナリ・・・コノ話しは出来れば・・・」

ン？なんか回りを気にしとる？あぁ～なるほど、けどなぁ？

「まぁ偉そうに任せろ！っつたのはいいけどよ？魔術とか、その辺りはサッパリサッパリなんですわ、だから専門家がいたら助かるんよな？つうわけで、イリヤ、セイバー、バゼットにキャスターも、手伝ってくれっと嬉しいんですが？まっ綾子はアレだけどさ」

ペコッと頭を下げて頼みます、いやぁ素人だからね？仕方ないんスよ。

「私はいいよ？マサのお願いなら聞いてあげる！」

流石はイリヤっ子！優しい子です。

「そういえばマサナリにはコーヒーと洋服、それに昼食の借りがあるわね？」

「キャスター年のせいか素直じゃないですね？」

「バゼット・・・余計なお世話よ？」

仲良しコンビなバゼット、キャスターも手伝ってくれるっぽい。

「私も構いません、マサナリには色々と世話になっていますので」

セイバー君、やはり良い子！

「私はマサが言ってるみたいに無理だな？ただの学生だし・・・悪い。」

「綾子君！気にすんな！俺とて、ただの学生さ！」

キラッとナイススマイルでサムズった！

「「「「「ないない」」」」」

全員に思いっきり、否定された。

「ナイスチームワーク！」

素晴らしい程に息がピッタリです！

とコチャコチャありながらもライダーの話しを聞くことに。

「私も聞いて大丈夫なのか？」

「そうですね・・・一般の人にはキツイ内容かもしれません」

どうやら結構キツメの話しらしい。

「綾子？なんだったら向こうに行くか？」

「ン・・・いや聞くよ・・・うん・・・」

肝が座ってるこって？

「魔術の秘匿もあったもんじゃないわね？」

いまさらですがな？

「それでは、まず私を召喚した『正式』なマスターをお教えします・・・私の『正式』なマスターは・・・間桐　桜」

ふぅ～ん・・・はっ？

「マジでか？桜？桜って桜？ガッツリ知り合いやん！つうかダチじゃん！」

「桜って・・・私の弓道部の後輩だぞ！」

おう！綾子かよ！

「ちょっと待って？それだったら私が気付いてるはずだよ？マサは

例外だけど、魔力があったら気付くはずだもん」

そうなん？アレ？どゆこと？

・・・・

ライダー視点

桜が『正式』なマスターであることを明かすと流石に驚いた様子だ。

イリヤスフィールなどは、もしマスターだったのなら自分が気付いているはずと、そう言う。

しかし、イリヤスフィールが気付いかなかったのには理由がある

「それは・・・桜の体内にいる蟲のせいです、その蟲とは桜の中で魔力を吸いつづけ感知ができない程に魔力を低くしているのです」

「蟲・・・寄生虫かよ・・・」

マサナリの言う通り、まさに寄生虫。

「そして、その蟲こそ桜を苦しめている元凶・・・間桐の当主である、桜の祖父、臓硯・・・臓硯は、魔術を使い己の魂を蟲へと憑移させることにより生き続けてきました・・・

臓硯は永遠の命を望んでいたのです、臓硯は桜の体内を自分の都

合のいいように作り替え、命令に背いた場合にそなえ心臓寄生しています、そして、コノ聖杯戦争に勝ち、自身の永遠の命を願おうとしているのです」

そこまで話し終えると

『ゾクリッ』

凄まじい寒気に襲われた

『ギチィ・・・ポタ・・・ポタ・・・』

「胸クソ悪ぃな・・・クソが・・・」

その寒気はマサナリの発する怒気・・・言葉は少ないが、凄まじいまでの怒りを感じる、余りに強く歯を食いしばったのだろう口からはポタポタと赤い血が流れ落ちてくる。

「気に入らねぇ・・・あぁ気入らねえ！クソ蟲は潰す！桜は助ける！当たり前だ！桜はなダチなんだよ、ふざけんじゃねぇぞゴラ！なんだぁ身体を弄ったぁ？あぁ気に入らねえ！」

マサナリ・・・

「アナタに話してよかったです」

桜の為にコレだけ怒ってくれる、そんな人だからこそ、私はアナタに話そうとそう思いました、やはりマサナリは最高のマスターです。

・・・・・

マサ視点

さっきは頭に血が上ってそう言ったが、いや今も上ってんだけど、少しは冷えた、にしても、体内に蟲・・・

「どうしたもんか・・・」

『トントン』

ン？キャスターに肩を叩かれた？

「よかったわね？私と知り合えて？ライダー？その桜って子の体内の蟲を払えばいいんでしょ？それくらい、私ならできるわ？キャスター（魔術師）のクラスは伊達じゃないわよ？」

そう言って頼もしげに笑うキャスター、思わず

『ガシッ！』

と手を握りしめ

「キャスえもん！」

困った時に頼りになる青いアイツみたく呼んでしまった

「フフ・・・任せなさいマサ太君？なんてね？」

知ってたようです。

「キャスター・・・ステキすぎ！もう大好き！」

「あっ・・・うっ・・・」

アレ？なんか赤く染まった？

「むぅマサ私は？」

「好きに決まってんじゃん？つか此処にいるやつら全員好きよ？嫌いな奴とは仲良くできねえッス」

マサさんは、そんなタイプです！ってまぁ普通だぁな？

と脳内コチャコチャしてたら、なんか皆さんに、ものっそいため息をつかれました、何故？

・・・・

キャスター視点

何故かしらね？生前から魔術師として生きてきた私が、素直にマサナリに協力しようなんて思うなんて・・・

魔術師とは本来は何かを求められたら、それに見合った見返りを求めるもの

つい、コーヒーや服、昼食のことを見返りと言ったけど、そんな物がなくても協力したでしょうね？

メディア・・・裏切りの魔女・・・私の真名。

そんな裏切りの魔女に向ける目じゃないわよね？

私がなんとか出来ると言った時に言われた言葉、思わず赤面しちゃったわ・・・

あんな風に嬉しそうな顔で、あんな言葉を言われたら裏切りなんて考えもしないわね？

まぁ女性としてという意味じゃないのが少し釈だけど、でもマサナリの嬉しそうな顔にアノ言葉こそが私にとっての最大の見返りかもしれないわね？

・・・・・

バゼット視点

マサナリは私が思っていたよりも素晴らしい人物でしたね？

その在りようが私にはとても好ましく思います。

魔術師として、じゃなく一人のバゼット・フラガマクレミッツとして。

彼のことを手伝いたいと、そう思わせるほどに。

まっ・・・まぁ男性としても素敵ですし・・・私のことを可愛いと言ってくれましたし・・・付き合うならこういう人がいいです・・・って私は何を！

・・・・・

綾子視点

なんか、スッカリ馴染んじゃってるけど、今いる一般人って私だけだよな？

ン？マサ？アレは一般人じゃないだろ断じて！

けどまぁ・・・私、マサに命を救われたことになるんだよな？

マサの態度がアレだからスッカリ、忘れてたけどさ・・・

だから、本当は手伝ってやりたいって気持ちはある、けど、多少武術の心得があったとしても、ただの高校生には無理なことだ。

私が、だから手伝えないとそう言った時、マサは気にするなと笑いながらボケた・・・思わず、全員揃ってクビを横に振ったけど。

アレって私のことを気遣ってたのかもしれないよな？

気前はいいし、人を気遣え、そして人の為に怒れる優しさ、結構好

みの顔、しかも強いらしい・・・まぁ多少アレ気味だけど・・・ふむ・・・

悪いね？遠坂、コイツ私が貰うわ。

・
・　・
・　・　・

セイバー視点

不思議なものです、本来ならコノような光景は有り得ないはず。

聖杯を巡って争うはずのサーヴァントが協力をして一人の少女を助けようとしている。

その中心にいる人物マサナリ、その戦闘力はきっとサーヴァントの中でも桁が違うでしょう。

バーサーカーを子供扱いし、私との朝の手合わせからもその実力は推し量れない程に・・・しかし、マサナリの魅力はその強さではなく、こうして繋がるはずのない糸を紡ぐことなのかもしれませんね？

フフ・・・なるほど・・・こういう人物をカリスマと言うんでしょうね？

現に私も彼に・・・惹かれているのかもしれま・・・ハッ！

今は何を！？私はサーヴァント、そのような・・・でもマサナリ

もサーヴァントですし・・・けど・・・いや・・・でも・・・

・

・・

・・・

イリヤ視点

むぅ・・・なんだろう・・・マサは私のお気に入りなのにな？

手当たり次第に仲良くなっちゃって・・・ちょっとだけ嫉妬。

でもマサはこうやって皆に囲まれて笑ってるのが凄く似合ってるもんね？

けど・・・最終的にはマサは私のだけどね？・

・

・・

凛視点

「フフ・・・マサ・・・覚えてなさい・・・帰ったら・・・もう撮って撮って撮りまくってやるわ」

マサには物理的な攻撃は殆ど効かないし、コレなら効果はあるわ。

フフ・・・コレぞ趣味と実益よ！

ン？優雅？アレを前に優雅とか言ってられる人がいたら逆に見てみたいわよ！もうねアレ趣味だから、なんか興奮してテンション上

がるのよね？

ン？何かしら？なんか私だけ仲間外れにされた気分に・・・

って仲間？どういうことかしら？

フとマサの顔が浮かんだ・・・

フフ・・・憎たらしい顔してるわよねホント・・・まぁ嫌いじゃないけど。

第十話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

なんやかんやで、こんな感じの流れに・・・

桜さん救済フラグでした。

第十一話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

久々にコッチです。

どうもネタが・・・

あっやっぱしアレな感じです、しかもかなりルールブレイカーですそれでも大丈夫という方は心を強くお持ちになってどうぞ。

第十一話みたいな雰囲気！

「まず、食事にコレを混ぜなさい、睡眠薬の強力なものだとでも考えてくれていいわ・・・例え魔術的な要素がある物にでも効果はあるわ、それからはこの秘薬で、桜って子の中にいる寄生虫の括りを弱めるわ・・・最後は私のルールブレイカー（破戒すべき全ての符）を使うわ？」

おお～！流石はキャスえもん！最後のルールブレイカーってのが何なのかはよくわからんが？

「私の宝具よ？魔術的な契約や縛りなんかを破棄することができるわ？コレで桜って子と寄生虫を切り離すのよ？」

どうやらクビを捻ってたのがバレたらしい、補足説明をしてくれました。

「キャスター？いいの宝具の名前言っちゃって？そこからアナタの真名、わかるわよ？」

そんなキャスターさんの補足説明の後にイリヤっ子がそんなことを言い出した、ふむ・・・

「その真名だっけ？がバレるとマズイの？」

いやぁ前々から若干気になってたんスよね？ランサーとかセイバーとか、俺が普通に名前言ったらビックリしまくってたしな？

「えっ？マサ？凜から聞いてないの？」

「聞いたけど忘れた！もう凜先生はその都度聞くようにしなさいだとさ？」

「もう仕方ないな？じゃ私が教えてあげる！あのね？カクカクシカジカっていうわけわかった？」

なるほどねえ？つまりは・・・

「弱点バレちゃうよ！ってことか？」

「むう？アレだけ長々と説明したのに・・・あってるけどさ？」

はい、そうなんです、なんやかんやで結構長く説明してくれました、でもまぁあってんだったらええがな？

とか思いつつも

「でも、まぁアレだろ？このメンツで殺しあいしたいとかいるか？いるんだったら手を挙げろ？俺の宝具（偽）お尻ペンペンが火をふくぜい？」

素振りしながら聞いてみたら

「「「「「しない絶対！」」」」」

と素直に皆さんそう約束してくれました。いやはや、実に強力な宝具（偽）だぜ！凜が認めてくれんが。

「ン？マサ？今、凜って言ったよな？そのマサのマスターだっけ？って遠坂なのか？」

「半分当たりで半分外れ？凜はアレだマスターだけどやっぱダチなんですよ？マサさん的には？」

ダチ＞マスター！って感じです。

あっちなみに綾子、ある程度は聖杯戦争の事を聞いたようで、マスターとかサーヴァントとかのこともわかります、つか下手したら俺よか理解してるやもしれん？

まぁいいけど。

「マサナリ？またリンにガンドを撃たれますよ？」

「当たっても効かねえし？心配ないさぁ！」

セイバーにダメ出しされたが、即座にナイススマイルのサムズで答える。

「いえマサナリを心配してるわけではなく、こう・・・なんといいますか・・・リンの殺気は・・・一般人にはキツイのでは？」

あっ心配してんのは、そっちの方？ふむ・・・

「なぁ綾子？凜って偽？真？どっち？優等生的な意味で？」

「偽だろ？アレは偽だ」

おう、凜、シッカリ綾子にはバレとりますがな？つうこたぁ

「耐性がありそうだから大丈夫じゃね？凜が偽・優等生って知ってんだったらさ？」

「そういうものですか？」

そういうもんですよ？

「あっマサナリ？魔術の触媒としてアナタの血を使いたいんだけど？一応は保険として強化しておきたいのよ。」

ン？血とな？

「別にいいぞ？どんくれえ？５リッターくらい？」

「致死量軽く越えてるだろ！？」

ナイスツッコミ綾子君、しかし

「そんくれぇなら全然大丈夫なんスけど？昔１０リッター近く出血サービスしたことあっけどレバー食ったら即元気になったぞ？」

「それ完全におかしいから！マサって見たとこ７０キロくらいだろ！普通血液って体重の１０パーセントくらいだぞ！明らかに上回ってるから！」

綾子君物知りだな？あっちなみに確かに俺７０くらいッス、正確

には知らんけど？

「まっアレじゃね？流れたと同時にジャンジャン造ってんじゃね？人体って凄いね？」

「凄いのは人体じゃなくてマサだと思うよ？」

イリヤに褒められた珍獣を見る目で見られた・・・チクセウ・・・

まっサクッと切り替えて

「で実際どんくれぇ必要なん？」

「数滴で十分よリッターも必要ないわ？コレに入れてちょうだい？」

どうやらリッターはいらないらしい、でっなんかビンを渡されました。

じゃ

『スパッ』

右手刀で左手を切って

『ポタポタ』

ビンに血を入れ

「ほれ？コレでよか？」

「ええ大丈夫よ」

キャスターに渡します、そしてキャスター何やらソレっぽい呪文を唱えもう一つのビンに入れます。

『ボンッ！』

おぉ～～なんかソレっぽい！

「コレでいいわね？というよりコレ予想より遥かに強力になったわね？」

おう？

「マジで？どんくらい？」

「そうね・・・例えるなら８の力の薬を１０にしようと思ったのよ？けど桁を三つ程飛び越えて１００００になった感じかしら？魔力とか別段感じなかったのに・・・不思議ね？」

なんと！？

「すげぇな？俺の血？」

いやはやビックリだわ？

『ジーー』

「ゴクリ・・・ま・・・マサナリ・・・あの・・・」

感心してたらライダー君が何やらいいたげに俺を見ております、はて？

「なんぞ？」

「あっあの・・・血を・・・飲みたいんですが？」

はい？

「俺の？別にいいけんど？つかライダーって吸血鬼的な感じなん？」

ってアレこのやり取りどっかで・・・いやスルーで！

「は・・・はい・・・私は吸血種です」

ふ～ん？

「なるほろ？じゃほいっと」

『スパッ！』

再び手刀

「なんでもう一回切るのですか？それにそんなに簡単に吸血を許すんですか？」

「もう塞がってたから、それに別によかろ吸血くらい？なんかマズイの？」

「普通に考えたら十分マズイです」

セイバー君や？

「俺普通じゃないからね～っとほらライダー？はよせんなら塞がるぞ？」

グッと腕をライダーの前に差し出す、したらライダー君、おずおずって感じで血をチューチュー。

「吸血種ってわかってって簡単に血を差し出すとは」

「それがマサだよ？」

イリヤっ子の言う通り！それが俺なんですよバゼットさんや。

「でもコレって結構異常な光景だよな？まぁあんまり驚いてない私も私だけど」

まぁ慣れてきたんじゃ綾子も？

「それにしてもマサナリよく平気ね？」

まぁ俺的には献血みたいな感覚ですよキャスターさんや？って考えてたら

「普通吸血種に血を吸われると少し気分が高揚するのよ？簡単にいうとエロくなるわ」

キャスターの補足説明って・・・

「マジで？」

「ええまぁ押されられくなったら私が面倒」

『チュポン』

「その役目は私のものです！責任は私が！」

あらライダー？吸血終わりか？つうかお二人さんや？

『ガツン！』

「ッ！」

『ゴツン！』

「イッ！？」

ダブルゲンコ！

「教育的指導だバカタレ！つかね全然なってないから？大胆だねキミ達クドクド・・・」

１０分くらい説教しました、もちろん正座さしてな！

「あの二人懲りないな？」

「私のサーヴァントながら恥ずかしいですキャスター」

「よかった・・・危うく巻き添いだったかも」

「全く・・・イリヤスフィールも似たようなことを考えていたんですか？」

上から綾子、バゼット、イリヤ、セイバーの順でした。

あっバゼットとセイバーが赤くなってて可愛いかったッス。

で説教後に

「マサナリの血の味はマサナリが愛飲してるアノ飲み物・・・確かミ○ミ○でしたか？と同じ味がしました」

ライダーの感想を聞いてみたら『やっぱり』ミ○ミ○と同じ味だったらしいって『やっぱり』？アレ？いやまぁスルーで！

「それと・・・」

ン？それと？

「完全に受肉しました」

「「「「嘘～～～～」」」」

ライダーの言葉に、めっさ驚いててる魔術に詳しい組。

「受肉って何？」

「確か・・・霊が実体を持つことじゃなかったか？ってなんで今日知った私が知っててマサは知らないんだよ！」

そこはスマン綾子よ？なんか難しかったんで覚えてなかったんス。

「マサナリ！私にも血を飲ませてみなさい！」

おう？キャスター？

「いいけど？」

スパッと切ってキャスターにも飲ませてみた。

「血は普通に血の味ね・・・けど・・・ホントに完全に受肉してるわセイバーアナタも試しなさい！」

セイバーまで？

「えっ！！いや私は遠慮」

「いいからッ！」

「ちょ・・・やめ・・・あっ・・・」

結果

「完全受肉しました・・・クスン・・・」

受肉したらしい、つか何故泣く？まぁ血飲まされたんだからそうなるか？

っとそろそろ

「おいてきぼりのマサさんに説明しよう？マサさん全然わかってないから？」

魔術詳しい組に説明を求めます。

「そうね・・・簡単に言うと生き返ったってところね？」

ふ～ん・・・ってアレ？

「マジで？」

「ええ、私達サーヴァントあっマサナリは除くわよ？は、マスターの魔力によって実体をもつわけど・・・・」

・
・
・
・

「というわけよ？」

「マサのやつ聞いてないぞ？ほら？」

『ピコンピコンピコン！ガボーン！』

「へっへ～ん！マサ弱～い！」

「弱くねぇ！イリヤやり込んでんだろコレ！」

「私テレビゲームするのって初めてだも～ん！マサが弱いの！」

グハッ・・・また初心者に・・・いやまだだ！

「セイバー勝〜〜〜負！」

「構いませんが・・・私も初めてなんですが？」

だからこそじゃい！

「なっ？」

「全くもって微塵も聞いてないわね？まぁいいわ・・・また説明しても無駄そうだもの」

『ガボーン！』

「チィクショォォォ！」

「あのマサナリ・・・気を落とさないで下さい」

セイバーもめっさ強かったです！なんなんだ最近の初心者はバケモノか！？

あっちなみにゲーム機とソフトは俺が買ってきたやつね？

それとキャスター先生の話しは纏めると

「ようするに俺の血は世界樹〇葉的なもんだったってこったろ？」

「少し違うけどその解釈でいいわ」

一応少しは聞いてたんですよ？前半部分は全然聞いてないけど。

まっとにかく！

「勝～負！キャスター！」

キャスターと勝負！

『ガボーン！』

「弱いわね？」

敗北！チィクショォォォ！

「バゼットォォォ」

『ガボーン』

「弱いですね？」

敗北！まだまだァァァ！せめて・・・せめて一勝！

「ライダー・・・」

『ガボーン』

「あっあの・・・すっすいません」

敗北・・・謝らんで下さい・・・いやラストにかけろ

「綾子・・・」

『ガボーン！』

「マサ・・・ゲーム弱いな？」

全敗！

綾子以外全員初心者だったのに・・・ハッ！まだだ！まだアイツが！

「バーサーカーァァァ！」

『ガボーン』

勝つには勝った・・・けど

「手加減したろ？」

「■■■■■」

『スッ』

目を反らしやがった・・・

「手加減されても嬉しないんじゃバーカ！バーカ！バーサーカーのバーカ！うわぁ～ん！」

「■■■■■」

知るかァァァ！チクショォォォ！
俺逃走！
いや違う逃走じゃないアレだからそろそろ洗濯物を取り込む時間だったから！
ン？家事に逃げただと？逃げてないっってんだろ！
・・・・
でそれから洗濯物をキチンと畳み、その時に
「ッ！マサナリ！ソレはいいです自分でしますからッ！」
『バッ！』
とセイバーが真っ赤になったりしたがな！あっイリヤは
「マサならいいよ～」
って感じで俺に畳ませてました。
「なんだろうな？普通なら変態ってツッコミを入れるべきなんだけど」
「余りにも板についてますね？完全に主夫のソレです」
綾子にバゼットはこんな感じ。

「私の下着も・・・」

『スルッ』

「指導！」

『ガツン！』

「バカねライダー？下より上よ？」

『スルッ』

「バカはオマエだ！指導！」

『ガツン！』

ライダー、キャスターはこんな感じで下着を脱ごうとしたんで指導した後に、３０分程正座させておきました。

あっちなみに俺の血に世界樹〇葉的なやつと言ってたが補足としてキャスターいわくどうやら俺ん血、生命力的なものがやたらと多いらしい

魔力的な力はないけんど魔術的な薬とかに混ぜたら増強作用が働くとか。

普通のやつが飲んでも意味はないらしいけどな！

以上補足でした。・

・・・

ライダー視点

まさか完全に受肉するなんて思わなかったですね。

キャスターが触媒にとマサナリの血を要求した時に興味がそそられつい血を飲ませてほしいと言いいましたが

まさかこんな作用があるとは・・・しかし受肉できたことは嬉しく思う。

聖杯戦争が終わっても消えずにすみますから

なによりマサナリとまだいれるそのことが嬉しい。

吸血種だと知ってなお変わらずに接してくれるマサナリ嬉しい。

マサナリと出会ってから半日も立っていないのにこんなにも嬉しいと思うことが多いなんて

桜も救われるでしょうコレも確信しています。

あぁ今日はホントに嬉しいことが多いですね？

けど・・・何故マサナリは吸血の副作用が出なかったのでしょう？確かに興味があったのは事実ですが、あわよくば別の部屋に連れていき『バキュン！』を『バキュン！』して『バキュン！バキュン！』を

『ガツン』

ッーーー考えてたことが読まれてしまいゲンコツをされてしまいました。

・

・・

・・・

キャスター視点

マサナリの血・・・興味深いわね？まさか完全にコノ世界に受肉できるなんて。

魔力は全然ないのに・・・ホントに不思議だわ？

ハッ！そうだわ！

血もコレなら・・・そうねきっとそうだわ！

今夜あたり『ズキューン！』を『ズキューン！ズキューン！』

『ズガン』

痛いわ・・・マサナリ・・・ゲンコツ痛すぎるわよ・・・となりを見たらライダーもされてるわね？

どうやら同じ事を考えてたみたいね・・・けどライダー？マサナリの『ピー』は

『ガツン！』

痛いわよマサナリ・・・

・

・

・

・

セイバー視点

完全にコノ時代に受肉して『しまった』・・・いや違いますね・・・定着と言ったほうが正しいかもしれません。

向こうはどうなってしまったでしょうか？コチラに定着してしまったから完全に死んでしまったかも知れない。

実は私はまだ完全に死んでいなかった正確には死ぬ寸前といったところでしょうか？

もう死は免れない・・・そんな時に私は英霊となりコノ聖杯戦争に参加することになりました。

私は聖杯に願いたいことがありました、『過去』を変えたいという願い・・・いえもういいですね・・・

この願いは叶えても意味がない・・・『今』を全力で生きるマサナリを見てそう思います。

それにそんな願いをしてしまえばコノ出会いもなかった

自分勝手なことだとわかっている。

けど私はマサナリとの出会いを無くしてしまいたくない。

だからコノ時代に定着『できた』ことを少しだけ喜ぼう。

そして私がいた時代に

ありがとう・・・そしてすまない勝手な王で・・・

感謝と謝罪を

私の真名は・・・フフ・・・後でマサナリに教えてみよう。

きっと驚くでしょうね？

・

・

・

・

「アーサー王となッ！マジで！アーサーとな？ほうアーサーな・・・

うんうん！アーサーアーサー」

「知らないんですか？」

「いや知ってるよ？アレだろかつて黒船で日本に」

「それはペリーです」

まさか知らないとは・・・自分で言うのはアレですがそれなりに有名なはずなのに・・・と若干肩を落としていたら

「まっホントは知ってるけど？映画とかにもなっとるしな？しっかし女の子だったとはねぇ？」

ホントは知っていたようです、問答無用で斬りかかりました。

もちろん防がれましたが。

第十一話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

色んな意味でルールブレイカーでした。

もうやっちゃった感じです。

そしてマサ、オマエはどこまで行くんだ？というかコノ話しはどこに行くんだ？

もうサッパリサッパリです。

ですが頑張っていきますので次回もまたお暇なればヨロシクお願いします。

感想などもありましたら是非

あっ！桜までいかなかった！！

第十二話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

久しぶりにコチラです。

ご都合テンコ盛りでアレがソレです。

大丈夫大丈夫　という方はどうぞ。

第十二話みたいな雰囲気！

「じゃ太陽での生活楽しんでこいや？」

俺の手に握られてるのはくそったれの寄生虫が入ってるビン。

『やっやめろ・・・』

何やらほざいているが

「悪いな？　俺・・・蟲の言葉わかんね、逝ってらっしゃあァァァァい」

『グッ』

俺はそのビンを太陽に向かって振りかぶり・・・

「ウラァァァァァァァッ！！」

『ブオン』

おもくそ投擲してやりました。

『キラーン』

「しゃスッキリ爽快！！　さって桜ァ？　オマエ洋食が得意なんだろ、今日は洋食にすっかハンバーグとか？」

「はっ・・・はい！」

とこうして蟲ジジイは太陽の住人になりました、めでたしめでたし。

あっ色々はしょりすぎ？　だよな、じゃコレまでの経緯をダイジェストで。

凛、士朗、桜が帰宅（大河はまだ学校）そして凛に物影に連れて行かれてガンドを撃たれる。ちなみにこの時、ライダー始めキャスターにバゼット、綾子には隠れてもらってました。

←

で、ホットケーキ（桜のにはキャスター印の薬入り）を振る舞う。

←

桜　おやすみ～、この時、凛とか士郎に散々文句を言われたので、ライダー達に登場してもらって事情説明。

←

ぞろぞろとサーヴァントやらマスターやら更には一般人を連れてきたことに対してやっぱり凛にガンドを撃たれる。

←

実は凛と桜が姉妹であることが判明。

「砂場の山と実際の山くらいの戦力差なのに？」

ついそう言ったらやっぱりガンドを撃たれる、そしてセイバーさ

んにも斬りかかられる、この時の士郎のガクブルっぷりは逆に面白かった。

←

落ち着いたころにキャスターさんの魔術＋宝具で蟲をスパッと切除、ビン詰めにする、この時に桜の体の中に聖杯のカケラとやらが入っていたことが判明、一緒に取ってもらう。

←

なんとイリヤっ子にもカケラが入ってることが判明、やっぱり取ってもらう。更には実はイリヤ　士郎の義理の姉と判明。

「姉なのに何故にお兄ちゃんつった・・・ってそらそうか士郎の趣味だったもんな」

殴られる　けど士郎が手を痛める。

←

桜　目を覚ます、同時に蟲も目を覚ます、蟲がなんちゃらかんちゃらほざいてるがスルーして桜に情況を説明、ほうけていたが、ライダーの。

「桜・・・アナタはもう自由なのです」

の一言で色々と理解したのか　わんわん泣き出す、そして桜は凛に対しての少しの怨み事を言う、しかし。

「桜・・・士郎はな巨乳好きだ・・・」

ライダーから桜が士郎に惚れていたのを知っていたんでボソッと耳打ち、桜、自分の胸と凛の胸を見比べて、ごめんなさい　と凛に謝る。

直後　切り札の宝石とやらを使われそうになる、桜に盾にされる結構逞しい子だと思う。

←

で蟲の処分を考える、結果。

「お天道様にまかせるか？」

俺の一言に意味がわかっていない感じだったんで。

「太陽に投擲する　太陽はエネルギーの塊だからなァ　好きなだけ生きるられるぜェ」

悪役笑いしながら言ったら。

「そうね・・・マサ・・・アンタ　いいこと考えるじゃない　コイツは殺すだけじゃあきたらないわ　生き地獄を味わえ！！」

フッ・・・いいねぇ凛。

でイリヤとセイバーに組むべくして組んだサーヴァンドとマスターと言われる、よっぽど似てたようだ。

やっぱり士郎がガクブルしてた、そして何故か桜が士郎を見ながら恍惚としてた。

←

蟲の戯れ事は一切聞かずにスルーしてピッチャー　マサナリ投擲。

『キラーン！！』

・
・　・
・

以上ダイジェストでお送りしました。

「マサナリ　早くハンバーグを作って下さい」

おっとイカンイカン　セイバーに急かされた、さてハンバーグタイムだ。

～俺＆士郎＆桜　料理中～

はい終わり、三人で立つにはちぃとスペースが厳しいな。

「今度　リフォームしていいか？」

「マサがか？」

「当然！　まっ軽く広げっくれぇだけど」

「じゃ頼むよ」

おけ。ってアレ桜。

「せ・・・先輩が物を頼むって珍しいですね？」

「そうかな・・・あっでも言われてみれば・・・そうかもしれないな逆はあるけどさ」

「ふ～ん俺ァガシガシ頼むけどな～今日だってそうだったし　まっ得意不得意があっからなぁ？」

「マサはハッキリしてそうだよな　そういうとこ」

まぁな、主に勉強とか勉強とか勉強とかね。

『ガラッ！』

「士郎～～～マサナリ君～～～～ごっはん～～～～」

おっ　いいタイミングで大河も来たな。

「じゃちゃちゃっと持ってきますか」

「ああ」

「はい」

でメシを運んで並べていただきますして皆でむしゃむしゃ、うむ。

「美味ぇな～」

「うんうん美味しい～」

いやさ　桜もかなり腕だな、士郎は和食のが得意つってたからな明日は和食系にすっかね～。

「って増えてる～～～～～～～～！！」

大河君、遅いぞリアクションが、まっ取りあえず。

「はい　コチラから順にライダー　キャスター　バゼット　ですっと今日からハイツ衛宮ン新しい住人」

ってそだった。

「綾子はどうするん？」

「一度　家に帰るよ服ないし」

「じゃ送迎はまけせれ」

「ありがと」

「おう！」

綾子は一時帰宅っと。

「まっとにかく新しい住人ってことで！」

あっ一応は士郎に許可は取ってるぞ。

「あっ・・・新しい住人って・・・しかも全員　女って・・・」

あっ・・・言われてみれば。

「ダメダメダメ～～～～～！！　間違いが起こったらどうするのッ！！」

「ないっつうに・・・朝にも言ったやん」

「むっむ・・・確かにそうだけど・・・」

むぅむぅ唸る大河だったけど　最後はなんとか納得してもらいました。

で

「大河さんや」

「モグモグ・・・何～」

食後の杏仁豆腐をモグモグ中の大河に少し前から考えてたことを聞いてみる。

「なんかバイトとか働き口にアテない？」

はいそろそろ稼いとがないとね、稼いで使うコレ基本。

「働き口～？　う～ん　ちょっと待ってね」

携帯を片手に席を外す大河。

「アテがあるっぽいな～　しゃッ！　士郎　バシッと食費くれぇは稼いでくるぜぃ！！」

「助かるマサ　人数増えたから流石にさ」

まっ俺が原因でもあるしね。

「マサ・・・アンタ　ホント　サーヴァントの自覚ないわよね・・・働くサーヴァントって聞いたことないわよ」

フッ・・・凛よ。

「前例がないなら作りゃいいってどっかの偉え人が言ってたような気がするぜい？」

誰かは知らんけど。

「マサナリ良いことを言いますね・・・どごぞのインチキ占い師とは違います」

「あらバゼット・・・売ってるの？」

「誰とは言ってません」

えぇ～いこの二人は・・・。

「オマエらの杏仁ボッシュートな　セイバー食っていいぞ～」

『バッ』

「もきゅもきゅもきゅ・・・」

「「ああ～～～なんてことを～～～」」

オマエらが悪い。

「本来なら殺しあいする相手がちょっと喧嘩したからってコレね・・・なんかサーヴァントって何かわからなくなってくるわね」

「そうね・・・全く絶対マサのせいよ」

恐悦至極にございます。

「フフ・・・確かに凄い光景だな～」

「全サーヴァントの内5人が集まってるのにコレですからね・・・流石は私の最高のマスターです」

「えっ？　ライダー・・・やっぱり・・・」

「ええ桜の気持ちが解りました」

「そうなんだ・・・そっか頑張ってね」

「ええ」

はて・・・桜とライダーの二人は何の話をしてんのやら。

「マサナリ君～ちょっと来て～」

おっと大河の呼び出し、大河ンとこに向かいます、つかコッチに来て言やいいのにとか若干思ったが。

「・・・ってことで！！」

「おけッ！　いや～大河さん流石は技の一千万」

「フフ～ン　当然！　力の一千万！」

『ガシッ！』

「「一億万パワーズ！！」」

そんな感じで戻って来たら今回は残念なヤツを見る目で見られた。

「「慣れたものでした」」

しかし俺はともかく大河も慣れてた。

「ライダー・・・最大の壁は藤村先生かも・・・」

「手強い壁です・・・」

いやさ壁って何　まっいいさね。

とにかく俺は仕事をゲットしたのでありました、あっまだ何をするかは内緒です、まっ予想は出来っだろうけどね。

その後は大河は帰宅と綾子も服を取りに戻るってことで送迎・・・

まっ大河は原チャリだけど、そこは俺。

『スッタタタタ』

綾子を抱えて普通に平走。

「へ～～マサナリ君も戦隊物好きなんだ～面白いよね～」

「つっても一昔前ンだけどな　今のは複雑すぎてわからん？」

「あ～～わかるわかる！」

「っていうか藤村先生バイクに平走されてるのになんでツッコまないんだ？」

綾子がツッコんだからいんじゃね、それにそこまで大河スピード出してねえし。

『キキッ！』

「着いた～ありがとね～」

「おうッ！　デカッ！つか大河ン家って・・・アレか？　極道？」

門構えといい黒塗りカーといい完全に極道です。

「あっやっぱ引く？」

「いんにゃ気になっただけ　極道くれぇでビクついてたら身がもたんしな～まっ粉かけてきたら・・・アレだけど」

「買う気かよ！」

当然ですとも、基本　喧嘩は買いだからな。

「かけないよ　じゃまた明日ね～」

「おう！　じゃあな」

「それじゃあ藤村先生」

大河と別れてお次は綾子ン家、そのまま抱えてＧＯです。

『グッズダダダダ！』

「はっ早ぇ～～～次は左な」

「あいよ」

とこんな感じで綾子ン家にも到着。

で暫く待機してたら直ぐに綾子が出てきて再び抱えて士郎ン家にＧＯ。

ちなみに綾子ン家　放任主義なんだと。

そして到着してから。

「ほれバーサーカー」

「■■■■■！！」

バーサーカーに今日のハンバーグを使ったハンバーガーを上げてきました、やっぱりすっげぇ嬉しそう。

ゴッツイ顔してるのにニコニコ食べるバーサーカーにすげぇ癒された。

まっ綾子君は見えてないからこの癒しは伝わらなんだろうけど。

『ガラッ』

「はいたっだいま～」

「スッカリ我が家だなマサ」

図々しいヤツですから。

で居間でダラダラとテレビを見てたら

「今日未明　冬木・・・丁目の付近に変質者が・・・」

変質者ね～。

「もしかしてコレ慎二じゃないか？」

「誰だったけ？」

「ワカメです」

「あ～～性犯罪者？　ハッハ～ざまぁ～」

留置所で深～く反省しろい。

「えっとライダーどういう」

「あっ桜にはまだ話してませんでしたね実は・・・というわけです」

「そっそれは・・・じ・・・自業自得・・・かな？」

そういうこった。

「そうねマサ！　アンタよくやったわ　綾子も大変だったわね　巻き込まれたって言ってたけどアイツのせいだったわけね」

「ああ・・・マサが来てくれなかったらと思うとゾッとするよ」

「そうですね私にとっても同じです」

むっ・・・なんだねライダー君、綾子君。

「感謝してるよ」

「感謝しています」

おやまぁ・・・。

「よせやい照れらァ」

つか礼はもう言われたつうのに。

「慎二のヤツ反省してくれるかな・・・」

「士郎は優しいやっちゃのう」

「慎二とは友達だからさ・・・」

ふ～ん、アノ性犯罪者とね～。

「ああなる前に殴りゃよかったのに」

「ああ・・・今度はきっとそうする」

ならいいわい。

まっ俺はアイツ嫌えだけど。

「あ・・・あの・・・ああなったのは私のせいかもしれないんです・・・」

ン　桜、どういうこっちゃ。

「えと・・・間桐の家系は元々は魔術師の家系だったんですけど代を重ねていくことで魔術師としての血が薄れていって　先代の時に途絶えたんですそれで私が引き取られたんですけど　兄さんはそれまで自分は魔術師の正当な家系だと思ってましたから・・・」

ふ～ん。

「で　なんで桜のせい？」

「えっ？　えっ・・・あの・・・それは」

「嫉妬よ・・・私の前のマスターと同じようなものね」

おうキャスターさん？　はて前のマスター・・・まっいいさね、その内、教えてくれるだろ。

にしても嫉妬ねぇ。

「確かにビームとかガンドとか羨ましいよなぁ俺も撃ちてぇけど・・・でもよ・・・何故に性犯罪に走るんだつうの？　どういう思考？」

「アンタがどういう思考してるのよ！！　まっようするに桜に対する嫉妬心から　あんな性格なったってことでしょ」

ふ～ん。

「やっぱり桜のせいじゃなくね？　俺だってなんやかんやで魔力ナッシングだしビーム撃てねぇけど　あ～は　ならんぞ？　結局　自分の問題じゃね？」

「そうね桜　アナタのせいじゃないわ気にすることないわよ」

うむうむ、そういうことです。

「そうだな・・・自分の問題か・・・羨ましく思ったり憧れたりするのは仕方がないけど・・・うん・・・そうだよな桜　今度　俺からもちゃんと慎二と話してみるよ　もしそれでもわかってくれなかったら・・・殴ってでもだ」

「先輩・・・あっありがとうございます」

うむ、流石は士郎、惚れたヤツの言葉は胸に届くってヤツだな。

「ふむ・・・ライダーさんや中々に良い感じですぞ」

「ええ　後は士郎と桜を同じ部屋で寝かせ既成事実を」

「それはダメ教育に悪い」

「では私とマサナ」

『ガスッ！』

強制的に黙らせた、つか　ではって・・・アホにも程がある。

「マサ～ゲームしよ～」

そんなライダーの跨いでイリヤっ子が勝負を挑んできた、しかし・・・イヤ今は凛に士郎に桜がいる！　特に凛と士郎は苦手そうだし・・・イケる。

「よかろう！　勝負してやろうではないか！」

とゲーム大会スタート。

で結果は・・・士郎　意外と上手かった・・・桜は普通に上手かった・・・俺と凛が最下位を争ってます・・・大体五分五分若干俺が強いってぐらい。

そして最終決戦、凛に

「マサ・・・負けた方が罰ゲームするってのはどう？」

というような条件を持ち出され、つい承諾。

「フッ・・・掛かった・・・」

「はっ？　掛かったって・・・」

『ガボーーーン！！』

撃沈。

「さってと・・・じゃ今日もね？」

まっまさか・・・何て・・・こった・・・凛・・・今までブラフかましてやがったってのか。

凛の顔を伺う。

「そゆこと」

凛・・・なんて・・・なんて・・・。

「腹黒い・・・真っ黒だコイツ・・・赤い服なのに腹は真っ黒だ」

「策士といいなさい策士と！　ってわけで衛宮君　寝る時間よ？」

「ああ～眠い！　今日も眠い～じゃおやすみ～」

士郎め・・・今日も一足先に寝るという名の逃走しやがった。

そして・・・

『パシャパシャ』

やられてキャッキャウフフされた。

「ハァハァハァ・・・ゴクリ・・・流石は最高のマスター・・・」

「素晴らしい・・・素晴らしいわ・・・」

ライダーとキャスターすげぇ怖ぇんですけど。

つか

「何故に桜も・・・」

「ソレはソレ　コレはコレです」

た・・・逞しいすぎるぜ桜君・・・。

「凛が会長か・・・その座は私がいただくけどな」

「譲らないわよ綾子」

何ハードボイルド調の空気出してんの、つうか会長とかマジで意味わかんねぇですけど。

「セイバーこっちと変えて」

「コレはダメです　コチラなら」

トレカでもねえっつうの。

「・・・チラッ・・・凄い・・・チラッ・・・凄い」

チラチラ見ながら呟くバゼットさんがまだまともに見えました。

第十二話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

色々と考えた結果・・・

ダイジェスト！！

そして最後はアレで食いつなぐ。

こんなアレな書いてる人ですが、お暇ならまた見てやって下さい。

では次回・・・。

第十三話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

久しぶりにコチラです、今回もまた悪ふざけが酷い・・・それでも大丈夫という方は気をしっかり持ってどうぞ。

第十三話みたいな雰囲気！

凛　視点

『キーンコーンカーンコーン』

授業開始のチャイムがなり自分の席へと着く。

イヤな・・・凄くイヤな予感がする・・・何かしら上手くは言えないんだけど、この感じは、桜の事も解決したし、聖杯戦争に関してもサーヴァントのうち5人が仲間っていう殆ど終結したんじゃない？　と思いたくなるくらいに平和そのもの。

けどこの首筋がヒリつくような感じ・・・何か・・・重大な事が起ころうとしてる。

今日、学校に来たのは間違えだったかもしれないわね、とにかく何かあったら直ぐにマサを令呪で呼び出すようにしよう。

『ガラッ』

「おっはよ～」

あっ・・・藤村先生・・・今日の一時間目は英語だったわね？
このイヤな予感は気になるけど授業は授業でちゃんと受けないと。

ふぅ～優等生でいるのも大変よね・・・。

「はい、えっと～今日はなんと私のサポートをしてくれる人を呼んであります」

藤村先生の何気ない言葉にゾクリとイヤな予感が膨らむ・・・。

まさか・・・ねぇ？

「カモーン！！」

そんな私の気持ちを置いて藤村先生はそのサポートをしてくれるって人を招き入れる。

『ガラッ！』

教室の扉を開き入って来た人物の正体は・・・。

「Ｈｉ～～マイネーム・イズ・マサナリ　キジマ！！　コールミー、マサ～～ＨＡＨＡＨＡ～～～」

付け鼻に金のヅラをつけたバカ（マサ）だった。

イヤな予感の正体は・・・アンタか・・・マサ・・・。

思わず頭を抱えて机に突っ伏す、ホントならガンドの５～６発も撃ち込んでやりたいとこだけど流石に自重。

「Ｏｈ～～～ミス、リン、ドウシタデスカ～」

はっ・・・話しかけないで・・・お願いだから、もう私ギリギリ

だから、ギリギリのライン渡ってるから。

「ウ～ン・・・スルーデスカ・・・コマッタ、ヒンニュウデスネ～」

「コラッ、マサナリ君、遠坂さんが例えそうだとしても、ハッキリ言っちゃダメでしょ！」

「Ｏｈ～ソ～リ～」

プチッ・・・あっ私の中で何かキレた・・・。

「アンタらそこに直れェェェッ！！」

教室に私の叫びが響き渡った・・・。

・
・　・　・

マサ　視点

「いや～凛、めがっさ怒ってたな～」

ペタペタと校舎の壁の剥げた塗料をぬりぬりしつつ呟く。

あっ大河に紹介して貰った仕事は例によって学校の用務員です、ちなみに作業着に着替えとりますよ。

あっそれと、さっきのアレはただの悪戯ッス、大河もノリよく乗

ってくれたから、ついはしゃいでまいました。
反省も後悔もしてないけどなッ！！
すんげぇ面白いかったし。
まぁあの後、凛は大変だっただろうけどな・・・うむ、やっぱし少しくらいは反省しよう。
「あれ・・・マサ？　オマエ何してんだ？」
「よぉ士郎、見てン通り用務ん仕事、士郎は今、休み時間か？」
俺の問いにコクリと頷く士郎君、って隣にいるんは誰じゃろ？
「むっ衛宮の友人か？」
「ああ一成、マサって言うんだ」
どうやら士郎のダチらしい、なんか武士っぽいな・・・もしくは修行僧？　っと。
「鬼島　政成ってんだ、マサかマサナリでヨロシクどうぞ～」
「うむ柳洞一成だヨロシク頼む」
う～む・・・ますます修行僧っぽい。
「で俺は言った通りに用務ん仕事だけどお二人さんは何しよんの？
スパナなんざ持ってからに・・・カチ込みか？」

はい、士郎、右手にスパナを持ってますねん。

「違うって、一成に生徒会室にあるストーブの修理を頼まれてさ」

なるほろ。

「俺も見に行っていいか？　もうやることやっちまったからヒマなんだわ」

「ああ、俺は別にいいけど一成は？」

「構わんぞ」

というわけで三人で生徒会室とやらへ向かいます。

「へぇ一成、生徒会長なん？」

「うむ、若輩ながらその任を担わせてもらっている」

「一成はよくやってると思うけどな」

「ハッハッハそう言ってもらえると嬉しいな」

うむ、一成君はいいやつっぽいな、やっぱし修行僧っぽいけど、それはそれで面白いし。

「今回のストーブの修理もそうだが、衛宮にも大分面倒をかけているんだがな」

「別に面倒じゃないって」

「へぇ学校の修理屋ってとこか？」

「うむ、衛宮は冬木のブラウニーとして名を馳せているからな」

なんと！？　むむ・・・。

「アンタには絶対負けないんだからッ！！」

「急に意味がわからないからマサ、あと気持ち悪いから！！」

ツンデレでライバル宣言をしてみたんだがやっぱし気持ち悪かったらしい。

「ツンデレは凛の仕事だもんな～」

「凛？　むっあの女狐か？」

およ？　一成君。

「凛の事知ってんの・・・ってそらそうか同級生だしな、それに有名つってたしな・・・にして女狐って・・・」

「ふむ・・・あの女はどうにも猫を被ってるように思えてな、勘に引っ掛かる」

ありゃま・・・凛よ。

「バレとるがな、中々に良い洞察力してんな一成？」

「むっ・・・政成、その様子だと主も気付いてるのか？」

「まぁよ、つか俺から言わしゃあの偽・優等生っぷりは涙無くして語れねぇな、うんうん、すんごい努力してんだってアレ」

もう血の滲むような特訓を重ねたに違いあるまいて。

「まっマサ、一成・・・後ろ、後ろ！！」

士郎よ何をそんなにガタブルしてんだ・・・まっホントはわかってるけどね。

『ポン』

肩に手を置かれて振り返ると案の定、ステキな笑顔の凛さんがいました。

「来い！！」

クイッと親指で物影を指差す凛・・・ふむ。

「相変わらず男前だな」

「いいから来いッ！！」

ズルズルと引きづられてガンドの嵐を受けました、全然効かないけどね。

「オホホホ・・・ごめんなさいね、邪魔しちゃって、少～しマサ君とお話があったものだから」

あくまで被るんだな猫を、その努力にマサさん涙を禁じえねえ。
「もういんじゃねバレとるよ？　つかアレをお話と言う凛の発想は完全にヤク〇とかマフィアのそれだぞ？」
「余計なことを言わない！！」
そんなん言われても気になったもんでよ。
「マサって遠坂を怒らせるの上手いよな」
「おいおい士郎君、失礼だな怒らせてるわけじゃなくて、からかってんだっつうの」
もしくは遊んでるね。
「火に油を注ぐなって」
いやぁついつい、チラッと凛さんを見てみたら、めっさコメカミがひくついとりました。
そして一成はなんか感心したように、うんうん頷いとりました。
後で正しい凛のからかい方を伝授してみようとか考えてたら。
「やったらマジで殺すわよ？」
ガチな殺気をぶつけらたんで断念した、やっぱし士郎の震えっぷりが半端じゃなかった。

「でアンタは何で学校に来てんのよ？」

一成に聞こえないように小声でそう聞く凛に。

「仕事だっつうに、大河の紹介、用務員だ朝のアレはただのネタ」

「ネタであんなことすんなッ！！　あの後、大変だったのよ」

「スンマセン、面白そうだったもんで」

「面白そうって・・・このバカだけは・・・アンタ、マジで覚えてなさいよ」

まぁ怖い、コレ下手したら今日もまたあのアホなアレが・・・いや考えんなぁよそう、心の汗が流れるからな。

「まぁいいわ昼休みになったら屋上に来なさい衛宮君にも伝えておいて」

「あいよ」

と密談が終わると凛は偽・優等生の仮面を被って去っていきました。

さて・・・。

「士郎、何時までガタブルしてんだストーブ直しに行くんじゃろ？」

今だにガタブルしてる士郎を立ち直らせて生徒会室へと向かいま

す。

で生徒会室に到着したら士郎が。

「じゃちょっと見てくるから待っててくれ」

と俺と一成を外に残して生徒会室の中に一人で入る。

何故にとクビを捻っていたら一成いわく壊れた物を調べる時は一人で調べたがるらしい。

「アレかなスッパでウッヒョーって奇声を上げながら調べてっからかな？」

「むっ衛宮はそんな特殊な性癖を持っているのか？」

「実はな」

『ガラッ！』

「ンなわけあるかァァァ！！」

聞こえたらしく殴られた、やっぱし士郎が手を痛めた、一成がビックリしてたが頑丈だからなっつったら。

「いや、衛宮がこうやって素直に怒りをあらわにするのが珍しくてな」

「士郎、結構こんな感じで怒るぞ？」

何回か殴られてるしね、効かないけど。

「痛って～～～～怒らせてんのマサだろ・・・」

恨みがましく睨まれました、まぁ確かにそうなんだけどね、つい弄りたくなるわけですよ、面白えから。

で実際の理由を聞いてみると解析つう魔術を使うから一般人の一成は外に出てもらってるとのこと。

その解析ってどんなんか気になったんで俺も見ていいか？　と聞いたら俺は一応は魔術の事とか知ってるんだ大丈夫らしい。

つうわけで一成には悪いけど俺も見学させてもらうことに、一成には俺も修理屋みてぇなもんだから技術を盗む為とかテキトーに理由をつけといた。

で生徒会室に入って、壊れたストーブの前に士郎は立つと。

「同調開始（トレース・オン）」

呟くと同時に雰囲気が変わる、ストーブに触れて何やら読み取ってるみたいな感じ。

暫くストーブに触れてた士郎はフッと息を吐きストーブから手を離す。

「終わり？」

「ああ・・・配電がおかしくなってるみたいだな、直せば今年の冬

くらいは持ってくれそうだ」

ほう・・・。

「すんげぇなあんだけでわかるんか？」

「ハハ・・・何故かこういうのは得意なんだよな　こう頭の中に図面が浮かぶ感じかな？」

そりゃあまた・・・うむ。

「便利～」

「親父には微妙な魔術だって言われてたけどな」

いやさ、微妙ってかなり便利だと思うんだが・・・。

「生活密着型の魔術じゃん？　使えまくりやん」

とマサさんは思うわけです。

「生活密着型って・・・なんだそれ？　ハハ・・・でも、こういう事でも役に立てると嬉しいよな」

あらやだ士郎君・・・ステキやん、こりゃ桜が惚れるわけだ、俺が女の子だったらポッてなってるね。

「惜しかったな」

「なにがさ？」

深くは気にしなさんな。

『キーンコーンカーンコーン』

おっとチャイムだな。

「やばっ・・・じゃ俺、教室に戻るから」

「おう、あっ凛が昼休みは屋上だとよ」

「わかった」

『ガラッ』

「一成、戻ろう」

「うむ、では政成も仕事頑張ってくれ」

一成の激励にサムズで応える、まぁもう殆ど終わってんだけどな。

教室に戻っていった二人を見送り。

「さて・・・どうすっかね～」

仕事も殆ど終わったしな・・・やることねぇよな・・・。

大河んとこに遊び行くか？　でもな職員室だしな～、う～む・・・。

考えに考えた結果・・・。

「なぁあんなダンボールあったか？」

「さぁ？」

この時点で大体はわかるな？　そう、綾子の教室への潜入ミッションだ。

凛の教室へは一回行ったしな。

幸いにも綾子んクラスは今は自習だし。

『カサカサ』

軽く移動。

「今・・・動いたよな？」

「動いた」

むっ・・・マズイ気付かれたか？　いやまだ大丈夫だジッとしてれば・・・。

「気のせいか？」

ホッ・・・流石は伝説の男の最終兵器、素晴らしい効果・・・

「ってンなわけあるかァァァ！！」

『ガバッ！！』

綾子に剥ぎ取られました・・・残念。

「オマエ、何してんだマサ！！」

「へビごっこ」

「そういうこと聞いてんじゃないから、見ろクラスのヤツらビックリしてるだろ！！」

ふむ、確かにビックリしてなさる。

「俺の目論みは成功したようだな・・・じゃ俺、今から核兵器を内蔵した巨大ロボットを破壊しにいかないといなけないから」

「待てぃぃい！！　この空気をどうにかしていけ！！」

そりゃまた難しいミッションを・・・しかし、この政成、難しい任務程、血がたぎるぜ。

「ンッン・・・日本のハラキリを見た最初の外国人はフランス人らしいぞ？」

豆知識を疲労してみた。

「へぇ・・・って知るかァァァ！！　どうするんだよビックリ通りこしてハニワ見たくなってんだろ！！」

むむぅ・・・改心の豆知識なのに・・・テストじゃ使えねぇけど。

「ちなみにハニワと土偶は区別されてんぞ？　ハニワの由来は知らんが土偶の由来は宇宙服がどうたらとかアラハバキつう神様がどうたらとか」

「そのウンチクいらないって！！」

残念でぇす。

「じゃ何をすればいいのさ？」

「知らないって・・・っていうかなんでここに居るだよ？」

なんでかとな？　それはシンプルな答えですな、そうつまり。

「ヒマだから」

「そうか・・・だったらこのプリントやるから大人しく解いてろ」

ぬぐっ・・・プリントか・・・ふむ・・・。

「ヒコーキにするなよ」

チッ・・・先手をうたれた・・・仕方ないんで被ってたダンボールを机にしてプリントをすることに。

プリントの問題を見てみる・・・。

「無理、サッパリわからん」

「あぁ～～もうどれだ教えてやるから」

どれと言わりゃ全部なんだが・・・と、この時間は綾子に勉強を教えてもらって過ごしました。

あっ後、綾子のクラスメイツ達は最初は触らぬ何とかに祟りなし的な感じだったけど段々と慣れてきたのか空いてる席を貸してくれるくらいには仲良くなりました。

まぁ一人だけ作業着姿んヤツがミカンのダンボールの上でプリントやってるという客観的に見れば、あんまりだ・・・な光景を見てらんなかったっつうのもあるみたいだけどな。

後、綾子との関係も聞かれ彼女とか言われたんでダチつっといた、何故か綾子がクチビルを尖らせてブツブツ言ってた。

まぁそんなことがありながらも続いて時間は・・・。

『カサカサ』

「アンタ何してんのォォォ！！」

桜の所と迷ったが都合よく自習だった凛の教室に潜入した、けど速攻でバレた。

「ヒマなんだよ～～～」

「知らないわよッ、とっとと出てけッ！！」

むぐぅ・・・凛め・・・。

「凛の上げ底〜〜〜〜〜〜」

ものっそい形相で追っ掛けられた。

スリル満点で楽しかった、まぁ人目がないとこではガンドを乱射されたけどなッ。

とそんなこんなで時間は過ぎていき昼休みになりましたんで凛が言ってたみたく屋上へ。

メンツは俺、凛、士郎、桜に綾子です。

「つ・・・疲れた・・・もう帰りたい・・・ゆっくり寝たい・・・」

「頑張れ凛!! 負けんな凛!!」

凛がぐったりしてたんで元気づけてみた。

「アンタのせいでしょアンタの・・・アンタ前に通ってたっていう学校でもこんなんだったの?」

「いんや普通に・・・いや多少は普通じゃねぇな? 今みたく用務ん仕事したり臨時の警備員したり、保健室でサボったり」

他にも色々と。

「何でも屋ってことか?」

「そんな感じそんな感じ、そこそこ稼いでたんだぜぇ?」

「ッ！！　どれくらい！？」

うおッ凛食いつき激しいな？　そういや最初ん時に生活費渡した時もアレだったし。

「ねっ姉さん、そういうことを聞くのはちょっと・・・」

「よかよか、別に隠すようなこっちゃねぇし？　平均だと・・・諭吉が５０～６０人くれぇじゃね？　いっちゃん多かった時で三桁いったな」

テレビの出演代とか出張とかアシ代とかが重なってな。

「下手な社会人より稼いでるな」

「わりと器用だからな」

そこそこ色んな事を熟しますねん。

「み・・・三桁・・・・マサ！！　アンタここでも同じような事しなさい、で沢山稼いでその資金を私の宝石魔術に」

オイ・・・凛。

「遠坂・・・」

「ね・・・姉さん・・・」

「流石に引くぞ・・・」

ブリザードな視線に晒された凛、直ぐさま取り繕うように。

「冗談よ！！　ホント冗談だから！？」

って言ってましたが、今さら遅いッス、なんせ目がマジだったしね。

「うぅ～～～仕方ないじゃない、私の魔術は、お金が掛かって仕方がないのよ・・・幾らあってもあっという間になくなるし・・・欲しい服代だって削ってかないといけないし・・・」

地面に『の』字を書いてイジケる凛がちょっぴり可愛いかった。

「まぁ少しくれぇなら協力するわ」

「ホント！！」

「まぁ過度の期待はすんなよ」

「それでもいいわよ、フフ～ン持つべきモノは優秀なサーヴァントよね～」

まぁ嬉しそうナイススマイル。

「現金なヤツ」

「現金だけにか？」

し・・・士郎・・・。

「ない・・・それはない、流石の俺でもフォローはできん」

「あぅ・・・ごめんなさい先輩・・・笑ってあげられません」

「なんでさ!!そんなに悪い事、言ったか俺!!」

いやね・・・うん・・・まぁなんだ・・・。

「魔がさしたってって事だよな・・・うん・・・そういうことってあるよな、衛宮、大丈夫、誰にも言わないからな」

「そうね・・・私も言わないわ、約束する衛宮君・・・」

屋上が悲しみと優しさで包まれた。

「なんでさ〜〜〜〜〜!!」

そして士郎は悲しみの慟哭をあげた。

「まっ士郎の発言は聞かなかったことにして・・・凛、なして俺らを屋上に?」

イジけてる士郎の相手は桜に任せて凛にその事を聞いてみる。

「一応コレからの方針よ」

だったら家に帰ってから皆で揃ってやった方がいいんじゃね?

とか思ったが一応は聞いてみる。

「既にサーヴァントの内、六人の存在は確認されてるけど残りの一人・・・この一人の存在についてよ、今、確認出来てるサーヴァントは、セイバー、ランサー、ライダー、バーサーカー、キャスター・・・でマサのアヴェンジャーの六つ」

そういや俺、アヴェンジャーって事になってたな、すっかり忘れてたけど。

「で、今空いてるクラスはアーチャーとアサシンなんだけど・・・マサがアヴェンジャーっていうイレギュラークラスだからどっちが来るかわからないのよね」

そんなん言われてもねぇ？　俺かていきなりだったしな。

「まっどっちゃんでんよかわい、来たヤツ叩きゃいんだろ？」

「単純ね～まぁ確かにそうなんだけど、一応はキチンと情報は仕入れておきたいのよ」

情報を製す者はってヤツですな、ン？　そだ！！

「なぁ・・・キャスターにさサーヴァント召喚してもらうとか出来んかな？　したら俺らん陣営が六人になるし、ランサーは・・・まぁ俺が相手する予定だし」

この前、途中だったしな、それに俺、ランサーの事は結構気にいってんだよな、出来ればダチになりてぇヤツだしな。

「キャスターに・・・か？　そう言えばキャスターって完全に授肉

したって言ってたわね、もし七人目が召喚されてないようだったらそれもいいかも知れないわね」

うむうむ、じゃ家に帰ったら早速、キャスえもんに聞いてみよ、ホント、昨日に引き続きキャスえもん大活躍だな。

「なあ・・・遠坂・・・素人の意見なんだけどさ・・・サーヴァントって絶対に七人なのか？」

おう？　俺と凛が揃って綾子を見る、ちなみに今だに士郎は桜に慰められ中。

「あっ・・・いや、ほら隠しキャラみたいな感じで八人目とか九人目とかが居るんじゃないかなぁって」

「あのね綾子ゲームじゃないんだから」

確かにゲームだと王道パターンだもんな、魔王倒したら大魔王、大魔王倒したら、謎の裏ボスみたいな。

「アハハ・・・悪い、ただマサってイレギュラーなんだろ？　だったらそういうこともあるんじゃないかなぁって思ってさ」

「確かにマサはイレギュラー中のイレギュラーだけど・・・流石にそれはない・・・と思う・・・マサを見てたら自信無くすけど」

「まぁもし裏ボス的なヤツが居てもブッ叩くって事で？　案外こういうのって監督役とかしてるヤツが何喰わぬ顔で裏ボスだったりしてな」

「確かにありえそうね・・・アイツだったら裏で何やってるかわか

らないし・・・とにかく帰ってからキャスターに話してみましょう」

と結局はそういう意見に落ち着きました、にしても、士郎・・・

昼休み時間一杯まで桜に慰められてたな。

まぁ桜は嬉しそうだったけど。

色々、頑張れ士郎、そして桜！！

第十三話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

次回・・・下手したらマサ、クビになりそうな気が・・・。

いや仕事自体は高いレベルで熟してますけどね！！

そして一成君と綾子君の口調がわからない・・・こんなんでしたっけ？

もうグダグダだな～～～。

それでも頑張っていきますんで、また更新の際には見てやって下さい。

第十四話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

もの凄く久々にコチラです。

凄く間が開いてしまった・・・そして短い・・・。

ですが頑張りましたので心を強く持ってどうぞ。

第十四話みたいな雰囲気！

帰宅後、早速キャスえもんに、サーヴァント呼び出せね？　と聞いてみたら無理だった。

もう既に最後の一体は呼び出されてるらしい。

一瞬、アレ？　燕の人は？　と謎の電波が入ってきたが全力でスルー。

みんなもその辺スルーでお願いします、わかるだろ？　その辺？　ただでさえ色々アレなんだし・・・。

っと、メタ的なアレはココまでにして。

「第一回、ドキドキ、士郎、強化計画ーーー！！」

をぶち上げようと思う。

まっ、言い出したのは俺じゃなくて凛先生なんだけどな。

なんでも。

「衛宮君、アナタ、この中じゃ一番弱いのよ？　更に言うなら死ぬ確率は一番高いわ、一般人とほぼ一般人の綾子と桜は除くけど」

ってコトなんだと、いや、まぁみすみす死なすなんてこたぁしねぇーけど。

で、薄々はそうじゃねぇーかなぁと思ってたっぽい士郎君も、納得したのか、ノリ気な感じ。

で、士郎君、強化プランとして、魔術とか関係は、凛にイリヤにキャスえもんが担当。

「戦闘関連はどうする？　俺とクソジジイ方式でイクか？　もしくは俺とセイバー方式」

「どう違うんだよ？」

「ふむ・・・俺とセイバー方式は・・・まっ見た方が早えわな、つうわけでセイバー」

「はい、何時ものルールですね」

俺の声に反応するセイバー、まっ何時ものつっても、まだそんなに回数こなしてるわけじゃねぇけどな。

まっとりあえずは道場へ移動。

そして。

「シッ、フッ、ハァ！！」

『ヒュン、ヒュン、ヒュン』

セイバーの剣をヒョイヒョイと避けまくる。

今朝に引き続き好調ですな。

『ピピピッ！！』

「はい、終わり」

「むぐぐ・・・やはり掠りもしない」

悔しがるセイバーです。

「と、まぁこんな感じでこの円の中にいる俺に攻撃当てるっつう感じ？　逆でもいいけど」

「あっああ・・・わかったけど・・・マサよくアレを避けられるな？」

「反射神経には自信あっからな」

「見てかわしてたんですかっ！？」

おっ、なんかセイバーがビックリな反応。

「まぁ普通はあんだけ速けりゃ読みで避けんだけど俺ぁ目で見てかわしてる、そっちのが確実に避けられっしな、あっでも普通の人にはオススメはせんぞ？」

まず、ほぼ確実に当たるし。

「人外バンザイな反射神経があれば別だけど」

「人外バンザイって・・・自分で言うなよ」

「自覚があるってこってすよい」

文字通り人外バンザイだからな、じゃねぇーと、とっくに死んでるし感謝感謝。

「そっそうか、それじゃ、もう一つの方式ってなんだ？」

「ふむ・・・朝、昼、晩、俺かセイバーかバーサーカーに喧嘩を売れ」

「はっ？」

「だから、俺かセイバーかバーサーカーに喧嘩を売れ」

二度目。

「なんでさ」

「俺はそうした、朝、昼、晩とジジイと喧嘩、死にかけるけど強くはなると思うぞ？　小学生時代でさえクマとタイマンして勝ったからな俺」

「しょ小学生でクマ！？」

「小学生・・・無茶苦茶ですね」

寧ろ勝負させられたコト自体が無茶苦茶だけどな。

「まっようするに格上とやりまくって経験値をドッサリいただこうってことだな、今言った三人以外にも格上揃いだし、より取り見取りじゃん？」

ライダーにバゼットもいるし。

凜は・・・確か中国拳法使えるつってたから、そこそこ接近戦もこなす・・・と思う。

「あっ、後ジジイ方式はアレだから、死なきゃいいや方式でもあるからな？　地面に転がされた上に顔面に踵とか普通に落とされるから」

「いっ！？」

「とどめまでキッチリと・・・とうことですか？」

「そっそ、まっ、流石にそこまではしねぇーけど、でも骨折くらいは覚悟するべし」

いくらなんでも死ぬかもしれんし、最初からそれは厳し過ぎだしな。

まっ俺は初っ端からそんなんでしたけどっ！！

っと俺ンことは置いといて。

「さぁどっち？」

「えと・・・じゃあ、マサいいか？　手合わせ？」

ほほう、ジジイ方式か、まっ初日だし軽くしよ。

もしもの場合もキャスえもんが居るしな。

「むっ・・・シロウ、何故マサナリなのですか？」

おう？　なんかセイバーが士郎にいちゃもんつけてるし。

「いやほら、セイバー、女の子だし・・・女の子に攻撃するのは・・・それに女の子が戦うっていうのも」

フェミニストだねぇ士郎君、けど、その一言、セイバーはお気に召さんかったようだ。

「それは、私を侮っているということですね？」

コメカミをヒクつかせながら言うセイバー君。

どっかで聞いたセリフだけんど、そりゃナメられたらムカつくわなぁ。

「いっいや、そうじゃないって、ただほら、セイバーだって女の子なんだし」

既に精神的に負け気味な士郎です。

「戦いの場において、そのような甘いことは通用しません」

うむ、最もっちゃ最もだな。

よしっ！！

「選手交代、俺に代わりセイバー、ボコにしてしまえ」

「むろんです、まずはその考えから叩き伏せましょう！！」

ジャキッと見えない剣、じゃなく竹刀を構えるセイバー。

「えっ？　ちょっ待てって、マサが相手じゃ」

「問答無用、ファイッ！！」

・・・・・

「・・・・・・」

道場の床に横たわる士郎。

「返事がないただの屍のようだ」

「いっ・・・生きてる」

言ってみただけですよい。

コレ見てわかる通り士郎君、セイバーにベッコベコにされてました。

もはやアレは特訓じゃなくてヤキ入れのレベルだった。

「わかったかねレベルの差というモノが、士郎とセイバーじゃアレだ、赤子とゴリラくらいの差があるんだぞ！！」

「あのマサナリ、ゴリラ扱いはちょっと・・・」

流石にカンベンしてもらいたいらしい、女の子だしね。

「じゃショウリョウバッタと仮面バッターくらいだっ！！」

かたや昆虫、かたやヒーロー、同じバッタスタートだけど、この差はデケェぞぉ。

最近はバッタじゃねぇみたいだけど。

この例えにはセイバーかなり満足気、つか知ってたんだな？

一方士郎君は。

「い、言い過ぎだろ・・・」

と更にガックリなってまいました、それでもなんとか気持ちを立て直し、同時に体も起こした。

そんな士郎君に。

「まっ女の子だろうが、なんだろうが強ぇーヤツは強ぇーんですよい」

某、宇宙っ娘しかり暗殺者しかり。

この二人、俺の中でもかなりランク高いッス。

多分、普通にセイバーとかとやり合えるくらいには。

「むぅ・・・」

そんな俺の言葉を聞いても微妙に納得しきってない顔の士郎君。

意外と古風な考えを持ってるやもしれん。

が、しかし。

「後で凛に士郎がやれヒンヌーだのやれパチモン優等生だの色々と言ってたって言っておこう」

切り札投入。

『バッ！！』

「スイマセンでしたーーー、女の子でも強いです！！」

惚れ惚れするくらいに見事な土下座だった。

流石は切り札マジカル凛、名前を出しただけで戦意をねこそぎ持ってきやが・・・。

『ヒタリッ』

背後から肩に手を乗せられた、振り向くと。

「まぁ凜さんいらしてたのね？」

ステキな笑顔の凜さんでした。

「裏へ来い！！」

道場裏に連れてかれて、恒例の。

『ドン、ドン、ドン！！』

ガンドの雨をいただきました。

後、今回は何故かセイバーも参加で。

『ヒャバババ』

と乱れ斬られた。

『ガキン、ガキン、ガキン！！』

まぁ効かないんですけどねっ！！

・・・・

続いて魔術パート。

ツマり座学的な感じ、ちなみに参加者は士郎に桜、興味本位で俺

も参加。
先生はさっきも言ったみたく、凛にキャスター、後、イリヤも興味があったのか覗きに来てる、あっさっきのセイバーのヤキ入れでついた士郎のケガはキャスえもんが治してくれたぞ。

「士郎が委員長な？　ほれ号令」

「はっ、ちょっなんでさ？　っていうか委員長ってなにさ？」

「いや、まずは形から入ろうかなぁと」

「あっああ、よくわかんないけど、わかった、ンッン・・・起立」

『バッ！！』

「礼」

「お願いしまーーす！！」

「えっ、あっ、お願いします」

「着席」

士郎の号令に合わせて席・・・じゃなくて座布団だけどに座ります。

そんな俺達を見て、意外にも満更じゃなさそうなのメガネ装備な凛。

キャスターはノリノリな感じで、どっから持ってきたのかスーツ&指し棒装備。

そしてイリヤは・・・。

「何故にブルマ？」

「弟子一号のロリブルマだからだよ！！」

なんじゃそら？　と一瞬思ったが妙に納得した俺もいた。

つかイリヤも何処で調達したんだろ・・・ハッ！？

「士郎かっ！！」

「うん士郎のタンスの二段目に入ってた、サイズもバッチリ！！」

流石はイリヤ、咄嗟に合わせてくれたわい。

「先輩・・・ああいうのが好きなんですか？　言ってくれれば私も・・・」

「ちょっ桜！？　デタラメだから」

「衛宮君、人の趣味にとやかく言うツモりはないわ、けど・・・地球から冥王星辺りに移住してね？」

「だから、なんでさーーー！！」

うむうむ、ホント士郎君すっごく良い感じ！！

とか思いながらもひっそりとブルマを着用しようとしていたキャスターにコラッてしておきました。

ホントどっから調達してきたんだろコイツら？

という疑問は全て士郎のタンスの中にあるということにしたら、やっぱり殴られて士郎が手を痛めた。

そんな感じでコチャコチャありつつも、落ち着いたころに魔術講義が始まり・・・。

「気付いたら終わってた」

「アンタは開始二分で寝てたでしょ！！」

はい凜にコラッてされたように始まって即効で寝てました。

だって何言ってんのが全然わかんねえんですもん。

いや最初は頑張ろうとか思ったんだけど・・・スマン嘘付いた、無理と判断してから寝るまでほぼノータイムだった。

次から参加を見送ろうと思う。

そんな事を考えつつも士郎と桜はどうだったんじゃろか？　と二人を見たら、桜はまぁ普通だったが士郎が何やら顔を赤くしながら。

「ハァ・・・ハァ・・・うっ・・・」

ってなってた。

咄嗟の判断でイリヤを背中で庇い。

「今まで冗談で言ってたが・・・まさかマジとは・・・クッ、イリヤ俺の背中から出るなよ！！」

「うっ・・・うん！！」

ってやったら、士郎じゃなくて桜にめっさ怒られた。

なんでも魔術を使うには魔術回路ってのが必要らしく魔術師の人らは、その魔術回路ってのを造る普通は一度造るとスイッチをＯＮ、ＯＦＦするみたく切り替えて魔術を使う。

で、士郎君はＯＮ、ＯＦＦじゃなく、魔術を使おうとする度に一から造り直してたらしい。

それを聞いた凛とキャスター、イリヤ、呆れながらもスイッチを造る為に何やら飲ませたら、副作用でこうなってるらしい。

「日射病みたいなもんか・・・いや士郎スマン」

「ごめんね士郎」

流石にちょっと悪いと思ったんでイリヤと二人で謝った。

「ああ・・・別にいいよ・・・普段から押さえてくれれば」

徐々に調子が戻ってきた士郎にそう言われた、やっぱし士郎君は良いヤツだった。

だがしかし。

「「それは約束しかねます」」

「なん・・・でさ」

コレばっかしは譲れない俺とイリヤでした。

だってスッゴい面白えんですもん。

そんなこんなで士郎強化計画初日は終了したのでありました。

第十四話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

燕の人・・・ホント、スイマセン。

もう、なんというか・・・ホント、スイマセン。

っていうか全般的にスイマセン。

次回は・・・また長くなるやも・・・ホントスイマセンです。

ですが頑張っていきたいと思いますので、更新の際には覗いていただければ嬉しいです。

感想などありましたら是非！

第十五話みたいな雰囲気！（前書き）

前書き

何とか更新です。

また例によってアレですので強い心を持ってどうぞ！！

第十五話みたいな雰囲気！

早朝５時、いつもよかチクッとだけ早い時間帯の起床。

理由はむろん言わずもがな。

「朝特訓だ！！」

「気合い入りまくってるなマサ」

「こういんは気持ちが大事だからな、キモチガダイジョ～」

「後半で大分、力が抜けてしまいますね」

前回の凛に続きセイバーも外国っぽいのはダメらしい、実に残念だ。

あっちなみにメンツは昨日やった特訓、体力編と同じで俺、士郎、セイバーな？

ン？　おっ！？　こっそりバーサーカーが覗いてるな。

他のメンツは今はまだ寝てる・・・のか？少なくとも凛とイリヤに関しては寝てるだろうな。

まっ今はそれは置いておいて特訓特訓また特訓だ。

「つうわけで、残りのサーヴァントの役職が・・・アラジンと・・・

」

「アサシンとアーチャーです、アラジンって何処のアラ〇アン・ナ〇トですか」

「軽いボケですがな」

いや、ホントはわかってたよ？　マジで、つかセイバー知ってたんだな、有名だものな？　アレ・・・っとイカンイカン、若干ズレた。

「アーチャーは、まぁ何となくわかっけどアサシンって、どんな感じの闘い方すんだ？　常に気配消して後ろに後ろに回ればいいんか？」

もしくは、髪やら手やらを刃物にしたり某宇宙の暗殺っ子的な？

いや流石にない・・・か？　多分。

「なぁマサ、ちょっと聞きたいんだけどさ、それが俺の鍛練と・・・あっ！？　そういうことか・・・」

「うむ士郎君は非常に察しが良いのう、そう、俺がソレっぽい攻め方したろうかい！？　みたいな？」

「マサナリは無手ではなかったのですか？」

「まっそれなりに器用だから使えと言われりゃ使えなくもねえよ？」

完全に見よう見マネだけどな。

「見よう見マネ・・・ですか？」

むっ、なんだセイバー君、その、うさん臭そうなヤツを見る目は。

マサさんナメるなよ！？

マジで意外と色々こなすと評判なんだからね！？

やっぱ、ちょいキモいなコレ。

まっいいさね、とりあえずセイバーのうさん臭いヤツを見る目を辞めさせる為に・・・セイバーのマネ！！

じゃあ普通過ぎっし、どうせ後でセイバーはセイバーで士郎君に特訓つけるわけだし、どうせならこの場所にいないヤツがいいわな？

それも二人が知ってるヤツで、つうことになっと・・・やっぱアイツだわな？

つうわけで・・・道場にあったホウキを持ち構える。

「その構え・・・ランサー・・・ですか？」

「あっああ確かに似てる」

うむ二人が言う通りランサー君のマネです。

「まっ一度やり合ってるし全部が全部同じってわけにはいかねえけど、ある程度はソレっぽい動きも出来るぜ？」

ランサー君もあの時は本気じゃなかっただろうけどな。

「ですが構えが似てるとはいえ動きまで似てるとは・・・」

「まっセイバー君の言うこちゃ最もだわな、じゃ軽く打ち合ってみっか？　その後、士郎な？」

つうわけで、まずはセイバー君とやり合ってみます。

士郎君は見学。

「多分、最初は目が追っつかないだろうけんど、そこはずっと見てりゃ慣れるはず多分」

と士郎に言ってからセイバーと向かい合い。

「準備はおけ？」

「はい」

あっ一応は言っとっけど今回は俺が使うのがホウキってこともあってセイバーは竹刀を使っとります。

説明はそこそこに。

「じゃ・・・イクぜぇッ！！」

ホウキ槍を突き出した。

・・・・

セイバー視点

「クッ！！」

『バシッ』

迫る槍を手に持つ竹刀で横に逸らす。

正確には槍ではなくホウキではありますが。

「オラオラオラァァァ！！」

間合いを保ちながら更に突きを放つマサナリ。

荒々しく見えながらも的確にコチラの大勢を崩しにかかる、その動きは以前に闘ったランサーの動き非常に似ている物があります。

なんて器用な・・・あのランサーの動きをコレだけ模倣できるとは・・・。

マサナリはランサーのクラスにも慣れたかもしれませんね。

槍を捌きながらも、そう考えている私に。

「ほれ考え事は後にしれ～」

気の抜けるような声ながら、その声とは裏腹にその攻めは決して気の抜けるような物ではない。

フッ・・・何時ものマサナリに剣を当てるという鍛練もそうですがコレはコレで私にとって良い鍛練になりそうですね。

・・・・

マサ視点

「えっと・・・俺の特訓だったよな？」

「いやさスマン士郎、なんかテンション上がっちゃって」

「すいません士郎、どうも熱くなってしまい・・・」

はいアレから俺とセイバー君、なんかテンションメーターがギュンギュンしてまいまして結局、朝メシを作る手前の時間帯まで打ち合ってまいました。

大体、時間にして一時間ちょい。

で、朝メシを作る時間帯になったんで手合せ終了したら、恨めし

げに、つうかションボリ気味な士郎君に。

「俺のこと忘れてたろ？」

って言われてまい、平謝り中。

「いやね、忘れてたわけじゃないよホント？　一応は次の特訓方法も考えてたし？」

「そっそうか・・・いや、完全にほって置かれてたから」

そこはスマンて、つかセイバー君に限ってはマジですっぽり抜け落ちてたかもしれんけど、だって士郎君のホッとした顔を見てごっさ目を逸らしてるし。

指摘はしねえけど紳士だから。

「で、そ、その特訓の方法とは？」

吃ってるなセイバー・・・まぁ紳士的にスルーしつつ。

「特訓つうか・・・アーチャー対策？　と半々くらいだな」

アサシンが来る可能性があっけど、とりあえずは攻め手が大まかに予測出来そうなアーチャーで。

「アーチャー対策？」

「うむ、コレに関してはみんなに協力してもらう、詳しくは朝メシ

の時に話すわ」

「いや藤ねえが」

あっ、だったな大河がいるんだっけか？　まっ大丈夫だろ。

「特訓つっても、そこまで危険じゃねえし、見ようによっちゃ遊びに見えなくもねえしな」

「遊び・・・ですか？」

「それって大丈夫なのか特訓として」

「まぁまぁ、確かに半分くれえは思いつきだけんど、それなりに役に立つ・・・と思う」

多分、きっと、メイビー。

・
・　・
・　・　・

で朝メシ時、みんなで美味しく食べてる中、俺が考えた特訓の詳細を話す。

特訓の内容は俺が用意した小さめの水風船を士郎以外の各自に持たせてスキあれば士郎に当てろ！！

ってだけの話し。

「へえ～、面白そう！！　私も水風船、何個か欲しい～」

「おけ、士郎が弛んでると判断したら投げ付けちゃって！！」

「ふっふ～ん、チョークや竹刀に変わる新たな武器ゲットねっ！！
士郎ビシビシいくよ」

「ふ・・・藤ねえまで・・・」

大河はノリが良かったんで参加する流れになりました。

まっ、なんの為にするかは言わなんだけど。

「あっ、そうそう、コレ罰ゲームつきだから」

「えっ？　濡れるのが罰ゲームじゃないんですか？」

「まっそれも罰ゲームに含まれるっちゃ含まれっけど、それだけでは足りんのでな」

「罰ゲームって、どうせまた下らないことでしょ？」

まっ確かに下らないっちゃ下らんが、ある意味かなりキツイ。

「マサ、その罰ゲームって何するんだよ？」

「うむ、士郎がそうね・・・今日は初日だからとりあえずは１０回だな、１０回、水風船に当たったら・・・」

「「「当たったら？」」」

「教室で菓子パンマン体操をふりつきで歌ってもらう！！」

そう顔にアンコが詰まった某国民的な菓子パンなエンディングのアレね。

「はっ？　えっ、ちょっ・・・なんでさ！！」

「罰ゲームだから、ちなみに、かなりマジでやってもらう、照れ照れしながらやったらアゲインだ！！」

「それはまた・・・キツイわね、肉体的にじゃなくて精神的に」

ある意味、精神の鍛練にもなるぞ、もうちょっとや、そっとじゃ折れない心が身につくはずさ。

「あの・・・撮影って有りですか？」

おいおい桜君や撮影ってオマエ・・・流石に撮影は・・・ン？撮影・・・撮影か・・・フッ。

「有り有りだ」

「ちょっなんでさ！？　いくらなんでも撮影は」

「ほう士郎君や毎度のように見捨ててくれたのは何処の誰でしたかな？」

あのよくわからん撮影会のことね。

「うっ・・・ね、根に持ってたのかよ」

当然ですとも、持たないわけがないだろうに、マサさんは、ねば～っとしてるからな。

「まっアレだ士郎君、ようはだ・・・１０回当たらなきゃ良いんだぜ？　そうだな、もし１０回当たらなかったら俺が菓子パンマンする、どうよ？」

「そっそうか、マサもリスクを背負うのか・・・だったら、わかった、やるよ」

フッ・・・バカめが、確かにリスクを背負ったように見えなくもねえがな、いざとなったら俺が１０回当てれば良いこった。

士郎に水風船を１０回当てることなんざ武装ゲリラを叩き潰すよかちょろいことよ。

つまり、結局のとこ俺に負けはねえってことだ。

フハハハハ！！

・・・

・

で、結局、大方の予想通りに。

「菓子パンマンはキミさ～～～～♪」

を歌い踊ることになった士郎君でありました。

つか士郎君・・・音程かなり外れてるぜ、二重の・・・濡れるのを含めたら三重の意味での罰だった。

そんな士郎君を熱心に撮影する桜君、後で着メロにするそうです。

コレが愛ってやつか・・・。

その後、士郎君の菓子パンマン体操を見てた一成がめっさ深刻な顔で。

「え、衞宮・・・な、何があった、悩みがあるなら聞くぞ？」

って聞いてた、一成めっさ良いヤツです、ただ俺はその隣で爆笑してたけど。

むろん士郎に殴られた、士郎が手を痛めた。

「クソウ・・・絶対にいつかギャフンて言わせてやる」

「ギャフン！！　満足か？」

「・・・絶対にぶっ飛ばすッ！！」

めっさ怒った士郎に追い掛け回された。

まっいつかの凛の般若顔よかスリルは少なかったけどな。

その後に一成に。

「政成は凄いな」

「ホワッツ？」

「まだ衛宮と出会って日は浅いのだろ？　なのにアレ程に自分を出させている・・・衛宮はな、どうにも自分を殺してしまう所があったのでな、心配していたが、この調子なら心配はなさそうだ、衛宮の友として感謝する」

バッと頭を下げられた。

「俺ぁ好き勝手にやってんだけなんだけどな～？」

「その自然体が良いのかもな、俺も見習うとするかハッハハ」

う～む、やっぱりどこと無く修行僧っぽい、でもやっぱ良いヤツだわな。

あっそうそう一応言っとくが遊んでばっかじゃなくて用務の仕事もキッチリこなしてっぞ。

つかサクッと終わらせすきで寧ろヒマな状態。

士郎弄りも一段落ついたし、そろそろ凛のクラスに襲撃をかけるべきか？

多分めっさ怒るだろうけども・・・。

それでも・・・それでも俺は・・・。

「行かなきゃならねえ、凛をからかう為に！！」

「廊下の真ん中で堂々とふざけたこと言ってんじゃない、このバカタレーーー！！」

偶然にも凛が近くにいたらしい、まっホントは気付いていたけども。

「いやね最近ほら、士郎でばっか遊んでたから、そろそろ凛で遊ぼうかと？」

「私で遊ぼうとすんなっ！！　大人しく衛宮君で遊んでなさい」

「そう言われると余計に凛で遊びたくなる不思議、つうか・・・めっさ注目されてるぜえ？」

凛のツッコミの声がそこそこのデカさだったんで、すわっ何事かと生徒のみなさんの視線が集まっておりまする。

「なっなんでもないわよ～～～マサちょっと来い！！」

例によって物陰に引きずられそうになるが、今回の俺はココから違うぜ！！

「ちょっ止めて下さい凛さん、ホント俺、金なんてないッスから、ホントにカンベンして」

「アンタ、それ以上喋ると令呪使ってこの場でストリップさせるわよ」

「マジスンマセンしたァァァ！！」

久々に全力で頭を下げた。

なんつう恐ろしい事を・・・いや、まぁその令呪とやらが俺にホントに効くのかはわからんが、もしホントに効いてしまったらと思うと謝らざるえねえです。

物陰に連れてかれた後、恒例のガンドを頂戴し追加で。

「ほらヒマならコレを解いてなさい」

「なしてプリント」

「綾子に聞いたのよ、コレ解かしてる間は少しは大人しくなるって、

それにアンタだって元は学生でしょ少しは勉強しなさい」

ツンデレな人は委員長的な属性も兼ね備えてるものなんだろうかと思う今日この頃。

バッタモンくさに凛にも備わってたらしい、バッタモンのくせに・・・。

「はい追加」

「マジ、スンマセン調子こきました、追加はカンベンしてつかぁーさい」

心の声を読まれたっぽい。

クソ、マジカル凛め、マジカルパワァを無駄に使いおってからに!!

その声も読みとったらし結局、追加された。

仕方ないんで廊下に隅っこの方にダンボール机を設置しカリカリトライ。

即効で詰まりました。

「無理だってマジ、マジ無理・・・数学にアルファベットを持ち込みとか意味わかんねえよ、アルファベットは英語だろうよ」

「マサ、何してんだ？」

廊下を通りかかった士郎に声をかけられた。

「凛にプリント渡された、サッパリわからんけど」

「そっか、だったら俺が教えようか？　コレくらいなら俺でも解るし俺達のクラス今自習だから俺達のクラスの空いてる机を使えばいいよ、ダンボールじゃキツイだろ？」

「し、士郎きゅん・・・」

あんだけ、からかったのに・・・なんて良いヤツ。

かなりキュンってなった。

危うく惚れるとこだったぜ・・・。

士郎に連れられてプリントを教えてもらいながら過ごしました。

士郎君のクラスメイツも良いヤツらだった。

プリント？　なんとか空欄は埋めることは出来たと言っておく。

・・・・

後、少しだけ続くぜえ。

つうわけで学校が終わり帰宅。

士郎君の特訓、第二部です。

「じゃ士郎君や朝、俺がやってたみたくランサーのマネして攻めっから、何とか捌け、最初はスピードを抑えるけど叙情に速くしてっからな？」

「あっああ、打ち込めると思ったら打ち込んでもよいのか？」

「構わんよ、打ち込めたら・・・ン？　そだ、わざと打ち込めそうなポイントを作っからそれも見切れ」

「そんな器用なことまで出来るんですか？」

「まぁな、だが、打ち込めそうだからつって打ち込めるとは限らないとも言っておこう」

「なるほどな・・・罠の可能性もあるってことか？」

士郎君ホントに察しが良いな。

「まっそういうこった、じゃやるべえ？　あっ俺の後は直ぐにセイバーが控えてるからな？」

「いっ！？」

「スタミナも付けないとイカンしな、こういう荒事はスタミナが重

要だからな、有れば有るだけ有利になるんさね」

とマサさんは思ってるわけです、やっぱしぶといヤツが有利だろ。

「そうですねマサナリの言う通り、戦いの最中に体力が切れた、といって相手が待ってくれるわけではありませんからシロウ頑張って下さい」

「あっああ・・・よしっやるか！！」

「おっしゃ！！」

と士郎君、特訓第二部を行いました。

もちろん、その特訓でついたキズはキャスえもん印のキズ薬で治したぜ。

特訓の後は士郎は魔術の座学に。

ちなみに桜も昨日に引き続き参加してるらしいが、先程まで士郎の菓子パンマン体操のビデオを編集をしてました。

めっさ楽しそうだった。

士郎がガックリなってたけど。

頑張れ士郎、負けるな士郎！！

多分、明日も披露することになるだろうけどねっ！！

第十五話みたいな雰囲気！（後書き）

後書き

もう、ｆａｔｅっぽいこと全然してない・・・ただ学校でキャッキャしてるだけ。

コレからもこんな感じでしょうけど。

そんな話ですが次回・・・遅くなるやもですが、次回もおヒマなれば見てやって下さい。

感想などもありましたれば是非！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9959k/

来る世界（とこ）間違え・・・いやそうでも・・・いややっぱ間違えだわ！

2011年5月30日19時15分発行